天使は甘美な夢を見る

amnesia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使は甘美な夢を見る

【Ｎコード】
Ｎ９３５０Ｊ

【作者名】
ａｍｎｅｓｉａ

【あらすじ】
――なんだか長い夢を見ていたような気がする。
神をも越える力を持つ何か、大いなる存在は、何もない広大な空間――無限の時の中にいた。
暇を持て余したその存在はふと、ある遊びを思い付いた。
「この空間の中に小さな世界を作って生命を吹き込んでみよう。生命が姿を作ったら、私もその姿を借りて降りてみよう――」

完成した世界に降りた大いなる存在は、自らが無意識のうちに何かを隠していることに気づく……

狂いはじめる世界。そして奇妙な音の正体とは？

一第一章一　プロローグ

科学の力が支配する人間界。魔法の力が支配する天上界。二つの世界は対を成し、それぞれを夢と現と表した。
世界が違うといえども、夢と現は紙一重。夢も現となりうるし、現も夢となりうるのだ。それらが織り成す究極のファンタジー。
今回はそれらの世界の中で楽しそうに遊ぶ、神をも超える力を持つ何か、大いなる存在の物語。

なんだか、長い夢を見ていたような気がする。
それもそのはず。私は無限の時の中にいる。いつから私が存在し、いつからこの空間があるのかさえ覚えていない。
そろそろ何もない、この空間にも飽きてきた。そうだ、この空間の中に小さな世界を作って、その中に生命を入れてみよう。無限の時の中で生命は一体どんな姿に形を変えるのだろう……面白そうだ。生命が姿を作ったら、私もその姿を借りて降りてみよう――

大いなる存在

天上界、静かに風が吹き抜ける、どこか神々しい空気の漂う建物の屋上。一つの庭園程の広さはありそうなそこに、それは居た。

腰まで流れるライトオレンジティーの髪。聖女のように穏やかな、しかしどことなく狂気を感じるような顔立ち。天上界では珍しい、シンプルな真紅のドレス。

「何をしていらっしゃるのですか」

そこへ一人の女神が近づいてきた。

長い亜麻色の髪。優しそうな顔立ちに、真っ白の肌。地面に付いてしまうほど長い裾に金の刺繍が施された、純白のドレスを着ている。

彼女の名はフレイア。人間界では『愛と美の女神』と呼ばれている。比較的高位に位置する神であるため、低位の者と比べると、持っている力は相当のものだ。それほどの神でさえも、そこにいる存在の名前を知らないのだ。

「見ているのよ。あなたの未来を……」

振り向かずに、大いなる存在が答えた。

「まともに答えてくださるなんて珍しい。また『ボイルした時計の皮むき』と、お答えになると思っていたのに」

ふふっ、とフレイアが含み笑いをする。

「今は女神の姿をお使いになっているのですね。今は何と言うお名前で？」

「あら、気づいてたのね。もう少し正体を隠して遊んでやろうと思っていたのに」

少し意地悪な笑みを浮かべて、大いなる存在は言った。

「私ほどの力を持つ者は皆、あなたの持つ大いなる力を感じ取ることができるはずです」

そうだったわね、とため息交じりにどこか遠くを見るような眼を

して、彼女は答えた。
「ルージュよ」
「相変わらず、生命ではない名前をお選びになるのですね」
ルージュは存在ではあるが物体ではない。大いなる存在であるが故、彼女は決められた型に収められるのを嫌う。彼女は望んだときに、望んだ場所に、望んだ姿で存在することができる。少々気まぐれな性格だが、それが彼女なのだ。
生命の名前を付けてしまい、それが多くに認識されてしまうと、彼女はその型に押し込められて、抜け出すことができなくなってしまう。その存在が固定されるという、一種の支配に似たものを、彼女はひどく嫌うのだ。
しかし、この世界にいる以上、何らかの形を持たなければならない。そこで彼女は今、最低限の型を作り、自らを『ルージュ』として維持しているのだ。
「流石に少しは名前を知ってもらわないと」
「存在を維持し続けるのが難しいのですね」
フレイアが、知っていますと言わんばかりにルージュの話を遮って続けた。
「……何か来る」
不意にルージュが呟いた。

ここは天上界七大都市のひとつ、ハルモニア。この世界には七つの大きな都市がある。これらの都市にはそれぞれ都市を代表する高位の神が存在し、都市の名前もそれらに因んだものとなっている。
しかし、『調和』を意味するハルモニアには唯一、そういった神が存在しない。その名の通り、全ての者が誰の支配を受けることもなく、自由に暮らすことができる。さらには、都市全体が巨大な魔方陣を描いていて、そのような神が存在しなくとも、あらゆる厄災を退け、安寧を保つことが出来るようになっているのだ。

彼女、ルージュはあくまでも傍観者である。できる限りこの世界の秩序を乱さぬように、何より快適に傍観が楽しめるように、彼女はこの都市に居座ることに決めたのだ。
その都市に今、何かよくないものが来るという。ルージュが呟いた数時間後、地平線の向こうから一つの影が現れた。
「ポセイドン……」
そう言うなり、フレイアは言葉を詰まらせてしまった。

天上界七大都市、ポセイドニアを治めている神、ポセイドン。人間界では海の神と呼ばれている存在。性格はやや粗暴で、愛情豊かで親切である半面、気分屋で闘争好きだ。海を渡る人間達に恩恵を与える一方で、気が変わると嵐を起こし、船を難破させる。
「大地を揺るがす者。個人的には好きじゃないわ」
「どうしましょう……私の力ではポセイドンには勝てません。もしそうなってしまえば、この都市もポセイドンが支配権を握ることに……」
「私がそんなことをさせるとでも?」
フレイアが一瞬、驚いた顔をしてルージュを見る。
「私はこの調和が気に入ってるの。私の快楽を奪う者は許さない」
遊んでくるわ、と楽しそうな笑みを浮かべて言った瞬間、ふわっ、という音とともにルージュは消えた。
「よいのでしょうか……」
しかし、フレイアは彼女のことを心配するようなことはしない。
なぜなら、たとえどのような厄災が降りかかろうとも、彼女にとってはちょっとした暇つぶしにしかならない、ということを知っているからだ。

大地を揺るがす者

さらさらと風が吹き抜ける静かな草原。そしてそれを乱さんとする一つの影。
真っ白な髪と長い顎の髭。威厳を感じさせる、壮年の顔立ち。銀色の軽い鎧。真っ赤なマントを風になびかせ、手には先が三つに割れた、三叉の鉾を持っている。この存在こそがポセイドンである。
「『調和』……か。実にくだらん。天上界は力こそが全て。守護神を持たぬなど、愚の骨頂、愚かさの結晶よ」
高笑いをするポセイドン。
「みじめな存在ね」
そこへ一人の女神が現れる。
「……フレイアの仲間か。畏怖(いふ)する心を知らぬ低俗な者が、一体何の用だ」
ルージュを蔑ろにするような目で見る。
「底辺を這いずる者を見ておくのも、たまにはね」
「ふんっ、世迷言を。力を持たぬ者など、風の前の塵に同じ。この世界は力こそが全て、力があれば何でも手に入れられる」
「力で買えるものにしか相手にされなかった、の間違いでしょう？」
ポセイドンが顔をしかめる。
「フレイアはあなたよりも強いわ」
「戯言を」
「あなたは魔法の本質を理解していない。それが理解できない愚かな存在は皆、あなたのように自らを過信して勝手に消えていく。本当に哀れね」
「よいだろう……どちらがみじめな存在か、試してみれば一目瞭然」
そう言った直後、ポセイドンから凄まじい勢いで魔力が溢れ、風のようにルージュに吹き付け、髪とドレスをなびかせる。
「……つまらないわ」

「まだ言うか。よいだろう。それ程死を望むというのならば、与えてやろう。『テンペスト』」
両腕を広げ、ポセイドンが魔法名を言う。と同時にポセイドンの左右後方から竜巻が現れる。それらは地面を掘り起こし、巻き上げながら真空の刃となってルージュに襲いかかる。
「無へと帰すがよい。死ね、低俗な者よ」
竜巻はルージュのすぐ目の前まで来た。この時、誰もがルージュの死を予想した――
「消えなさい」
ルージュがそう言った途端、先ほどまで轟々と音を立てていた巨大な竜巻が、ひゅるひゅると言いながら消えてしまった。
「戻りなさい、あなたのあるべき姿に」
次は地面に向かってそう言った。次の瞬間、そこにあるのは先ほどまでと全く変わらず、風の吹き抜ける静かな草原。
「なんだ、この力は……」

驚いているのは、ルージュが先ほどまで居た所から、望遠の魔法『オシリス』を使ってこのやり取りを見ているフレイアも同じだった。
それもそのはずである。通常、魔法を使うときは必ず詠唱を行うか、魔法名を唱えなえ、特定の動作をしなければ魔法は発動しない。しかしルージュは、そのいずれかをすることもなく魔法を使って見せたのだ。

依然としてルージュは、ポセイドンの前に現れた時と同様、腕組みをして一歩も動かず、長い髪とドレスの裾をなびかせながらただ立っているだけだ。
「小癪(こしゃく)な。ならば……凄惨にして蒼古なる雷よ、今こそ我が敵を焼き尽くせ！」
半ば叫ぶように詠唱をして、両手を前に突き出す。ポセイドンが

使える、一番位の高い魔法だ。本来ならば、次の瞬間には天から巨大な光の帯が降りかかるはずだが……

「自分が無力だと気づけないほど愚かなのね」

現れた時からその場を一歩も動かず、詠唱も、魔法名を唱えることもせず、ただ立っているだけで見たこともない魔法をいとも容易く使いこなし、自分が絶対的な自信を持っていた究極の魔法でさえも消してしまう。

その存在を目の前にして、もはやポセイドンは何も言えず、ただ茫然と立ち尽くすことしかできない。

「魔法とは、大いなる存在に奇跡を乞うこと。常に感謝の心を持ち続ける、清らかな者にのみ、魔法の力は与えられる。それがフレイアとあなたの違い。私は指一本で、いえ、何もせずとも、あなた程度の魔力なら全て奪えるのよ。しかし私はそれをしない。なぜだか分かる？」

「……我に、慈悲を乞えと言うか」

「いいえ。違うわ。ひとつはこの世界の秩序を乱さないため。もうひとつは――」

一瞬、時が止まったような感覚に陥る。今まで彼女が隠していた『大いなる力』が一気に溢れ出しているのだ。

「面白いから」

不敵な笑みを浮かべて放ったその言葉はやや挑発ともとれるが、今のポセイドンを戦慄の奈落へと叩き落とすのには十分すぎるものだった。

「帰りなさい。在るべき所へ」

ふわっ。ポセイドンは何かを言おうとしたが、有無を言わせず彼女の力で、強制的に元の場所へ瞬間移動させられてしまった。

気配

ふわっ。
「お帰りなさい」
「まあ少しは楽しめたわ」
「ふふっ。相変わらずですね。ところで、少し伺いたいことが……」
「私が詠唱も、魔法名を唱えることもせず、魔法を使ったことが不思議なんでしょう？」
「なっ……」
フレイアが一瞬、目を見開いた。
「私の眼は全てを見通すことができる。過去も未来も、あなたの心も」
驚いているフレイアをよそに、さらにルージュは続ける。
「私は全てを知っている。だけどそれは全てではない。私が全てを知った次の瞬間には、また別の何かが始まっている。私がまた全てを知っても、また次の瞬間には……だけど大丈夫。あなたになら理解できるわ。私の使う魔法の原理も、私の本質も『全て』ね。前に言わなかったかしら。」
「不思議ですね。あなたに言われると、本当にそうなるような気がして……」
「当然でしょう？　私は真実しか言わない」
またあの意地悪な笑みだ。
「ところで、人間が使う時間の流れの表し方で言うなら、あなたと出会ったのはどのくらい前だったかしら」
「ええ。確か四千三百年くらい前だったかと思います。」
「時の流れは意外と早いものね。そう言われてみれば、今までにたくさんの出来事があったわ」
「あなたは、いつの時代からこの世界で生きているのですか？」
「忘れたわ。年を数えなくなってから相当の年月が経つから」

天上界に生きる者は皆、位によって違いはあるものの、人間とは比べ物にならないくらい長寿である。さらに、人間のように時の流れを気にしながら生きる存在ではないため、自分の年齢を忘れる者が居てもおかしくはない。
だが、フレイアはこの返事に何か引っかかるものを感じたようだ。

「あの……」
「ねえ、あなた」
しかし、それが見切られていたかのようにフレイアの発言は遮られた。
「はい、なんでしょう」
「何かの気配を感じない？」
「あなたの眼でも分からないのですか？」
「私が今まで生きてきて、こんなものを感じたことはないわ。眼で見ることができない、もっと大きい何か……」
ポセイドンが来る時はわざと『何か来る』と表現しておどかしはしたが、今回ばかりは紛れもなく、真実そのものだ。ルージュという存在でさえも思わず身震いする、『何か』
「ぞくぞくするわ。ものすごく」
「なぜです？」
「私の知らない何かが私の所に訪れようとしている。面白いわ、もっと、もっと私を楽しませて……」
もっとも、天に向かってそう言うルージュの姿は、なんの気配も感じないフレイアにとっては、奇怪以外の何物でもなかったのだが。
「あら？」
「どうかなさいましたか？」
「少し人間界へ行ってくるわ」
ふわっ。そう言い残してルージュは消えた。

通常、天上界に居る神達には人間界の秩序を守る義務があるため、

人間達が強くその神を崇拝し、慈悲を乞うなどをしなければ波長を合わせることができず、降臨することができないようになっている。
そのため、長い年月を生きる神でさえも、一度も人間界を見ることなく、生命としての活動を終えることもあるのだ。
フレイアとルージュはなんだかんだ言って長い付き合いをしているが、やはり自由に天上界と人間界を行き来する様子には若干の違和感があるらしい。
「相変わらず、不思議な方です。それにしてもこの音は……？」
一人残されたフレイアは風の吹き抜ける中、見慣れた静かな都市を見下ろしながら呟いた。
元々、神と呼ばれる存在の数は、人間界に居る、全ての人類の数と比べると極めて少ない。守護神が居ないというのもあってか、この都市に住む者は殆どいないのだ。

確実な死

一方、人間界では。

「ああ、神よ。どうして私達をお見捨てになられたのですか……」

ある村の人々は未知の疫病と災害に襲われていた。この時の医療技術では、もはやどうしようもなく、多くの者が最期の希望をかけて神に祈りを捧げている。

そして、遠く離れた高い場所からその様子を見ている影がひとつ。

「こんなにも世界が揺らいでいる。どうしてかしら……仕方ないわね」

海岸沿いにあるこの村は、空は常に暗雲に覆われていて、既に辺り一帯の全ての植物が枯れ果て、食料も底を尽きていた。

海の向こうに渡ればきっとこの苦しみから解放されるだろう、と思って海を渡ろうと船を出せば、そうはさせない、と言わんばかりに巨大な渦潮『メイルストローム』に襲われ死んでしまう。

他の村を探そうと村を出れば、巨大な竜巻や落雷などの災害に襲われ死んでしまう。なんとか病魔を逃れている人も含め、全ての人々が希望を失っている。

その時、人々の前に眩い光とともにひとつの影が降臨した。

「つかの間の世の中に、なぜこうも人は嘆き、泣きわめくのか……」

「あ、あなたは……」

「神が、神が降臨なさった！」

病魔と飢えにやられ、今にも死にそうな人々が最期の希望を得たかのように騒ぎだす。

「私達を助けて下さるのですか」

「左様。しかし助けるのは、ここに居る半分の人数だけだ。自分たちで決めるがよい。誰が生きるべきで、誰が死すべきか、を」

ここに居るだけでもざっと四十人はいる。そのうちの半分しか助

からないというのだ。神はただ、目を閉じてこのやり取りを聞いていることにするらしい。
人々は、一瞬、お互いの顔を見合ったと思うと、互いを押し退け、我先にと神の前に走り寄ろうとする。
「やめなさい」
顔がしわくちゃで、全身に青紫の斑点が現れている一人の老人が、消え入りそうな声でそう言うと、ぴたりと騒ぎが収まった。
「しかし、長老」
「このお方も長居はして下さらないだろう。より未来のある者、より助かる見込みの少ない者を助けていただこう。私はどちらにしても、もう先が短い。だからお前たちだけでも助かるのだ……どう、か、未来を、助け――」
時がゆっくりと流れているかのように、長老は静かに息を引き取った。
長い沈黙が続く。

「まずは子供だ」
村人の一人が沈黙を破った。
「その次は女だ。それから一番症状が重いお前。その次は」
「俺は症状が軽いから他の奴を優先してくれ」
「わかった」
「それから――」

「文句はない、それでいこう」
どのくらいの時が経っただろう。どうやら、ようやく順序が決まったようだ。頃合いを見計らったかのように神が目を開いた。
「神様、どうかお願いです。この者たちを助けてやってください……」
すると突然、神は満足そうな顔をして、
「私はお前たちを試していたのだ。お前たちがずっと争っていたら、

その場で村ごと殺すつもりであった。お前たちは皆、生きるべきである。私が病も災害も全て、消し去ってやろう。」
と言った、次の瞬間。神はまるで太陽のような暖かい光に変わり、辺りを照らした。すると、枯れた草木が蘇り、暗雲は一瞬にして消え去り、病魔に侵された体がみるみるうちに治っていく。
そして光は最後に、
「四つ葉のクローバーを得るために、三つ葉のクローバーを踏んでいいわけではないのだ。そのことだけは忘れてはならない。」
と言い残し、消えた。
天に向かって、ありがとう、と叫び続ける人々。そしてまた、遠く離れた高い場所からその様子を見ている影。
「まったく……私はただの傍観者のつもりなのに。それにしても『メイルストローム』に、あの竜巻はおそらく『テンペスト』そして、未知の疫病の正体はおそらく……」
『モルス・ケルタ』確実な死、という意味を持つそれはその名の通り、対象を苦しめながら、確実に死へと誘う残忍な呪術の一種。
天上界でもこれ程の魔法を使う存在と言えば、大体の予想はつくというものだ。
「ベアトリーチェね……」
ベラトリクスの守護神。しかし、その名前からも察することができるように、どちらかと言えば高位の魔女に近い存在だ。
使う魔法ももちろん、死体を操る『リバイブ』や対象の視覚、聴覚、嗅覚などの全ての感覚を奪う『トラジェディー』などの醜い魔法ばかりである。
「仮にも神であるというのに平然と人間界の秩序を乱すなんて、あまり良いことではないわね……まあいいわ。全ての用が片付いたら、また楽しませて貰うから」
ふわっ。そう言ってルージュは消えた。

神の選別

所は変わって閑静な住宅街。そこにある、やや高級感が漂う屋敷の中。ロッキングチェアに座り、暖炉の前で読書をしながら暖をとる老年の男性が一人。

自身の右側でクラシックのレコードを流していながら、その反対側でラジオを流している……どうやら頭が器用な人のようだ。

その老人が何やら難しい顔をして考え事をしている。

「駄目だ、どうしても分からない。一体どうすればこんなことが……」

唸るように言う老人の耳に、ラジオのニュースが入ってくる。

今日未明、突然の意識不明に陥った方が病院に搬送される事件が起こりました。医師による検査が行われましたが原因不明、『神の選別』を受けたのでは、と言われています。お出かけなど、外に出るときは十分ご注意ください。それでは、次のニュースです――

「また一人消えたか……」

『神の選別』というのは先月あたりから起こり始めた現象で、この辺り一帯の人々が、ある日突然原因不明の意識不明に陥り、二度と目を覚まさなくなる、という現象のことだ。

周りの人々は、神が生きるべきものと死すべきものを選んでいる、などと言っているが私はそうは思わない。神などと言う崇高な存在ではなく、もっと邪悪で大きな何か……かく言う私も大切な人を『神の選別』により失っている。

彼女は正直な人で、悪事を働くようなことはしたことがない。本当に神が選別を行っているのなら、神を心から信仰していた彼女が、死すべきものに選ばれるなどあり得ない。そう信じたいのだ。

さて、こんな話を聞いた後で外には出たくないが、もう二日はま

ともな食事を取れていない。何か食べ物を買いに行かなければ。本当は車で行きたいが、いざという時に動きやすいように歩きで行くことにしよう。

毛皮のコートをはおり、少々警戒しながらも家を出て、いつもの大通りまで歩く。相変わらずここは車が通っていたり、こんなときでも商売をしてくれる店があったりして、それなりに人は居るが、やはりどことなく寂しい感じがする。私も早く買い物を済ませて帰ろう――

どさっ。目の前に見える人が倒れた。街に響き渡る悲鳴。道路を走っていた車も慌てて急ブレーキをかける。どさっ。逃げようと私の横を通り過ぎた人が倒れた。まずい、囲まれたようだ。見えないということはこんなにも恐ろしいことなのか。改めて思い知らされてしまった。

とにかく、ここを離れた方がいいだろう。この『神の選別』には特徴があって、同じ場所では選別は起きない、というルールがあるらしい。ならば、先ほど人が倒れた場所は大丈夫だろう。

申し訳ないが、先ほど私の横を通り過ぎて、倒れてしまった人の上を歩いて向こう側に行く。無事に向こう側に辿りつくことが出来たところで次の問題。さて、ここからどうしようか。

ずっとここにいても仕方ない。とにかく家まで移動するしかないだろう。少し不安を抱きつつも、来た道を戻り、閑静な住宅街に戻り、自宅が見えてくる。

そして自宅のドアの前に辿り着いた瞬間、突然めまいを感じた。思わず目を瞑る。耳鳴りがひどい。数秒後、それらが治まり目を開いた時、私は驚愕した。

真っ白。いつもの町が辺り一面、雪と氷に覆われていて、生き物の気配すら感じない。まさか――状況を理解し始めた時、とてつもない寒さに気づいた。

寒い、とにかく寒い。家の扉を開けようにも、凍っていて開かない。窓を割ろうにも割れそうなものも存在しない……

『絶対零度』そんな言葉が思い浮かぶ。このまま凍え死ぬことになるのだろうか。冗談じゃない。笑い話にもならないじゃないか。途方に暮れていたその時、どこからともなく――

「ピアノ……？」

音が聞こえてくる。私にはそれがどこから聞こえてくるのかがわかる。近くにある劇場のコンサートホールだ。あそこには、この辺では最高級と言われているグランドピアノが置いてあったはずだ。

私は走る。私以外にも人がいるという期待、そしてすこしでも寒さがまぎれるように、息が切れて、肺が痛くなっても走る足を止めない。

意外と早く着いた。家から走って五分もかからなかった。必死に走るとこんなに早いなんて。今聞こえてくるのは、ショパンの幻想即興曲。美しい旋律に、思わず寒さを忘れて聞き入ってしまう。どんな人が弾いているんだろう。気になってホールのドアを開ける。

どうせここの職員なんていないんだから、お金を払わなくたっていいだろう。扉を開くと、人影がみえる。ちゃんと誰かが居てくれた。ステージの前まで近づいてみる。大きなステージの真ん中にあるグランドピアノ。上には豪華なシャンデリア。そして、

「美しい……」

思わずそう呟いてしまうほどの女性。その女性には、まるで聖女のようなオーラがあって、子供に添い寝をする母親のような穏やかな表情をしている。

たまらずステージに上がる。女性は私には見向きもせず、ただピアノを弾き続けている。次の曲はノクターン、作品九の二。声をかけることも忘れ、私はただその女性の演奏を聴き続ける。

とても心が安らぐ。全てのことを忘れられそうな――本当に不思

議だ。あんなにたくさんのことを同時にしていても、決して忘れることが出来なかったあの出来事が、この音色を聴いていると全て忘れてしまいそうになる。

ああ、きっとこの方は女神様なんだ。大切な人を失い、挙句の果てには出ることのできない迷宮に閉じ込められたこの私を、哀れに思って救いに来てくださったんだ。

未練があるとこの世に縛り付けられてしまう。だから、せめて安らかに眠れるように全てを忘れさせて下さるのだろう。何だかそんな気がする。

私がこの世界に来た後どうなったのだろう。他の人と同じように、ずっと植物人間として病院に寝かされるのだろうか。ならば私の大切な人の隣にしてもらいたいものだ。そう言えばどんな顔をしていただろう、もう覚えていない、思い出せない……

ガシャン。ちょうど私の頭上にあったシャンデリアの鎖が、音を立てて弾けた。張力を失ったシャンデリアは私をめがけて落ち始めた。私にはそれが不気味なほどゆっくりと見える。

ああ、シャンデリアが落ちてくる。もうすぐ死ぬというのに、美しい旋律は私の感覚を狂わせる。死んだっていい。私は今までの人生に悔いはない。この世界にも、前の世界にも十分満足した。だから次の世界へ行こう。ああ、女神様。ありがとう、ありがとう……

ちょうど私の意識がなくなる寸前、誰かの声が聞こえた。

「お願い、目を開けて――」

老人は全く動かなくなった。するとどうだろう、不思議なことに老人の体は光の粒になって消えてしまった。

「かわいそうに……大切な人の居る世界に行けたかしら」

聖女はピアノを弾くのをやめて言った。

「それにしても、勝手に魔法が生まれるなんて初めてだわ。やはり何かがおかしい」

もちろん高位の神が魔法を作ることは可能だ。しかし魔法を作る

時はまず、形のないままの魔力を溢れさせ、名前という型を作り、残りの魔力で型に入れたあと、大いなる存在にそれを伝える儀式を行わなければ、使える状態にならないのだ。
　つまり新しい魔法が生まれた、ということをルージュが知らないはずがないのだ。
「まあいいわ。これ以上犠牲が増えないように、早く私の所にいらっしゃい」
　ルージュが何もない空間に向かってそう言った。
「あなたに名前を与えましょう。あなたの名前は『ディメンション・スリップ』」
　ルージュがそう言った瞬間、広いホール内にいくつもの黒い靄のようなものが現れる。普通の人ほどの高さはあるその影は、今にも形を崩しそうな動きをしながら佇んでいる。
「さあ、来なさい。あなたの居場所はここよ」
　もう一度ルージュが言うと、静かに佇んでいた影が一斉に、彼女の中に吸い込まれて消えてしまった。
「ようやく片付いた。さあ、ポセイドン、ベアトリーチェ。また楽しませて貰うとしましょう……」
　ふわっ。不敵な笑みを浮かべながらルージュは消えた。

冷酷な魔女

一見、鬱蒼とした森にしか見えないが、これこそが天上界七大都市、ベラトリクスなのだ。やはり、守護神が魔女に近いということからか、神の中では珍しい嫉妬深い者や、呪術を使う種族が集まっている。その最奥にある、廃墟のような薄暗い宮殿の中。

ほこりを被ったような色の髪と、漆黒のドレス……というよりも、長い帯に魔力を込め、ふわふわと漂わせた物に身を包む冷酷な魔女が、木の根っこで出来たような椅子に座っている。向かい合うように、大地を揺るがす者。

二人は酒を交わしながら話をしている。姿は見えないが、目の前で二人の会話を聞いているルージュ。

「あのような形でよろしいのだろう？　ポセイドンよ」

「上等だ。これだけの人間を瀕死に追いやれば、奴は必ず救済しに行くだろう。そして元凶が我らであると知れば、すぐにでもここに現れる。魔力を使いきった存在など無に等しい。我らが二人で叩けば奴もお終いよ」

高笑いをするポセイドンとベアトリーチェ。

「いい身分ね。ベアトリーチェ」

ルージュがようやく姿を見せる。

「お前がフレイアの仲間か。名を何という？」

「私に名前なんてないわ。それにしても、よくそこまでの魔力を持てたわね。他の神より上達が遅くて、周りの神達が烈火の魔法を使えるようになっても、あなたはまだ小さな石をぶつける『ロック』しか使えなかったのに」

意地悪な笑みを浮かべるルージュ。

若干慌てるようなそぶりを見せるベアトリーチェ。

「な、なぜそれを知っている……まあよい、ポセイドンよ、もはや魔力の残っていない口だけの存在、さっさと消してしまおうぞ」

「あいわかった。少々名残惜しいが、我々とて貴様のような存在は少々危険なのだ」
「さあ、まずはどうすることも出来ない惨劇を味わって貰おう。『トラジェディー』」
妖しげな笑みを浮かべながらベアトリーチェがそう唱えると、ルージュの足元から、何やら邪悪な気配と共に黒い煙が噴き出し、ルージュを閉じ込めるように球状になった。
本来ならば、そろそろ体に入り込み、全ての感覚を奪うはずなのだが。
「なぜだ。そろそろ感覚を失ってもおかしくないはず――」
「……もっと楽しませてよ」
つまらなさそうに言う、その声が聞こえた瞬間、ルージュを閉じ込めていた球体が一瞬にして空気に溶けて消えてしまった。
「まだそれほどの魔力が残っているとは。敵ながら尊敬に値するぞ」
「感心している場合ではない。奴の力は想像以上だ」
ポセイドンは、やや焦っているようだ。
「ならば、これではどうだ。『ミスティ・ミラージュ』」
たちまち白い霧が辺りを包みこみ、やがて辺り一面が真っ白で何も見えなくなった。
「さあ……お前の心はこの霧の世界に何を映し出すかな？」

真っ白な世界の中、私は不思議な音を聞いた。何か、巨大なものがぶつかりあうような音。ただの球体がぶつかってるのではなくて、何か――そう、人間界で言う、熱した金属の球を水に付けているような……
集中して聞きたいのに、さっきから何度も放たれてくるポセイドンの『テンペスト』がうっとうしい。
「もういいわ」
そう言い放つ声が聞こえると、一瞬にして霧が晴れ、そこに立っ

ているのはあれほどの魔法を受けたにもかかわらず、相変わらず無傷なルージュ。
「まあ少しは出来るみたいだけど、それだけでしょう？　そろそろ私にもまともな魔法を使わせてちょうだい」
「よいだろう。私にもその力、見せておくれ……」
楽しそうに笑うベアトリーチェ。
「この戦闘狂が」
半ば呆れたように言うポセイドン。
「炎よ……」
ルージュが初めて両腕を広げ、魔法を呼び、形を与えた。
天を仰ぐように広げた腕を徐々に下に降ろすように移動するにつれて、ルージュの後ろに彼女の身長程はある、五つの火柱が綺麗に並ぶように出来ていく。
はじめは真っ赤な炎だったが、移動を終える頃、その炎の色は真っ白になって、まるで生きているかのようにゆらゆらと一定の動きを行っている。
そしてルージュが開いていた手のひらを閉じて、少し力を込めるような仕草をしながら手のひらを開き、
「焼き尽くせ」
と命ずると、待っていたと言わんばかりに、次々と綺麗な弧を描き、まるで龍が飛ぶかのような勢いで敵に向かってゆく。
「『ディスペル』」
「風よ、我を守れ」
ベアトリーチェとポセイドンは、それぞれの防御魔法を唱えた。
ぶんっ。と音を立てて飛んでゆく火柱。
「砕けて」
ぱりん。膜を張るように守っていた二人の防御魔法が、陶器の割れるような音を立てて崩れた。
「これは……」
「くっ、防ぎきれん」

無防備な二人に襲いかかる火柱。ぱちぱちと音を立てて燃えてゆく椅子。壁や地面は真っ黒に焦げていて、炎が収まった後、そこに在るのは散乱する燃え尽きた武具と、その付近に横たわる哀れな生命体。
「もう終わり？　まあ、死なれると困るからこのくらいにしておいてあげるわ」
「お、おま、え、は……」
横たわっているポセイドンが苦しそうに、途切れ途切れに話し出す。
「おまえ、は、この、滅び、ゆく世界に、何を、求める？」
「どういう意味？　……そのままじゃ話しにくいわね」
そう言うとルージュは二人に治癒魔法をかけた。力が抜けたように、肩で息をする二人。ゆっくりと二人が起き上がり、ポセイドンが再び口を開く。
「お前も知っているはずであろう。この世界は少しずつ終末へ向かっている」
「私達はあくまでも、秩序に従っただけ」
続けてベアトリーチェも口を開いた。
「なんですって？」
「お前にも聞こえているはずだ。世界を終わりに導く、この音が……」
突然はっとした表情を見せるルージュ。

何か、巨大なものがぶつかり合っているような音。ついさっき『ミスティ・ミラージュ』の中で聞いた、あの音。そう、この音は――今までずっと、無意識のうちに脳がこの音を認識することを拒否していたけれど、その存在を認めてしまった今、否応無しに聞こえてくる。
戻らなければ。……どこへ？　元々私に居場所なんてない。いつも一人で無限の時の中にいただけ。……あ、ひとつだけ私の知らな

いものがある。それを知るのもいいかもしれない。とにかく、今はフレイアの所へ戻らないと。

「何処へ行くつもりだ？」
不審に思うポセイドン。
「帰るわ」
「そう、それが正しい。私も静かに闇に溶ける途を選ぶとしよう……」
そう言ってベアトリーチェは、新しく気の根っこで作り出した椅子に、静かに座った。
「我も、あるべき場所に帰るとしよう」
それぞれが、それぞれのあるべき場所に還る――

終末の音

ふわっ。
「おかえりなさい」
「ねえ、あなた」
「はい」
「あなた、いつからこの音が聞こえていたの？」
「あなたが人間界に出かけた頃からです」
「やはりそうなのね……」
そう言うと、ルージュは考え込むように黙ってしまった。
鳴り響く終末の音。揺らぐ世界。
「どうされましたか？」
フレイアが心配そうに問いかけると、ルージュはゆっくりと口を開いた。
「始まりがあるものには、必ず終わりがある……盛者必衰、沈まぬ者はない」
その顔は僅かに微笑んでいた。
「時が満ちようとしている……」
突然、空が暗くなった。皆既日食。重なり合った丸い影に、金色の輪が出来ていて美しい。
「美しい……」
滅多にしない、うっとりとしたような顔を見せるルージュ。
「ねえ、あなた」
不意に彼女が問いかけてくる。
「はい、何でしょう」
「グノーティ・サウトン」
「え？」
「グノーティ・サウトン。あなたならどう訳す？」
「はい、私なら……『汝、身を知れ』といったところでしょうか…

…」
　ふふっ、とルージュは含み笑いをする。
「昔、人間界のある所で一人の人間が遺した言葉。面白い人だったわ。だけど人間は、すぐに死んでしまうのが欠点……彼は知っていたのよ。私たちの本質を。彼が私たちに何を伝えようとしていたか、分かる？」
「いえ……分かりません」
　それでいいのよ、と彼女はまた含み笑いをして言った。
「汝は不死なる神ではなく、死すべき人間であることを自覚せよ。」
　さらにルージュは続ける。
「人間も神も、必ず死ぬことになる。どんなに長く生きられると言っても、必ず死ぬという意味では、どの生命もみんな平等。いまこんなにも輝いている星だって、いつかは必ず死んでしまう……」
　少し上に行ってくるわ、と言い残してルージュは消えた。
　もっと高い空からの景色を見るつもりなのだろう。フレイアは何も言わずに見ていることにした。

　ふわっ。一瞬、浮遊感を感じる。高い所から落ちた時に感じる、この感覚。私が空間を移動するときに感じる、この感覚。やはり、上空から見る景色は格別だ。
　その時、空で輝いていた星達が一際強く、赤く輝いて見えた。流れ星……？　いや、違う。一般に隕石と呼ばれるもの。それもかなり大きな。
　ひとつ。遠くにある、広場の噴水に当たった。　噴水は隕石が当たった瞬間、消えた。
　またひとつ。次は近くの方に見える塔。　天を裂くような衝撃を肌で感じたその瞬間、大きな音を立てて綺麗に、ゆっくりと塔が崩れてゆく。
　この世界のすべての生命が、長い年月をかけて積み上げてきたものが一瞬にして消え去ってゆく。

「ああ、なんと美しい……」
思わず呟いてしまった。きゅん、と胸が締め付けられるような感覚、弱い電流が体の中を駆け巡っているような感覚。快感にも似たそれらの感覚に浸りながら、儚く散っていく世界を眺めていた。……フレイアが少し心配だ。

ふわっ。
「おかえりなさい」
いつものフレイアの言葉が聞こえる。ルージュは少し安心したような顔を見せた。そうしている間にも、たくさんの生命が恐怖に慄き逃げ惑っている。
「これが、私の望んでいたもの……」
誰にとも言わず、ただルージュは話し出した。フレイアもおそらく分かっているのだろう。静かに聴く側に回っている。
「私は欲しかった。甘美な夢が欲しかった……私はずっと無限の時の中にいた。私が作り出したこの世界の中でも、私にとっては生も死も甘美な夢でしかなかった。死を知らない私にとって、死の先にあるものもまた、私にとっては――」
先ほどまでのものとは比べ物にならないほどの、すさまじい轟音が響きわたる。
「終末の音が聞こえる……さあ、おいで。狂った歌を歌いましょう」
天を仰ぎ、ルージュは静かに歌い始めた。とても綺麗な歌声が響きわたる。しかし不思議なことに、どんなに近づいても彼女が何と言っているのか聞き取れないのだ。

無限の輪

その頃、人間界では。
神聖な空気の漂う大聖堂に、なにやら不審な動きをする一人の女がいた。

「ようやく見つけた……」
そう言って私が、床板の下からとりだしたのは、一冊の本。普通の本と大して変わりはないが、唯一の違いは、金を延ばして作ったような、美しい装飾が施されているところだろうか。
ここは大聖堂のど真ん中。いくら真夜中だといっても、人が来たら流石にまずい。だが、そんなことよりもこの本に対する好奇心の方がずっと上だった。もう何年も探し続けて、ようやくこの本に関するヒントを得て、そして今、ようやく手に入れたのだ。
この本に記されているのは『この世の全て』だ。過去も、未来も、それだけじゃない。この世界の秩序も、生命も、すべてここに刻まれている。
なぜそんな物を探していたか。それは私が気づいてしまったから。人が『何かを思い出そうとして生きている』ということ。何か。何のことだろうか。分からない。分からないから『何か』と呼ぶしかない。その無限に繰り返していた問いの答えを今、ようやく知ることができる。
「……？」
ついにその本を開こうとしたその時。どこからともなく、歌のようなものが聞こえてくる。しかし、何と言っているか聞き取ることができない。それなのにはっきりと、透き通った声が聞こえる。……まあいい。とにかく本を開こう。重い表紙を開き、数十ページ読んだところで手が止まった。
「まさか、そんな」

思わず身震いをして、本を落としてしまう。私は激しい重量感に襲われ、込み上げてくる吐き気とめまいに意識を失いそうになる。

まだ、まだ……もう少し……

ああ、なぜ神はこんなにも残酷な運命を人々に与えたのだろう。私はまた無限の輪の中に放り込まれてしまう。

その前に少しだけ、少しだけならきっと神も許してくれるだろう……薄れていく意識の中、またあの歌が聞こえてくる。私が思い出そうとしていたことはきっと――

エピローグ

人間界が滅びても、まだ天上界には終末の音が響き渡っていた。
「なつかしい……」
歌い終わったのか、ルージュが不意に呟く。
「ねえ、あなた。前にもこんなことがなかったかしら」
「不思議です。初めてのはずなのに、あなたに言われると……ふふっ。また会えたらいいですね」
最期の時を告げる終末の音。不気味なほどゆっくりと、静かに空が落ちる。
あと少しで全てが真っ白になりそうな時、かすかにルージュの最期の声が聞こえた。
「ああ……なんと心地よい――」

始まりがあるものには終わりがある。生命が生まれ、そして死んでゆく。その間に起こる数々の出来事もまた、大いなる存在にとっては、ひとつの快楽でしかなかったのだ。

そして今日もまた、天使は甘美な夢を見る。
なんだか、長い夢を見ていたような気がする――

一断章一　ある抜け落ちた物語

ああ、いつから私は、私の世界は壊れ始めたのだろう。音もなく崩れていく私の世界。私の全て。いつ、どこで、なぜ。完全だったはずの私の世界。不変にして不滅だったはずの私の世界。すべてが順調だった。すべてが思いどおりだった。なのに、何故――知っている。私は理由を知っている。だけど知らない。知ってはいけない。それを知れば、真実の重みが私を押しつぶして壊してしまう。知れば私が壊れる。知らなければ世界が死ぬ。だけど世界が死ねば、私も死んでしまう。

『意味のない繰り返しに何を求める？　お前はただ、自分の運命に素直にさえなればよいだけのだ』そう言う彼の声が聞こえる。このときの運命というのは、自分が望む、望まないに関わらず、選んでしまった道という意味で、それを受け入れなければ、繰り返しから抜けることができない。ということを言いたいんでしょう？

分かっている。だけど分からない。永遠に繰り返さなければならない、という無間地獄。目の前で死んでゆく者達。つかの間の世の中に、なぜこうも人は嘆き、涙流すのか……すでに死にかけている世界を見て、私はただ考えていた。私の望んでいたものは何だったのか。途はもう、無い……

いや、ある。ただ、見ていないだけ。意識して見なければ、見えていないのと同じ。私が望んでいるのは、人々の死でもなければ、私の世界の死でもない。私が見ていなかったのは、自分の心。そう、これだ。ああ、なんという甘美な夢。きっと心地がいいんだろう。これが、私の望んでいたこと。だから今こそ、自信をもって言おう。

「――私は全てを知っている」

今にも全てが消えようとしている時、かすかに誰かの声が聞こえたような気がする。

「どんなに繰り返そうとも、お前が本当に求めるものは手に入らない。虚しくはないのか？　エスプリよ……」

そしてまた、眠れる天使は甘美な夢の中に……

さあ、おいで。狂った遊戯を始めましょう。私と共に無限の海へと――

一第二章一　プロローグ（前書き）

ここから第二章に入ります。
第一章と比べると、少しネタ要素があったり、冒険をしたり、ゲームのような色の強い内容になっていると思います。

一第二章一　プロローグ

繰り返す人々。逃れられぬ運命。無限に連なる繰り返しの輪。つかの間の、かりそめの住まいに、人は何を望み、何を求め、どの道を選ぶか。いや、選択する必要などない。いずれにせよ、繰り返すことしか出来ないのだから……

ある者は言った。滅ぶとわかっていてなぜ作る？　死ぬとわかっていてなぜ生きる？

理由などない。もともと理由など人間が勝手につけ足したものにすぎない。生命は生きることこそが全て。知恵を持った生命が勝手に意味のあるものにしようとしただけだ。

人が何かを思い出そうとして生きている？　それも『理由』としては正しいだろう。ならば思い出したらどうなるのか。

今回はある者の記憶を辿る物語。さあ、行こう。次の世界へ――

あらゆる次元が混じり合い、さまざまな生命が生息しているこの世界。この世界は『幻想』と呼ばれている。どこか遠くの次元の生命がこの世界を訪れた時、自分たちの世界と比べて不思議なことばかり起こるから、そう名付けたらしい。

いつから私はこの世界に存在しているのだろう。気付いた時にはある次元で生活をしていて、周りから神族と呼ばれるようになっていた。そして、気づいた時にはフレイアという女神と共にあてのない、次元の旅をしていた。……？　一瞬、何か面白そうな未来が見えた。行ってみよう――

私は

木々に囲まれた薄暗い小さな村。石造りの小さな家が二つだけある、というか、ただの廃村にしか見えない。
ひとつは宿屋のようだ。そこの二階に、一人の女性が居た。茶色の髪に、どこかやる気のなさそうな顔。

私はシルヴィア。数年前に失ってしまった記憶を取り戻すために旅をしているの。やる気のなさそうな顔してるとか言わないでね。
この世界のどこかに散らばっている『記憶の欠片』をすべてあつめると『星の記憶』っていう所に行けるらしくて、そこにはこの星に生きるすべての生命の記憶が保存されているんだって。
絶対に『星の記憶』に行って私の記憶を取り戻すんだ！　……今日はここから南にある林に行ってみようかな。

それにしてもこの村、なんかおかしいでしょ。というか絶対おかしい。この島自体、端から端まで走って十五分で行けるくらい小さい所だけど、他に人いないし。なんか村の人透けてるし。
いつになったらこの島から出れるんだろう。なんか未来のことを考えたら面倒くさくなってきた。

始まり

やる気をなさそうな顔をしながらもゆっくりと廃村を出て林に向かうシルヴィア。
「やっとついた」
面倒くさそうに呟くが実際には結構やる気はあるらしく、さっさと歩いて探索をし始める。
奥には謎の鎧が。
「なんでこんなところに鎧が？　……気持ち悪いから早く帰ろう」
がさっ。
「え、なに？」
その時、数体の謎の生き物が現れる。ゼリー状で丸い……低級の魔物だ。
「なんだ、スライムね。脅かさないでよ。はいはい、これが欲しいんでしょ、『グランドフレイム』」
そう唱えた瞬間、辺りから炎が現れ、スライム達を囲むように襲う。地面が真っ黒になるころには、もうそこには何もなかった。
この幻想に住む者たちは皆、幼い時に精霊と契約を結んでいるため、それなりの魔法を思い通りに使うことが出来る。神族と呼ばれる種族は別の方法で魔法を使うらしいが……
「お待ちなさい。若い者よ」
林を出ようとしていた時、背後から声がかかる。驚いて振り向くと、そこには透き通った老婆が。
「おぬし、記憶の欠片を探しておるのだろう？」
「そうだけど、なぜあなたが知っているの？」
なるべく驚きを隠しながら答えた。
「これでも私は占い師だったんじゃよ。島の北にある丘に行くとよい。おぬしを導く者に会えるだろう。」
「よくわからないけど暇だし、記憶のためだし行ってみようかな」

「ほっほっほ、それでよいのじゃよ。それで……」
そう言って老婆は消えた。悪い人ではなかったらしい。ひとまず安心したシルヴィアは暇なのでゆっくり丘に向かうことにした。

未来、見える？

その頃。
海を一望できる丘の頂上。と言ってもすぐ目の前は海になっているので崖に近いが。
そこから海を見渡している影がふたつ。
「ああ、絶海の孤島は嘆きに満たされ、尽きぬ悲しみは大地へと降り注ぐ……」
「言の葉を操り天地創造を歌う。神の遊びと言ってもあまり面白くはないわね」
「ふふっ。まあ、そう言わないでください」
何か奇妙な話をする二人。右側に立つのは、長い亜麻色の髪。優しそうな顔立ち。地面に付いてしまうほど長い裾に金の刺繍が施されている、純白のスレンダーラインドレスを着た女性。
「私は型に収めるような行為が嫌いなの」
そう言ったのはシンプルな真紅のドレスを着た、左側に立つ女性。
「そろそろ来るかしら」
さらさら。風になびくライトオレンジティーの髪。光にあたってところどころ透けて見える。
「準備をしておいて」
「はい」

「私を導く人なんて本当にいるのかな……占いが外れてたらどうしよう。まあ、死ぬと霊力が恐ろしく高まる、ってあのお婆さん言ってたし間違いはない、と信じたい」
ぶつぶつと文句を言いながらも、なんとか着いたらしい。
「ここかな？　……なんかいる」
きれいに花が咲き乱れる静かな丘のほとりから頂上を見ると二つの影が。

「考えないようにしてたけど、透き通った人が待ってる、とか無くてよかった」
とりあえず近づいてみる。
「あなたは……未来、見える？」
後ろから声をかけようとしたその時、向こうから話しかけられた。
「え、いきなり何？」
さすがに動揺を隠せないシルヴィア。
「あなたが来ることはずっと以前から知っていたのです。だからあなたに会いに、ここに来ました」
先ほど質問を投げかけて来た女性の、右側に立つ女性がゆっくりとシルヴィアを向いて言った。
「あなたは私のことを知ってるの？」
「知ってるわ。私の予言の力であなたが記憶の欠片を探していること、私達と旅をすること。だけどその先の未来が見えないの。何かに邪魔をされているみたいでね。だから私はあなたの未来を見るためにここに来たの」
続くように、先ほど質問を投げかけてきた、真紅のドレスを着た女性もシルヴィアの方を向いて答えた。
「それが私たちの使命なのです。未来が私たちに教えてくれた……」
「じゃあ、ぜひ私と来てほしいな！　人手は多いほうがよさそうだし。あなたはどんなことが出来るの？」
白いドレスを着た女性がほほ笑みながら答える。
「私は主に防御魔法を操ります。私が本気を出せば、まず敵の攻撃を受けることはありません」
「私は操ろうとしたものは何でも操れる。過去も未来も、人の心も」
真紅のドレスを着た女性が、意地悪な笑みを浮かべながらそう答えた。
「分かりやすく言えば、予言の力を使って敵を殺すことだってできるのよ」
「それって予言じゃなくて呪いだと……」

「あなたが明日、事故死する未来が見えるわ」
気付かないほうがよい所に気付いてしまったシルヴィアだった。
これ以上はあえて触れないことにしよう。
「わ、わかりました……じゃあ、早速行こう！」
「そうね。私はイデア、とでも呼んでちょうだい」
真紅のドレスの女性が言った。
「私の名前はフレイアです。よろしくお願いします」
純白のドレスの女性も続いて答えた。
「私は」
「シルヴィアでしょ」
きちんと名前まで予言していたらしい。
「……ところで質問なんだけど」
シルヴィアが話しかけてくる。
「はい、なんでしょう」
「冒険だっていうのになんで女が三人なの？　素敵な騎士様とかいないの？」
「ねえ、あなた」
イデアがフレイアに話しかける。
「はい」
「やっぱりこの人置いて帰りましょうか」
シルヴィアを無言で見つめる二人。
「はい、すみませんでした……文句はありません」
「それでよろしい」

シルヴィアの返事を聞くなり、二人は島の西側へと歩き出す。慌てて着いて行くシルヴィア。島の西側には確か、昔の建物の跡があると言うが。
「なんでこんな島に来ちゃったんだろう。ほとんど草原で何もないのに……」
「ここに来る以前の記憶がないのですか？」

フレイアが不思議そうに尋ねる。
「うん。というか気づいたら居た」
「そうですか。それは……」

発見

静かに風の吹く草原。向こうの方に何かの建物が見える。
「あれが城跡？」
「そうですよ。私達が行った時には特に何もありませんでしたが」
「既に希望の欠片もない……」
「まあ、そう言わないでください。今日は何かあるかもしれませんよ」
「変な期待を持たせないでください」
そんなやり取りをしながらもひとまず到着した三人。
「ほんとにこんなところに私の記憶があるのかな」

城跡と聞いていたが、大小さまざまな崩れかけた石造りの建物の跡が残っている。どうやら正確には城下町の跡のようだ。
とりあえず一番小さな家から見ていくことにした。
「あっ……なんだ、ただの石か。記憶の欠片かと思っちゃったよ」
「流石にこんな所にそんな重要な物があるとは思えません」
「ですよねー」
シルヴィアとフレイアは気が合うらしく、結構楽しそうに探索をしている。
「ちょっとイデアも手伝ってよ」
「私は埃っぽいのが嫌いなのよ」
二人の姿をただ後ろの方から見ているイデア。
「あの方には、あの方なりの考えがあるのですよ」
「えー。自分から行こうって言ったくせに……」
ぶつぶつと文句を言いながら家の中の棚や引き出しを漁る。
「そろそろ次に行きましょう」
イデアが少し考えるような顔をして言う。
「何かを待っているのですね？」

すかさず察した様子のフレイア。
「さあ。私の眼が使えないからよく分からないけど。じゃあ、行きましょう」
イデアが建物の外に出る。それに付いてゆく二人。

「……あれかしら」
イデアが見ているのはこの街で一番大きな建物。外見からして、教会の跡だろうか。
「とりあえず、行ってみましょうか」
中に入る三人。
「うわっ。何ここ、屋根がない」
「そういえば扉もありませんでしたね」
どうやらこの建物は一番損傷が激しいらしい。屋根は崩れ、壁のあちこちには大きな穴が空き、扉まで壊れてその辺に転がっている状態だ。
広い空間に、壁から落ちた十字架と、その横には壊れたオルガンが。
「見つけたわ」
祭壇の裏の辺りから、イデアの声が聞こえる。そばに扉のあった跡があることから、牧師達の部屋だろうか。急いで向かう二人。
「これは……何？」

移送法陣

部屋の真ん中に大きく円が描かれていて、その中に奇妙な記号が描かれている。
不気味に赤く光を放つそれは、まるで三人を誘っているかのようだ。
「前ここに来た時に微かに魔力の跡を感じたの。もしかしたら、と思ってね」
「そう言う大切なことは早く言ってよ！」
「お楽しみは残しておこうと思って」
意地悪な笑みを浮かべるイデア。と、その時微かに空間の乱れを感じる。
「なにか来ます！」
珍しくフレイアが声を荒らげて言った。瞬間、それぞれの体を包むように、薄くて青い、球状の膜が現れる。フレイアの防御結界だろう。
陽炎のように、空気が揺らめいてぼんやりとする。地面から魔法陣に向かって塵が寄ってくる。やがて、天井まで届きそうなほど砂や塵が集まり、固まったかと思うとそれらが一瞬にして消え、そこには奇妙な生物が居た。

死人のようにやせ細った灰色の体。細い左腕には鎖が巻きついている。問題は右腕だ。腐った肉の柱のようなそれは、自身の体よりも大きく肥大している。こんなものを振り回されたら、普通だったら大変だろう。
「大丈夫。ここはイデアの呪いで……」
「じゃあ、がんばってね」
「え？」
てっきり、イデアが一瞬で片づけてくれると思っていたシルヴィ

アは、思わずイデアを二度見した。
「私達が本気で戦うと、この空間が壊れてしまうの。そうなれば、あなたの存在も消えて無くなるのよ」
相変わらず意地悪な笑みを浮かべるイデア。
「それは嫌だけど……」
「頑張ってくださいね」
フレイアにまで背中を押されたシルヴィアに選択肢は無かった。
「大丈夫よ。死んでもフレイアが蘇生魔法をかけてくれるから」
「損傷が激しいと無理ですが……」
「不安にさせるようなこと言わないでよ！」
いつも優しい笑みを浮かべているフレイアがこの時ばかりは悪魔に見えたシルヴィアだった。

しかし、こんなやり取りをしているのを相手が待っていてくれるはずもなかった。魔物は既に、最も猛威であろう、その肥大した腕をシルヴィアに向かって振り下ろしている。
ぱちんっ。電気の流れるような音と共に魔物の攻撃は弾かれた。シルヴィア自身も、瞬時に反撃の構えを取りはしたが、その必要はなかったようだ。と、ここでシルヴィアを覆っていた膜が消える。
「え？」
不思議そうな顔をしてフレイアの方を見るシルヴィア。
「あなたが一人で戦えない人にならないように、私は最低限の補助しかしませんよ」
「分かりやすく言えば、フレイアの防御結界を期待してはいけない、ということよ」
「え、え……？」
思わず聞きなおすシルヴィア。少しして意味を理解したのだろう。顔に生気が無くなっている。
「大丈夫です。何かあっても治癒魔法をかけますので」
「もし本当に危なくなったら私がなんとかするわ。あなたの存在が

消えるかもしれないけど」
「存在が消えるのは嫌です」
「じゃあ頑張りなさい」
「はい……」
　このやり取りの間にも、魔物はイデアやフレイアにも腕を振り下ろしていたが、二人はするすると敵の攻撃を避けていた。
「二人とも動きがなんかおかしい……本当にこの人たち生きてるのかな……」
「早く、余計なこと考えてないでさっさと倒しなさい」
　敵の攻撃を難なくかわしながらイデアは言う。
「もう！　面倒くさいから一撃で決める！『エクステンションフォース』」
　両手を敵の方に突き出し、魔法名を唱えた。次の瞬間、しゅんっ、と言う音と共に、魔物の中心に凄まじい量の魔力が集まってくる。
　辺りの空間が歪み、一瞬敵の体がびくっ、と痙攣したかと思うと、大きな爆発音と共に敵の体からいくつもの光の帯が拡散し、消えた時には既に敵の姿も無くなっていた。

「おわったー」
「これは……すごいですね」
　シルヴィアはいとも簡単にこの魔法を使ったが、実際はフレイアでも驚くくらい高度な魔法なのだ。魔力の流れを操るのには相当な修業が必要で、一点に集中させるなど、高位の賢者でも難しいくらいだ。
「なかなか出来るじゃない。本当に私達の助けが要るのかしら」
「こんな魔法何回も使ってたら、流石に魔力が切れちゃうよー」
「この先、さらに敵は強くなりそうですが……」
　またしてもフレイアが悪魔に見えたシルヴィアだった。
「この調子だと、本気で戦う時はちゃんと、空間ごと次元をずらさないと危ないわね」

なぜか楽しそうな顔をするイデア。
「ところで……この魔法陣まだ消えないけど、また何か変なのが来るの？」
シルヴィアの言うように、部屋の真ん中に描かれた魔方陣は、先ほどまでと変わらず、ぼんやりと赤い光を放ち続けている。
「移送法陣ね」
「移送法陣？」
「他の場所と繋がっている、テレポート装置のことよ。あなたも一度は見たことあるでしょう？」
「言われてみれば……いや、無いと思う。それで、これはどこに繋がってるの？」
「入ってみれば分かるわ」
イデアはそう言って躊躇いなく魔法陣の中に入ると、ふわっ、という音と共に消えてしまった。
「どうしたのですか？　行きましょう」
ふわっ。そう言ってフレイアも消えた。
「この人たち、なんか変だよ……」
ぶつぶつと文句を言いながら、シルヴィアも後に続く。

潤いて強く、かつ汚れ無き者

ふわっ。移動した先は何やら薄暗い洞窟のような場所。
「ここどこ？」
「さっきの町の下みたいね」
イデアが目を閉じながら言う。
「なんで分かるの？」
「望遠の魔法『オシリス』ですよ」
シルヴィアの質問にフレイアが答えた。
この『オシリス』と言う魔法は、基礎的なものだと、その場所から望遠鏡を覗いてるような感じになり、途中に障害物があると対象が見えない。
しかし、術者の魔力が上がるにつれて、まるで目だけをその場所に移動したかのように、自由にその場所を見ることが出来るようになり、さらには、自分の望んだものを自由に透視することも出来るようになるのだ。
イデアは今、その望遠の魔法を使って先ほどの町から地面を透視しているらしい。
「秘かにこの地下で何かが行われていたみたいね」
「先の方に何か見えます」
いつのまにか、望遠の魔法でこの先を見ていたフレイアが言った。
「じゃあ、行きましょう」
それを合図にさっさと歩き始める三人。
「きゃあ！　上から何か！」
悲鳴を上げるシルヴィア。
「水よ」
振り返ることもなく答えるイデア。
地面のぬかるみを避けながら歩くシルヴィア。ふとイデアの方を

見ると。
「あれ、イデア、なんで浮いてるの……？」
イデアは地面より少しばかり浮いていて、空気の上を歩いていたのだ。
「何を言ってるの？　普通に歩いたら泥が付くじゃない」
「いや……そんな魔法見たことないです」
「この方は少し特別なのですよ」
優しく微笑みながらそう言うフレイア。……地面より少しばかり浮いていた。
「フレイア……」
シルヴィアはもう、それ以上は何も言わなかった。

しばらく歩き続けると、向こう側に何か、広い空間が見えてきた。
「祭壇のようですね」
「何かいるわ。音を立てないで静かに近づくわよ」
イデアが言った途端、全員が足音を消した。いや、正確には、どんなに地面を踏みつけても何の音も出ないのだ。
祭壇の中はきちんと石で造られていて、水が垂れてくる心配はないようだ。少し奥には何か赤い、人のようなものが。
静かに近づいてみると、魔法陣に向かって何か呪文を唱えているらしい。体は溶岩のように赤く、どろどろとしていて今にも溶けてしまいそうだ。その存在がこちらの気配に気づいたのか、はっとこちらを見る。
「誰だ、貴様らは！　ジェミニ様の復活の邪魔をするな！」
唸るような低い声が聞こえたと思った時、
「危ないわ」
ぱちんっ。ものすごい速さでシルヴィアに飛んできた溶岩をぎりぎりの所でフレイアの防御結界が防ぐ。
「危ないわ、じゃなくて……凄く怖かったんだけど……」
「じゃあ、がんばってね。……と言いたいところだけど、これは少

し厄介ね」
「シルヴィアさんの得意な炎属性の魔法が効かないようなので、私が少しお手伝いをさせていただきます」
「本当にお願いしますフレイア様」
「イデアさん。詠唱の間、援護をお願いします」
「言わなくても分かってるわ」
敵も危機を感じたのか、三人に向かって沢山の溶岩を投げつけてくる。イデアはそれを見ても全く動じる様子もなく、ただ腕組みをして立っているだけだ。
「ちょ、イデア！　危ないよ！」
「ふふっ」
今にもその溶岩がフレイアに当たるというその時、イデアは含み笑いをして、ほんの少しだけ目に力を入れた。すると、三人を襲おうとしていた溶岩がぴたっ、と動きを止め、地面に落ちる。
「え、何もしてないのに……」
「したわ。魔力を込める、ということをね」
と、ここでようやくフレイアが動き出した。大きな魔法を放つ時ほど、より精神を集中させなければならない。フレイアはひと段落つく、この瞬間を待っていたのだ。
フレイアはやや下を向き、手を大きな器を持つ時のような形に広げ、静かに詠唱を始めた。
「さあ、思い出してごらんなさい。あなたがどんな姿をしていたのか。潤いて強く、かつ汚れなき者よ。アルドヴィ・スーラ・アナヒタ――」
ざざぁっ、という激しい音と共に、凄まじい勢いで水が右側の壁から現れ、敵を押し倒した。そして水はすぐに地面に吸い込まれ、跡形もなく消えてしまった。
水によって冷やされ、固まってしまった敵は苦しそうに、
「まずい、魔力が暴走し始めた……もう、誰も、ジェミニ様を、止

められ、ない――」
と言い残し、絶命した。そして魔法陣が静かに光を放ち始める……
「ジェミニ……どこかで聞いたような」
難しい顔をして呟くイデア。そして、妖しい光を放つ魔法陣から手が伸び、ついにジェミニが姿を現す。
「え？　なに……？」
一瞬、自分の目を疑ってしまうのも当然だ。目の前に現れたのは、人のような姿をしていたが、ひとつの胴体に四本の腕と足があり、頭が二つある。手足は奇妙な動きをしている。
そして、全身の皮膚は真っ赤に膨れ上がり、所々裂けて緑色の体液を流している。どう考えても、この世のものとは思えないような存在だったのだ。
「これがジェミニなの？」
「はい。しかしあれはまだ不完全な状態です。なんとか勝てるかもしれませんよ」
「え、また私がやるの？　たまにはイデアが」
「あなたの存在が消える未来が――」
「私がやります」
「頑張ってくださいね」
恐ろしい敵を目の前にして恐れる様子もなく、悠長に微笑みながらそう言うフレイアを見て、実はイデアより恐ろしい人なのではないか、と心の中で密かに思うシルヴィアだった。

「……」
ジェミニは何も言わずに、こちらの様子をうかがっている。不完全なせいで思考がはっきりとしないか、あるいは不完全なせいで言葉が分からないのかもしれない。
「下手に動かないほうがよさそうですね」
「シルヴィア。油断してたらあなた、本当に死ぬわよ」
「わ、分かってるよ！　考えたくなかったのに……」

その時、ジェミニが醜い笑みを浮かべた。
「えっ」
ジェミニの四本ある腕の一つが急に伸び、シルヴィアを襲う。ぱりんっ。いつもと違う音が聞こえる。そう、例によって張られていたフレイアの防御結界が破られたのだ。
「うっ……きゃあ！」
続いて足が伸び、なぎ払うようにシルヴィアの足をすくった。転倒するシルヴィア。相変わらず動じない二人。
「あら、意外と強いのね」
「さすがに一番弱い防御結界では無理がありましたね」
「無理がありましたね、じゃないよ！　死にそう、助けて！」
「大丈夫ですよ。あなたなら勝てます」
そう言うなり、再びシルヴィアを覆うように薄くて青い膜が現れる。さらさら。シルヴィアは一瞬、地面から風のようなものを感じた。
「ほら、足はもう痛くないでしょう？」
フレイアの代わりにイデアが治癒魔法をかけて足の痛みを取ったらしい。
「もう魔力無くなっちゃうよー」
もう魔力が残っていないことを口実にイデア達に片づけて貰おうと思っていたが、
「魔力も回復させたはずだけど」
失敗に終わった。
「はい……面倒くさがらずに、ちゃんと魔法を使います」
仕方なく詠唱を始めるシルヴィア。
「全ての悪を焼き尽くす、崇高なる煉獄の火炎よ、今こそ我に力を！」
そう唱えて右手でジェミニを指さす。すると辺りから炎が噴き出し、辺りは瞬く間に炎の海となった。そして、それらはいくつもの火災旋風を起こし、ジェミニを襲う。

ぱちぱち、とジェミニの体が焼ける音。この世のものとは思えない奇声を上げるジェミニ。口から緑色の液が大量に出ている。と、次の瞬間、ジェミニは口から長い舌を伸ばしてシルヴィアを打つ。ぱりん。

「きゃあ！」

ジェミニの舌は結界を破り、そのままシルヴィアの首に当たった。さらさら。痛みを感じる前に、イデアの治癒魔法がかかる。

「刹那の煌めきよ、我に光の刃を」

フレイアがそう唱えると、辺りに無数の白く輝く光の剣が現れ、一斉に刃先をジェミニの方に向けた。

「お行きなさい」

しゅんっ。フレイアが命じた途端、まるで風が吹き抜けるかの如く、ジェミニの体を貫き、息の根を止めた。

どろどろと溶けて無くなるジェミニ。

「あんなに強かったのにまだ不完全だったなんて……」

「私達に伝わる話によると、ジェミニというのは数千年前、グランドフォールというものが起きた時に、島一つを跡形もなく消し去った、と言われている闇の住人です」

心配そうな顔をしてフレイアは続ける。

「そんなものが再び現らわれるなんて……この旅は長くなりそうですね……」

「あれ？　何か落ちてるよ？」

シルヴィアの言うとおり、ジェミニが消えた跡には、透き通った夕陽のような色の欠片が。

「記憶の欠片ね。おめでとう」

「これが、記憶の欠片……」

水晶の原石のような形のそれには、心を惹きつける何かがあった。

「きれいだねー」

「ふふっ。そうですね」

「なんか、これ見たことあるような気がする……気のせい？」
「きっと気のせいではないのですよ。あなたが記憶を失ったのには、何か理由がありそうですね……」
と、その時、三人は大きな揺れを感じる。
「え、今度はなに？」
「おそらく、さっきの衝撃で、脆くなっていたこの遺跡が崩れ出したのでしょう」
揺れは収まらず、天井が少しずつ落ちてくる。突然、魔法陣から溢れる光が強くなる。しかし、先ほどのような禍々しさを感じない、何か別の光。
「私達を誘っているみたいですね……」
「さあ、迷ってる暇はないわ。行きましょう」
ふわっ。イデアとフレイアが消えた。ふわっ。続いてシルヴィアも消えた。

深い闇

ふわっ。
「ここは……？」
「塔の中みたいね」
大きならせん状に続く、人が二人並んで歩けるほどの細い通路。所々にある窓から外を覗くと。
「え、浮いてる？」
窓の外に広がるのは一面の空。他には何もなく、唯一あるとすれば雲くらいだろうか。
「そのようですね」
「ここはさっきの島とは別の次元なのよ」
「どういうこと？」
「この世界は沢山の次元が散らばっていて、普通の人間は特定の方法でしか他の次元に移動できないの」
「誰がいつ、どのようにして、そうしたかは誰も知らないのです」
「なんであんな廃村の島に居たんだろう……」
改めて自分という存在の不気味さに気付いたシルヴィアだった。
「とりあえず、上りましょう。何かの気配がするわ」
さっさと歩き始めるイデア。後に続く二人。

しばらく歩き続ける三人。歩く音だけが塔に響く。
実は、ここに来るまでに何度か、やや大きなコウモリのような魔物が現れたのだが、イデアに近づいた瞬間消えて……いや、その先は言うまい。
とにかく、シルヴィアにとっては戦慄の嵐だったのだ。
「あ、出口が見えてきた！」
ようやくこの塔の頂上に出られるらしい。しかし、何か様子がおかしい。出口だと言うのに、そこから見えるのは明るい空ではなく、

深い闇だったのだ。
「なんか、出たくない……」
「何言ってるの？　先頭を歩いているのはあなたじゃない。一番外に出たがってるように見えるけど」
「え、あれ？　さっきまで一番後ろを歩いてたのに」
その時背後から、くすくす、と笑う音が。
「イデアさんが、あなたを周りの空間ごと移動させたのです」
「フレイア……笑うなんてひどい……」
「私もフレイアも笑ってなかったけど。空耳じゃない？」
イデアは鼻で笑いながらそう言った。シルヴィアはもう、考えるのをやめた。
「え、何これ」
円形に広がる屋上。そしてそれを覆うようにへばり付いている、筋肉の壁のような……
「まん中に何か顔みたいなのが……」
シルヴィアの言うとおり、ドーム状になっている筋肉の壁の中心に、逆さになった、筋肉だけで出来た人間の生首のようなものがある。それは、うねうねと気持ち悪い動きをしながらこちらを見ていた。
「デッドローパーですね。吐く息に触れただけで骨まで溶かされると言う……」
「気持ち悪いわ、消えなさい」
フレイアが説明し終わる前にデッドローパーは一瞬にして消された。
「イデア怖いよ……」
「気持ち悪くて聞きたくもないわ。私は醜いものが嫌いなの」
心なしか、イデアから殺気が溢れているような気がする。シルヴィアはデッドローパーのようには絶対になりたくなかったので、これ以上何も言わないことにした。
「あ、また見つけた！　やったー」

そう言うシルヴィアの手には、光を当てても透き通らない程、真っ黒な色をした記憶の欠片。
「おめでとうございます。あと三つですね」
「え、あと三つも探すの？」
「知らなかったのですか？」
「知らなかったのです……」
その時、また例の揺れを感じる。と、フレイアが向こうに移送法陣があることに気付く。
「あそこに移送法陣があります」
「また『導き』ね。私達を誘っているのならば、喜んで行ってあげる。一体どんな相手なのか……考えただけでもぞくぞくするわ……私が見れない程の未来。きっと相当な力を持った相手が居るのね」
イデアの狂気に満ちた笑みには出来るだけ触れないように、
「さあ、迷っている暇はありません。行きましょう」
ふわっ。フレイアが消える。
「のんびりしてたら死ぬわよ。行きましょう」
イデアが消える。急いでシルヴィアも続く。

導きの気配

ふわっ。
「やっと外に出れたー」
「今度は無事に着いたようですね」
廃村の島とは比べ物にならないほど広い大地。さらさら。静かに風が吹いている。
「風が歌っています……」
遠くを見つめて言うフレイア。
「あ、あそこに村が見えるよ！」
「占い師がいるわ。話を聞きましょう」
そう言って歩き出す三人。
「そういえば二人はお腹すかないの？　一度も食事してる所見たことないんだけど」
「食事？　何のことですか？」
「あなた、たまに何かやってるみたいだったけど食事してたの？」
予想外の答え。
「何かって……携帯食料を食べていたんです」
「人間っていろいろと大変ね」
その答えにシルヴィアは少々違和感があったが、恐ろしい目には遭いたくないので何も言わなかった。

ようやく三人が辿り着いたのは、花の咲き乱れるのどかな村。すぐそばに宿屋、隣に武器屋があるが、目的は占い師なので素通りすることにした。
「おや、旅のお方よ」
振り返ると、店と店の間に老婆が居た。水晶の置いてある台があるので、おそらくこの人が占い師だろう。
三人が近付くと、老婆は首を絞められた鶏のような声で話し出す。

「よくぞおいでなさった、旅のお方よ。わしがこの水晶でおぬしらの未来を占って差し上げよう」
「なんか怪しい……」
「な、なんじゃと！　見える、見えるぞ、おぬしらが事故死する未来が！」
「私と同じようなことを言わないで」
イデアはおそらく、微妙に老婆とキャラが被るのが気に入らないのだろう。
「おっと、すまんのう。ついうっかり。ところで、おぬしは予言の力があるのだろう？　なぜ教えてやらんのだ？」
「何か強い力に邪魔をされているみたいで、この旅に関する未来だけは見えないのよ」
「そうか、そうか。ならば、わしが長い年月をかけて編み出した術を使って、その力を抑えてやりたいのじゃが」
そう言ってシルヴィアの方を見る。
「おぬしの持っている携帯食料を一つ貰えんかの？　術に必要なのじゃ」
さっ。老婆は答えを聞く前に、シルヴィアの腰に付けている袋から、目にもとまらぬ速さで携帯食料を一つ取る。
「え」
「ほっほっほ。ありがたや、ありがたや。ちょうど小腹がすいて……いや、これで術が使えそうじゃ」
本当に取ったのは一つかどうか、残りの携帯食料の数を数えているシルヴィアをよそに、老婆は続ける。
「それ、いくぞい……はっ！」
ほんの一瞬、水晶が光を放った。
「おお、一瞬だけ見えたぞ。船、船じゃ、女が操縦しておる。ただ……」
老婆は少し躊躇うような素振りを見せて続ける。
「今、運命が変わった。それも、悪い方に……」

「……」
沈黙する一同。何やら恐ろしいオーラを感じるような。一方シルヴィアは。
「また女……騎士様は……？」
別の意味でショックを受けていた。
「わしが見えるのはここまでじゃ。すまんのう」
微妙な空気のまま去っていく三人。村を出る時、ふとシルヴィアが口を開く。
「ねえ、イデア」
「どうかしたの？」
「私、あの人が事故死する未来が見えるんだけど……」
「私も見えるわ。とても苦しそうにしている」
「……ところで、これからどこに向かうの？　やっぱり船を探すの？」
「そうですね。まずは船を操縦する人物の情報を手に入れましょう」
「うん、じゃあ行こうか！」
とシルヴィアが言った時には、既にフレイアとイデアは向こうを歩いていた。

どうやら、この島は三日月型になっているらしい。始めは海の向こうにもう一つ島があるのかと思ったが、よく見ると、この先の地面と繋がっているのだ。　と、イデアが急に立ち止まる。
「私達を導く気配を感じる」
「え？　どこから？」
「ここに次元の切れ目があるの。限りなく細い、ごく小さなものだから普通の人は近くを通っても気づかないわ」
イデアがそう言って指を指した所には、確かに何も見えない。
「行きましょう。確かに呼ばれています」
フレイアも何かを感じ取ったらしい。ふわっ。イデアが消える。
「え、どの辺から入れば……」

シルヴィアは腕を左右に振りながら次元の切れ目を探している。
ふわっ。シルヴィアが消える。フレイアが後に続いた。

輪廻

ふわっ。次元の切れ目より転送された三人。
静かに風が吹き抜ける、どこか神々しい空気の漂う建物の屋上。
一つの庭園程の広さはある。
「この場所は……」
「私も見覚えがあるような気がします」
イデアとフレイアはこの場所に何らかの縁があるらしい。
さらさら。イデアの髪が風になびく。
「何か来るわ」
イデアがそう言った直後、向こう側の空間が歪み、何かが姿を現す。広大な空間に、二つの巨大な黄金の輪が重なっていて、薄い光を放っている。
「輪廻……」
イデアが静かに近づくと、重なっていた輪が両腕を伸ばしたくらいに広がり、光が中心に集まりだす。
やがて、その光が威厳を感じさせるような男性の顔の形になり、静かに口を開いた。
「我は全てを知っている。しかしそれは全てではない。我が全てを知った次の瞬間には、また別の何かが始まっている。 そしてまた全てを知っても、また次の瞬間には……結局我自身も、この永遠の輪から抜け出せない犠牲者のひとつなのだ」
「どこかで聞いたような……いつだったかしら」
イデアもまた、何かを忘れているらしい。何のことだろうか。分からないから『何か』と呼ぶしかないのだ。
「これが……輪廻？」
そっとフレイアに尋ねるシルヴィア。
「そうです。人が人を超えることを許さず、永遠に苦しみ続けることを強制する存在に形が与えられた時、このような形になったので

そう呼ばれています。しかし、それは輪廻自身も永遠に苦しみ続けるという、破滅の歌の始まりだったのです」
少し悲しそうな顔をするフレイア。
「あなたには未来が見えているのでしょう？　私の予言の力では見れないの。教えてくれないかしら」
「我が見ているのは未来ではない。　未来は変えられる。予言とは本来、外すべきものだ。だが我の予言は外れぬ。予言ではないからだ。　我が持っているのは、予知などという素晴らしい力ではない」

未来にどんな災害が起こるか分かってしまう絶望。そう、『予兆』……そして、それは決して変えることのできない悲劇。全ては予定調和のうち。人々はただ、同じように繰り返すことしかできないのだ。
「意味のない繰り返しに何を求める？　お前はただ、運命に素直になればよいだけなのだ」
運命、と聞くと多くの人は決められた巡りあわせのことを想像するかもしれないが、実際は違う。
運命というのは、『自分が望む、望まないに関わらず、選んでしまった道』のことを言うのだ。目の前に現れた真実を受け入れるのに時間をかけていると、その隙に一瞬にしてその存在を砕かれかねない。そのことを言いたいのだろう。
「分かっているわ。ただ、思い出せないの。自分がどのような存在であったか……」
「ならば、少しばかり力を与えよう。『記憶』という名の力を」
そう言うなり、輪廻は思い出すように語り始めた。

グランドフォール

昔、まだ世界が天上界と地上界に分かれていて、自由に行き来することが出来た頃。
最初の人間であったアダムとイヴは天上界にある知恵の実を口にし、愛を知ってしまった。神を知ってしまった……だから地上界という、狭き檻に追放されたのだ。
そして地上界は人間界と名前を変え、人間は自由に天上界に行くことが出来なくなってしまった。
人は、神になるにはまだ器が小さすぎたのだ。大きすぎる力を制御できずに、人を、自分を、そして世界をも壊してしまう。

そして人間は予兆どおりに、何かのために生きるようになった。何かのために、何かを犠牲にしてしまう。生命は生きることこそが全てだというのに……
制御出来なくなった愛は次第に心に闇を生み、人々に様々な邪悪な感情を与えた。やがて人々は闇に飲まれることを恐れ、心の闇を忌み嫌うようになった。
光によって追放され、行き場を失った闇は、星の記憶という場所に追いやられた。次元が違うために人間界に来れないからだ。

闇はやがて意思を持つ一つの存在となり、その世界にさまざまな闇の住人を作りだした。
闇の力は強大なもので、自由に次元を超えることさえ可能とした。これにより闇の住人が人間界に発生し、町や人々を襲った。
人々の心には再び闇が宿り、ついに闇が人間界を支配した。人々は、闇の住人を生みだした、その存在を『闇の女王』と呼び恐れた。

そして起こったグランドフォール。

闇の女王は人々の心の闇を吸収して得た力を解放した。その力は全ての次元を圧縮し、分解した。ある者はその強大な力によって魔物となり、ある者は肉体を失い、永遠に彷徨い続けることになった。

そこにパンドラと言う名の賢者が現れ、解放された闇の力の半分を一つの箱に閉じ込めた。そして最後の力を振り絞り、人間のいない別の次元へ飛ばしたのち、眠るように死んでしまった。

やがてその箱は『パンドラの箱』と呼ばれ、それが隠されることとなった次元は『禁断の地』と呼ぶようになり、場所を知ることさえ許されなかった。

その後から闇の女王は忽然と姿を消したが、依然として闇の住人は人々を襲い続けている。

この世の全てを表す言葉

「他には何も知らずとよい。答えは全て天と地にある」
過去の出来事を全て話し終わった輪廻はそう言って締めくくった。
「長きに渡る戦いに、答えは見えたか？」
「何か思い出しそう……だけど、怖いの。人は知らないものに恐怖を抱くと言うけど、私は私自身のことが一番分からない。だから私は私が怖い……」
珍しく悩んでいる様子のシルヴィア。
「人間は未来には逆らえない。未来は過去には逆らえない。過去は今には逆らえない。未来は今まで積み重ねられた過去に基づいて創られる。創りたい未来があるのなら、それに相当する過去をつくりなさい。過去を作れるのは今なのよ。今という時間は限りなく短いの。だから今に感謝しなさい、大切にしなさい」
珍しくイデアが助言をする。
「そうですよ、過去なんて今から作り出しても遅くはないのです。既に『あなたが存在する』という過去があるのですから、それだけで十分です」
「やはり、予兆からは逃げられないのだろうか……」
そう言って深いため息をつく輪廻。
「お前にこれをやろう。手を出すがよい」
そう言われてシルヴィアは両手を差し出す。すると眩い光が手ひらに落ちる。光が収まった時、シルヴィアの手のひらには、綺麗に透き通る紺碧の記憶の欠片が。
「……これはお前が持つべきだろう。そして、お前」
次はイデアの方を向いて言う。
「この世の全てを表す言葉。お前は知るべきだろう。時が来たら言うのだ。……」
「その言葉、聞き覚えがあるわ」

「何も聞こえない……」
イデアは確かに何かを聞いたようだが、他の者には何も聞こえていなかったようだ。
「お前は物忘れがひどいようだな。最もその方が、都合がよいのかも分からぬが」
一瞬、何かに集中するような顔をしたあと、僅かにほほ笑みながら輪廻は続ける。
「おお……終末の声が呼んでいる……お前もあるべき所へ行くがよい。我が出来ることはそのくらいだ。お前が何を望み、何を求め、どの道を選ぶか。それは我ではなく、お前が決めること。さあ、行くがよい。お前の望む世界へ」
そういって輪廻はゆっくりと周りの空間に溶けていった。
「終末の声……」
イデアはこの言葉にも何か引っかかるものを感じたようだ。
「なにか音が聞こえませんか？」
不意にフレイアが言った。
「音？　何も聞こえないけど……」
「私も聞こえないわ」
「気のせいでしょうか……」
三人のうちの二人が聞こえないと言うので、フレイアの聞いた音は空耳ということになってしまった。と、目の前に移送法陣が現れる。
「導きの正体はさっきの輪廻だったの？」
「違うわ。輪廻はその道を選ぶことを強制しない。だとすればおそらく……」
闇の女王。全てはその存在に仕組まれたことだったのだろうか。

水平線の向こうには

ふわっ。三人が転送された先は綺麗な海岸。
向こうに人影と、大きな船が見える。
「海賊が居るみたいですね」
「また女……」
シルヴィアはまだ引きずっているようだった。
「シルヴィアさん、もしかしたら船員の中に騎士が」
「居ません」
さすがのシルヴィアでも、そのくらいは分かったようだ。
とりあえず近づいてみる三人。女海賊がじっと水平線の向こうを眺めている。
「水平線の向こうには、何があるのかしら。気にならない？」
話しかけようとした時、女海賊が振り向かずに話しかけてきた。
「ならない」
「なりません……」
「ならないわ」
全員一致で、気にならない、ということになった。
「……ラム酒でも一杯どう？」
「いらない」
「遠慮するわ」
「私はお酒が苦手なので……」
またしても全員一致で、いらない、ということになった。
「ひ、ひどいわ……あ、そうだわ！　あたしの船に乗りたくない？
乗りたいでしょ？　ね？」
「船……あ、乗りたい！」
釣られたシルヴィア。
「なら、あたしと一杯やってくれるわね？　いつも男とばかり飲んでるから、たまには気分転換がしたかったの」

釣れた、釣れた、と女海賊の目が言っているのが分かる。

デア

結局シルヴィアは女海賊と酒を飲むことになり、そのおかげで船に乗せてもらえることになった。
話によると、実は女海賊は船長だったらしく、船員達を紹介してもらうことになった。全体として人数は少ない方ではあるが、どれも強そうな者ばかりだ。
「あたしはメアリ。あんたらは何て言うんだい？」
「さっきと口調が違う……」
「あたりまえさ。初対面の人間に対して、いきなり汚い言葉は使っちゃいけない」
そう言って笑うメアリ。
「確かにそうだけど……まあいいや、私はシルヴィアっていうの」
「私はフレイアといいます。船というのも結構面白いですね」
「おお、船は初めてかい。好きなだけ楽しんでいきな。あんたは何て言うんだい？」
メアリは酒に酔った顔でイデアの方を見て言った。
「グロリアよ」
「イデアじゃ……」
すかさず突っ込むシルヴィア。
「今さっき変えたのよ」
「偽名……？　本当は何て言うの？」
「……よ」
意地悪な笑みを浮かべながら、グロリアは確かに何かを言っていた。が、シルヴィアには何も聞こえなかった。
「私の名前は人間が発音したり、聞き取ったりできない音節で構成されてるのよ」
「何も聞こえなかったんだけど」
「私には歌のように聞こえますよ。確かにはっきりと聞こえるのに、

何と言っているのか分からないのです」
「まあ、正確にはそれも本当の名前ではないのだけど」
「イデア、じゃなくてグロリアって一体何者なの……」
「私は男であると同時に女であって、人であると同時に人ではない。ここに居ると同時に向こうにも存在できる」
「分かりやすく言えば、何処にでも居て何処にも居ない。それがこの方なのです。私達がそこに居て欲しいと望めば、この方はそこに存在してくれます。」
分かりやすく説明されても、全く意味が理解できないシルヴィア。
「あ、あんた、まさか神族なのかい？」
メアリは何かを知っているらしい。
「そう呼ばれていたこともあるわ」
「神族？　何それ……」
「大昔、たまに人間の世界に訪れて、自身の持つ大いなる力を人間に貸したり、あらゆる災害から人間を守ったりした、とされる異次元の存在さ。あたしらが魔法を使えるのも、その神族によって生み出された、精霊と契約を結んでるからなんだ」
「え、イデ、じゃなくてグロリアってそんなすごい人だったの……」
まだイデアの新しい名前に慣れない様子のシルヴィア。
「神という存在は、常に一つの存在であり続けることがないんだ。さらには、意識を分割して二つの生命として存在することも出来るらしい。あんた、とんでもない奴を仲間にしたんだよ」
こわい、こわい、と言って再び笑うメアリ。
「フレイアもそうなの？」
「ええ、そうですよ」
「だけど、ある時から神族は姿を消しちまった。それから何千年って間、神が現れることは無かった」
「どうして姿を消しちゃったの？」
「グランドフォールですよ。いろいろと都合の合わないことがあって、気軽に近づけなかったのです。しかし、この方だけは唯一、自

由に次元を移動することが出来たのです」
神族の中でもグロリアは特別な存在だったらしい。
この言葉を聞いたグロリアは少し間を置いて、いつもの意地悪な笑みを浮かべながらこう言った。
「私は都合がいいと思ってたわ。私の気に入った人間にしか会わなくて済むから」
「他の人には逢いたくなかったの？」
「その存在さえも本当にあるのか分からない。それが私。だけど人間は物質世界に縛られるが故に、私を人間の言葉に置き換えないといけなかった。だから私は、ごく限られた人間の前にしか現れなくなったの。私は型に収められるのが嫌いだから」
「へえ、なんか難しい……多くの人に名前を知られちゃいけない、ってことだよね」
「その通りよ」
「じゃあ、その時は何て呼ばれてたの？」
一瞬、全く分かってないじゃないか、と呆れた顔をしたグロリアだったが、特に気にする様子もなく口を開く。
「デア……そう呼ばれていたわ」
「デア……？」
シルヴィアは何か引っかかるものを感じたようだ。
「古代の言葉で女神を意味するようです」
「いや、分かるけど、どこかで聞いたような……」
「私の勘では、あなたは普通の人間じゃないわ。魔力の量といい、とても神族に近い存在ね」
「ふふっ。記憶が戻るのが楽しみですね、シルヴィアさん」
「あと二つだもん、すぐ見つかるよ！」
「記憶の欠片といえば……」
何かを思い出したような顔をしてメアリは続ける。
「少し離れた所にある島に、別の次元に繋がる魔法陣があるんだ。ただ……」

「ただ？」
「入ろうとしても結界に弾かれちまって、誰一人として中に入れた奴は居ないんだ」
「待っているのよ。来るべきものが来るのを。どちらにしても、この次元に戻ることはないと思うけど」
「構わないさ。あんたらが生きているんなら、どこへ行ったっていい。好きな場所へ行って、好きなことをするんだ。あたしらが今までそうしてきたように」
そう言ってメアリはグラスに僅かに残っていたラム酒を飲み干し、テーブルに置くと、
「もう夜も遅い。部屋は用意しておいたから好きな時に休むといい。目が覚めた頃には目的の島に着いてるよ」
と言い残し、静かに外へ出た。
「どうする？　私はもう寝ちゃおうかな！　あ、でもわくわくして眠れないかも！」
一人で盛り上がっているシルヴィア。フレイアは静かに立ち上がると、
「私はベッドに横になりながら、本でも読みながら夜を明かします」
と、言い残して自分の部屋に向かった。
「神様は寝ないんだ……まあ、いいや。私は寝るもん」
「私は外の景色を見てくるわ」
それぞれが自由に行動を始める。

狂人は未来を語る

外に出たグロリア。メアリは遠くの景色を眺めている。少し悲しそうな顔をしているような……

「あんたは、自分がいつ死ぬか分かっちまったことがあるかい？」

グロリアの気配に気づいて、声をかけてくるメアリ。

「始まりがあるものには終わりがある。別に変なことではないでしょう？」

「ははっ。全くその通りだよ。だけど、認めたくないんだ。自分の過去も、なにもかも……」

「残念だけど、私は未来にしか興味がないの。人は過去を語る、賢者は今を語る、狂人は未来を語る、なんてね」

そう言って、お得意の意地悪な笑みを浮かべるグロリア。

「全く、神様には敵わないよ」

「話はそれだけ？　じゃあまた、その時まで」

ふわっ。何か意味深な言葉を残してグロリアは消えた。

時が経ち、夜もそろそろ開けようとしていた。その時、シルヴィアの耳に微かに変な音が入ってくる。

「……なんの音？」

ゆっくりと部屋を出ると、ちょうどフレイアが居た。

「なにか様子が変ですね」

「うん。グロリアは？」

「ここに居るわ」

いつの間にかシルヴィアの後ろにグロリアが立っている。

「どうしたの？　行きましょう」

外に出る三人。メアリ達が、見たことのない数体の魔物と戦っている。急いで近づく三人。すると、

「あんたらは離れてな！　大事な客に戦わせるわけにはいかない」

微笑みながら三人に言ったあと、すぐに険しい顔に戻り魔物を睨みつける。
「さあ、覚悟しな、セイレン共！」
上半身は人のようだが、背中には翼が生えており、下半身は魚のようになっている。爪は鷲のように鋭く、目からは血の涙を流している。それらが今、素早く水面を動き回っている。
ひゅんっ。風を切る音と共にメアリの細身の剣がセイレンの肌を切る。きぃ。一瞬耳鳴りのようなものがする。
「うっ……」
苦しそうな顔をしながらも、メアリの剣は再び風を切り、一体のセイレンの首をはねた。きぃ。再び耳鳴りのような音が。鈍い爆発音と共に血を吐き、床に倒れこむメアリ。そして体から炎が噴き出したかと思うと、メアリは跡形もなく消えてしまった。
泣き叫び、逃げ惑う船員達。
「メアリが消えちゃった！」
「セイレンの悲鳴を聞いたのでしょう。人間が聞くことが出来ないほど高音な上に、その音波には強い呪いが込められています。そして狭い範囲ですが、その音をまともに聞いた者は火を出して消えてしまうのです」
「この船だけでも助けなきゃ！」
「その通り。行きましょう」
こちらの気配に気づいてセイレンが腕を振り下ろす。すると空から沢山の棘が降り注ぎ、三人を襲う。ぱちんっ。フレイアの防御結界が身を守る。
「あれ？」
「逃げられてしまいましたね……」
三人を襲っていた棘を全て防ぎ終わった時には、既に魔物達の姿は無かった。波の音だけが虚しく響き渡る。

受け継がれる意思

メアリが死んだ後、船員達は葬儀を行う、と言ってどこかに向かい始めた。しばらくして辿りついたのは海岸沿いにある崖。海を一望できるこの場所に、船員達は思い思いの物を供えていく。

「船長……」

「先に逝っちまうなんて……」

やるせない表情を見せる船員達。と、その時どこからともなく……

「海の男ともあろう者が、なんて情けない顔をしてるんだい？」

崖の向こうに、体が透けているメアリが現れた。

「……まあいい。シルヴィア、あたしが初めてあんたに会った時、あたしが何か大きなものを感じて、全身の震えが止まらなかったことを、あんたは知らないだろう。これが運命ってやつなのかねえ……」

「メアリ……」

「シルヴィア、あんたまでそんな顔をするんじゃないよ。あたしの船はあたしが居なくなったって、いつまでもあたしの船なんだ。あの船は海の神に守られてる。どんなに激しい戦いをしても、あの船だけは無傷でいられる」

メアリの体が少しずつ光の粒になって、天に昇っていく。

「おっと、もう時間が来ちまったようだね。シルヴィア、あんたとの旅は最高だったよ。あたしの船は好きに使っていい。この馬鹿な野郎共も好きに使いな。最後に、これを受け取って欲しい」

突如シルヴィアの頭上に光が現れ、ゆっくりと降りてくる。シルヴィアはそれを手で受け止めると、光は白く輝く美しい宝石となった。

「あたしが昔、強い魔物と戦った時に手に入れた物さ。おそらくそれは記憶の欠片だろう。だとしたら、これはあたしじゃなくて、あんたが持つべきだ。使いどころを間違えるんじゃないよ」

そう言ってほほ笑むメアリの体は、もうほとんど見えなくなってきている。
「あばよ、野郎共。またいつか会おうじゃないか！」
光の粒が完全に天に溶けて消えた。
「行こう」
シルヴィアは静かに言った。
「もう行ってしまうのですか？」
「うん。だって、また会えるもん！」
「ふふっ。そうですね、行きましょう」
再び船は移送法陣のある島へ向かう。やがて辿りついたのは、この船よりも小さい島。
「最後の記憶の欠片です……準備はいいですか？」
「もちろん！」
船員達に見送りされながら、三人は移送法陣へと入っていく。

迷宮

ふわっ。
「ここは？」
一面が真っ白。床も、天井も、壁も、全てが一点の曇りもない真っ白だ。
全てが同じ色のせいで距離感が掴みにくいが、向こうに二つ移送法陣が並んでいるのが見える。
「どっちかが当たりってこと？」
「右よ」
導きの気配を感じ取ったのか、グロリアは右が正しい道だと言った。ということで三人は右の移送法陣に入る。

ふわっ。
「え……」
着いたのは先ほどと同じような、真っ白の部屋。
「また右よ」
「同じ部屋が二回続くことによって、相手を惑わす仕組みになっているのでしょう」
三人は再び右の移送法陣へ。

ふわっ。今度の部屋は、どうやら十字になっているようだ。相変わらず、部屋一面が真っ白なので距離感が掴みにくい。
十字路の中心に立ってそれぞれの道の先を見てみる。しかし、来たところを含め、全ての道の先に移送法陣がひとつずつあるだけだ。
「直進よ」
「え、どっち？」
なにも考えず、くるくると体を回転させるように辺りを見ていたシルヴィアは、どちらが来た方向なのか分からなくなっていた。

「こっちですよ」
「一人で入ってたら絶対ここで死んでた……」
「待って」
今にも移送法陣に入ろうとした瞬間、グロリアに止められる二人。
「空間がずらしてあるわ。正しい道を隠して、別の道と繋げてある」
「危なかった……」
「正しい道はこっちよ」
そう言ってグロリアが指さしているのは、空間がずらしてある所より少し手前の壁。グロリアが壁に腕を入れる。と、同時に壁が無くなり、一本の隠し通路が現れた。その先には移送法陣が。
「この先に居るわ」
ふわっ。不安と期待が混ざり合う中、三人は移送法陣に飛び込んだ。

愚かな生命体

ふわっ。着いたのは広い神殿のような所。奥に派手な玉座があり、そこには体が煙で出来ている、人の形をしたものが座っている。
ゆらゆらと揺らめくそれは、こちらの存在に気付くなり静かに立ち上がり、不敵な笑みを浮かべた。
「あれは何て言うの？」
「ルエヴィトですね。魔法を放てば同等の魔法で反撃をしてきます。だからと言って剣で攻撃をしても、まるで完全に読まれているかのように、綺麗に受け流されてしまい、かすり傷を付けることさえできないのです。更にルエヴィトは、この世界にある全てのものに姿を変えることが出来るほか、魔物を生み出す能力まで優れていると言われています」
「説明長い……とにかく凄い奴なんだね！」
「そういうことです」
フレイアが説明し終わったところで、ルエヴィトが、体に響くような低い声で話し出す。
「愚かな生命体よ。褒めてやろう、その度胸を。そして悲しんでやろう、貴様らの最期を……」
「じゃあ、がんばってね」
聞き慣れたグロリアの言葉。そして見慣れた、フレイアの一番弱い防御結界。
「どうしよう、魔法で攻撃しても反撃されたら怖い……反撃するってことは、一撃で倒せないってことだよね」
「試してみないと分かりませんよ」
そう言われてシルヴィアは、相手の様子を見るために弱めの魔法を放った。
「『グランドフレイム』」
床の焼ける音はするものの、ルエヴィトは動じる様子もない。ど

うやら全く効いていないらしい。ゆらり。一瞬ルエヴィトが揺らめいたと思うと、シルヴィアの周りから炎が現れ、シルヴィアを囲むように襲う。
ぱちん。炎はフレイアの防御結界に触れた瞬間、一瞬にして消え去った。
「不思議ね。魔力を感じないのに、確かに魔法を放っている」
「エクステンションフォースとか使わなくてよかった……」
「ふふっ。そうですね。ですが、もし使ったとしても、あなたが死んでしまうということは無いはずです」
「どうして？」
「ルエヴィトは、自身が返した魔法によって相手がどんなに苦しもうとも、死ぬことを許さないというのです。何故か、その魔法が静まるまで治癒魔法を掛け続ける、と言われています」
「どうしてだろう……ところで、全然効いてないみたいだけど、どうする？」
「そうですね……刹那の煌めきよ、我に光の刃を」
フレイアが唱えると、沢山の光の剣が現れ、一斉に刃先をルエヴィトに向ける。
「お行きなさい」
風を切る音と共に、無数の光の剣がルエヴィトを貫通し、後ろの壁に音を立てて突き刺さる。ゆらり。今度は先ほどと同じ数の光の剣が、一斉にフレイアを襲う。
それを見たグロリアが少し目に力を入れる。さらさら。微かな風を感じると同時に、光の剣は砂のように消えてしまった。
「分かったわ」
グロリアが何故か、少し嬉しそうな顔をしながら前に出てくる。
「ここは私がやるわ。下がってちょうだい」
言われたとおりに後ろに下がる二人。シルヴィアは嬉しそうな顔をしている。
「貴様の心は、この空間に何を映し出す？」

「私はあなた。あなたは私」
「ん？　貴様は……」
眉間にしわを寄せるルエヴィト。
「あなたは鏡。私があなたを殺すなら、あなたは私を殺すでしょう。あなたが私を殺すこと。それはすなわち死を意味する。それがあなたの正体よ」
すると、ルエヴィトは静かに玉座に座った。
「おお……その通りだ。我は鏡。見る者の心が汚れていれば、我の姿は醜く見える。我が生み出した魔物も同じ。奴らの姿は人の心、そのものだ。所詮人の心など、すぐに形を変える醜きものよ」
そう言って、ルエヴィトは少し悲しそうな顔をした。
「時が満ちたか……正体が知られれば、我は消えなければならない。我の力をお前にやろう。最後に良い相手に出会えたことを誇りに思うぞ――」
煙で出来ていたルエヴィトの体は一瞬、空気に広がっていったかと思うと、一点に集中し始め、やがて綺麗なすみれ色の宝石となった。そして例によって玉座の前に移送法陣が現れる。
「全部そろった……」
「おめでとうございます。後は星の記憶に行くだけですね」
「あれ？　今度は来ないのかな。導き……」
「行くか行かないかは自分で決めろ、ということでしょうか」
「どちらにしても、行く以外の途はないわ」
「そうだね、行こう！」
もう二度と、この次元に来る者は居ないだろう……

消えかけた夢

ふわっ。飛ばされたのは、一瞬床が無いと錯覚するような、やや広い透明な橋の上。

上も下も見渡す限り、無の世界が広がっている。少し手を伸ばせば、その世界に溶け込んでしまいそうだ。

後ろは途中で途切れているので、このまま前に進むしか無いようだ。その先は、向こうにある大きな一つの島に繋がっているのが見える。

「ここは？」

「さあ……私にも分かりません。どこかの空間に浮いているようですね」

「落ちたら確実に命は無いわね」

「不安にさせないでよ！」

橋は光が反射していなければ全く見えない為、三人はしっかりと床があることを確認しながら進んでいく。ふと、シルヴィアが向こうの島を見る。

「あれ？　なんかあの島、所々欠けてるよ？」

島は所々地面が綺麗に消えていて、まるで始めから何もなかったかのようになっている。

「この空間を作った者が何らかの形で、空間を維持する力を失ったのですね」

「消えかけた夢……この空間の名前は、消えかけた夢！　私、この場所知ってるよ！」

突然、思い出したように話し出すシルヴィア。

「記憶が戻り始めたのでしょうか……」

「いいえ、違うわ。記憶の欠片は、あくまでも星の記憶に入るための鍵にすぎない。誰かがシルヴィアに記憶を与えているみたいね」

ようやく島まで辿りついた。島の中心には大きな池があり、その周りには綺麗な花も咲いている。
水もとても綺麗に透き通っていて、所々欠けていることを除けば楽園と呼ぶに等しい。
島の中心にある池に近づくと、水中に何か彫像のようなものが沈んでいる。
「何か沈んでるよ？」
「なぜ沈めてあるのでしょうか……」
と、その時。大きな揺れを感じる三人。水面が少し盛り上がり、彫像がゆっくりと顔を出す。
やがて現れたのは水瓶を担ぎ、岩に腰掛ける裸の女性の彫像。何故か胸の真ん中に拳ほどの穴があいている。
「シルヴィア。記憶の欠片を」
グロリアに促され、慌てて記憶の欠片を出すシルヴィア。取り出してみると、記憶の欠片は弱い光を放っていた。
「鍵をここに入れろ、って言うことなんだね！」
「その通り」
「でも、どうやって入れれば……」
「星の記憶に行ける、と信じればいいのよ」
「信じる力は常識を超えるのです」
そう言われ、シルヴィアは目を閉じて、手のひらに乗せた記憶の欠片に向かって念じ始めた。
すると、それは徐々に光を強めていき、一つずつ穴の開いた胸に入っていく。
全ての欠片が入ると、彫像の頭の上に今まで見たことの無い、美しい模様の描かれた金色の魔法陣が現れ、神々しい光を放ち始めた。
そして再び、彫像は静かに水中に沈んでゆき、魔法陣だけを上に出した状態となる。
「開いたわね。夢の扉が」
「これも移送法陣なの？」

「そのようですね。同じ魔力を感じます」
「さあ、迷ってる暇はないわ。行きましょう」
「はい。では、シルヴィアさんの為に池を凍らせますね」
そう言って、フレイアがそっと池に指先を付けると、みるみるうちに池が凍ってしまった。
「これで充分、歩けるはずです」
「すごい……」
シルヴィアは、改めて神族という存在の凄さを思い知ったようだ。

忘れられた幻想

ふわっ。次に目の前に広がったのは、木の枝のように枝分かれしている透明な床。所々に小さな島があって、先ほどのような金色の移送法陣が光を放っているのが見える。

そして、この場所も『消えかけた夢』と同じく、あちこちの床が欠けている。

「移送法陣がいっぱい……」

《ここは忘れられた幻想。早く妾の所へ来るがよい。お前が来るのを待っているぞ……》

「え、誰？　どこにいるの？」

辺りを見回すシルヴィア。

「どうしたのですか？」

「今、声が聞こえてきて……」

「私には何も聞こえませんでしたが……」

「私も聞こえないわ。おそらく目的はシルヴィアよ。相手が直接、あなたの心に語り掛けているのね。何を言われても惑わされてはいけないわ。この場所では、心に闇を作ることこそが最大の猛威となるのだから」

「何か変わったことを言われましたか？」

「うん。ここは『忘れられた幻想』っていう所で、私が来るのを待ってるって」

「余裕があるようですね」

「行ってみれば分かるわ。どんな相手なのかしら。楽しみだわ……」

ゆっくりと歩き出す三人。この場所から行ける移送法陣は一つしかないので、全く迷う必要は無い。所々欠けていたり、割れて破片が散っていたりする部分を避けながら着実に進んでいく。

ふわっ。いくつかある島のどれかに飛んだ。大きく円形に広がっ

ている透明な床。さらにそこから、絵に描いた太陽のように細い道が分かれていて、そのうちの一つが島に繋がっている。
「きゃあ！」
島に向かう途中、地面が欠けているのを見落としたシルヴィアが落ちた……ように見えたが。
「あれ？」
「あなたの存在次元をずらしたのよ。次は無いと思いなさい」
「はい……」
「大切な一回を使ってしまいましたね」
「二度と落ちないから平気だもん！」
途中シルヴィアが再び落ちそうになったが、何とか島に着いた三人。
移送法陣が二つある。
「導きの気配を感じないわ。シルヴィア、何か言われてない？」
《左に入るがよい。早く妾の所へ……》
「あ、左だって！」

ふわっ。
「あれ？　ここは……」
きれいに花が咲き乱れる静かな丘。
目の前は海になっているので崖に近い……そう、この場所は。
「ここから全てが始まったのでしたね」
「既にこの時から決められていた、ということなのね」
《さあ、来るがよい……お前の記憶が待っているぞ……》
さらさら。風と共に僅かな空間の乱れを感じる。そして目の前に金色の移送法陣が現れ、三人を誘っているかのように妖しい光を放つ。
「この先には、あなたの全てがあります。覚悟はいいですね？」
「うん。私の記憶、返してもらう！」
さらさら。三人が移転した後、海の見える丘は光の粒となって、

天に溶けていった。

星の記憶

ふわっ。
「誰も居ない……」
「確かに、生命の気配はありませんね」
ついに辿り着いてしまった星の記憶。全ての生命の記憶が保存されている。しかし、誰もそこへ入ることは出来ない、と言われ続けていた星の記憶。
透明な床は大きな円形に広がっている。前の方に小さな箱がひとつ。それ以外は何もない。空も地面も、全てがその存在を失っている。
「この箱……この中に私の記憶が？」
「おそらく……」
「なんか、むずむずするような……開けちゃおうかな！」
「早く開けなさい、焦らされるのは嫌いなの」
「やっぱり、やめようかな」
「全く、あなたという人は」
そう言って微笑むグロリア。
「じゃあ、開けるね！」
軽い金属音を立てて箱が開く。と同時にフレイアの顔つきが変わる。
「危ない、離れて！」
《そう。それでいい。お前の役目は終わり。あとは妾に体を預ければよい……》
「い、いや……」
地面に崩れ落ちるシルヴィア。同時に箱から飛び出したのは、漆黒の闇と、思わず身震いしてしまいそうになるほどの邪悪な気配。
闇はシルヴィアを包み込むようにまとわりつく。
「シルヴィアさん！」

闇はシルヴィアの体に入り込んでゆく。闇が完全に吸い込まれた時、そこに存在したのは、乾いた血液のような色をした翼で体を覆い、真っ赤な髪の毛をなびかせる紫黒の肌を持つ者――

「ついに現れたわね」

「シルヴィアさんが、闇の女王だったなんて……」

「戻ってくる。妾の全てが……おお、懐かしい。終末の音も歌っている……」

嬉しそうな笑みを浮かべた闇の女王が、グロリアの方を向き、喉が潰れたような声で言う。

「来たか。デア……いや、エスプリと呼ぶべきか」

グロリアの昔の名前を知っているらしい。

「エスプリ？　そんな名前で呼ばれていたかしら。まあいいわ。あなたには消えてもらうから」

「気に入らぬ……なぜ妾の好きにさせない？　もう少しで完全なる世界が完成すると言うのに」

「理由なんてないわ。ただ私が気に入らないからよ」

「お前も運命に素直になればよいのに……まあ良いだろう。いずれにせよ、邪魔はゆるさぬ……」

醜い笑みを浮かべ、闇の女王が魔法を唱える。

「『マーシレス・トラジェディー』」

巨大な黒い球体が二人の上に降りてくる。これを受けた者は、激しい痛みとともに思考が分断され、記憶も、思いも、全てが極限まで薄められてしまう、という究極の呪術。

「何もできず、思いすら何もない。そんな世界に、お前たちを送ってやろう！」

「私が出るまでもないみたいね」

ぱりん。二人を飲み込もうとしていた球体が割れて消えた。よく見ると、巨大な金色の花のような形の紋章が、二人を覆うようにうっすらと存在する。フレイアの使える最高位の防御魔法だ。

二人を同時に守れるほどのそれは、あれほどの魔法を受けても全

く揺らぐこともなく、うっすらと光を放ち続けている。
「おお、さすが神族。妾も本気を出さねば」
闇の女王が天を仰ぐように両腕を広げる。刹那、その紫黒の肌から闇が噴き出し、真っ白だった世界を一瞬にして真っ黒に染めてしまった。
「さあ、今こそ妾の世界に来るがよい。神なる槍、破壊の神よ」
一瞬、闇の女王の後ろに光が現れたが、特に何も来る気配が無い。
「ん？　どうした……」
「神なる槍と、神なる盾は、共に争い合ってはならない掟。どちらかが先に存在する場合、共に争い合うような形で、もう一方が存在することはないのです」
「フレイアが居る限り、あなたの攻撃は当たらない。もう諦めなさい」
「認めぬ、認めぬぞ……」
悔しそうな顔をする闇の女王。
「私も魔法を使ってみようかしら」
グロリアは、珍しく左手を天に差しだし、大いなる力に形を与えた。
「天よ、私に光の弓を」
そう言って手を握ると、グロリアの手から光が溢れ、美しい装飾が施された光の弓が現れる。それを闇の女王の方に向けて狙いを定め、右手で弓を引くような動作をして、
「天よ、私に一筋の光を」
と言って右手を離すと、弓から一本の光の矢が飛び出した。光は螺旋状の尾を引きながら闇の女王に飛んでゆく。
「効かぬぞ。『ディメンション・スリップ』」
闇の女王の前に黒い靄のようなものが現れる。
「開きなさい。次元の扉……」
グロリアがそう呟くと、闇の女王の背後に、とても小さな次元の切れ目が現れる。フレイアを含め、それに気づく者は他に居ない。

光の矢は黒い靄に吸い込まれて消える。
「うっ……」
前に倒れこむ闇の女王。背中には光の矢が。
「さあ、話してみなさい。私はあなたの全てを知っているのよ」
苦しそうにもがく闇の女王。体から光が溢れ、肌の色も少し白に近づいている。
「私は、私は……」
闇の女王の髪が黒に変わっていく。

「私は、闇から生まれた、闇の女王……闇を作ったのは人間。人間の心の闇。嫉妬、妬み……」
ゆっくりと体を起こし、闇の女王は続ける。
「そんなものから私は生みだされた。自分達が作ったにも関わらず、人間は私を闇の女王、更には『死すべき者』と呼び疎外する。……憎かった。私には憎しみという感情しかないのではないかと思うほどに……だから殺した！何が悪い、そうしなければ私が報われない！」
自分の悲しみを露わにする闇の女王。
「それで、それであなたが幸せになれると思ったのですか！　間違っています！」
フレイアが悲しそうな顔をしながら声を荒らげる。
「四つ葉のクローバーを得るために、三つ葉のクローバーを踏んでいいわけではないのです……幸せは、そのようにして得るものではないのです！　何かを犠牲にして得る幸せなど、ただの幻想にすぎません！　そんなものは偽りの幸福です！」
「偽りでもいい。私の存在など、その程度のものにすぎない……」
完全に気力を失った様子の闇の女王。
「そんな勝手な思いでシルヴィアさんを……」
悔しそうな顔をするフレイアの目には光るものが。闇の女王はゆっくりと今までの出来ごとを語り始めた。

繋がり

シルヴィアは、私から出来たもう一人の私。私は、グランドフォールで使った闇の力の半分が、パンドラという賢者によって封印されたと知って、箱を探しに禁断の地へ行った……すぐにそれは見つかって、それを私の世界に持ち帰り、中の闇を吸収していった。

そこで私は過ちを犯した。パンドラの箱の中身は、闇だけではなかった。最後にパンドラの手によって、希望という光が入れられていた。

希望を吸収した私の中では、闇と光がぶつかりあって混沌が発生していた……気づけばその中から、少しずつ私ではない何かが顔を出し始めてきた。

そしてある日、私の世界が揺らぎ始めた……私の夢は消えかけて、私の幻想を知るものは居なくなっていった。

シルヴィアが……シルヴィアが闇の世界と反発し合っていた。まだ力が回復していない私と、私の世界はそれに耐えられるはずが無かった……

私は最後の力を使い、私の『心臓』だけをシルヴィアの中に封印し、シルヴィアを未来の世界に送りこんだ後、この世界に鍵をかけ、鍵として使った私の器を、五つの欠片に分解して別の次元に移送した……

記憶の欠片を探しているうちに、シルヴィアの力が少しずつ弱まれば、私はまた復活できる。その頃にはこの世界にも闇が戻っているだろう、と信じて……

汝に終焉を

「だけど今気付いた。私はもう私ではない。シルヴィアになりかけている……闇は光には勝てなかった……」

全ての真実を語ったところで、再び闇の女王の体が人間の体に近づいてくる。血の色の羽は落ち、肌もほぼ人間と変わらない。

「そんな……それでも、たとえ闇から生まれたとしても、あなたには光を持てるはずです……私はすべてを知り、すべてを超え、すべてを許し、すべてを愛する者……私はあなたを許しましょう。だから、諦めないで。今から、本当の幸せというものを、手に入れに行きましょう？」

「それは出来ない。私はあくまでも闇だから。それにもう、後戻りをするには、私は手を汚し過ぎた。私は罰を受けなければならない……光など始めから見るべきではなかった。見ればそれが欲しくなってしまう、それを支配したくなってしまう。だって私は闇だもの……」

雨が降れば晴れを思って嘆き、晴れれば雨を思って嘆く。それが人間の心の本質。闇の女王は自らを、五つの記憶の欠片、という形で保存した。

赤の欠片は『破壊』を意味する。世界を焼き尽くす偽りの裁き。
黒は『支配』人々を絶望の檻に閉じ込める漆黒の闇。
青は『恐怖』どんなに温めようとも、決して溶けることのない氷。
紫は『嫉妬』混沌の如く渦巻き、人々の足を引く悪魔。
そして最後の欠片は『希望』闇を拭う一筋の光。

皮肉なことに、この時点で闇の女王の敗北は決められていたことなのだ。

そんな真実を知ってしまったフレイアは、どうしても闇の女王が可哀そうで仕方が無いのだ。愛と美。それがフレイアの本質なのだから……

「そんなことはありません。誰の心の中にも闇は存在するのです。あなたには……そんなに綺麗な光が有るではありませんか。闇を恐れる必要はないのです。闇は光によって照らされている間は、闇になることはできないから……」

「罰というものは本来、人が人に与えていいものではないのよ。善悪なんて本当は存在しない。ただ、そのように分ける現象があるだけ。罰というものは、あなたが自分を許せない時に、自分自身に与えるべきものなのよ」

「私もできるなら光になりたい……愚かでもいいから、人間として生きたい……」

闇の女王の体から光が溢れ、闇を照らしてゆく。

「うっ……」

しかし、それを阻止するかのように闇が覆いかぶさる。この世のものとは思えぬほどの邪気が、闇の女王の体に無理やり入り込んでくる。

そして何処からともなく、大地を割るような、おぞましい声が。

《多くの犠牲を出しておきながら、自分だけ浄化されようと言うのか。貴様も道連れにしてやる……》

闇の女王としての、強大な力を持っていられるほどの器を無くした瞬間。力が暴走し、自らの力に操られてしまう。

さらには、今までに出してきた犠牲者の怨念が、彼女を消そうと襲いかかる。

「哀れなものね。人間の心は、自分でも気付かないうちに、時々刻々と汚れていっている。なにが一番哀れかと言えば、自分が毒されていることに気づけないことよ。動き出したらもう、止められない……」

「大変です……早く助けなければ！」
闇の女王の体に、再び血の色の翼が生える。苦しそうに闇を抑える闇の女王。
「私の、体は、気にしなくて、いい……私が、私を止めて、いるうちに、早く……」
途切れ途切れに言う闇の女王。
「そんな……」
「それが、あなたの望んだ道なのね……分かったわ」
グロリアは静かに闇の女王に近づき、右の手のひらを地面に向け、魔法を唱える。
「今こそ与えましょう。汝に終焉を」
暗黒の空の切れ目から、いくつもの光の帯が現れる。
人間が『天使の梯子』と呼んでいるものだ。その光は闇の女王を貫き、そこに纏わり付く闇を消し去ってゆく。
「これで、終わりね……これは、私が、私に与えた罰……いつか、人間として生まれたら、その時は、お願いね」
その顔が優しい微笑みへと変わる。
「私を、許して……」
闇の女王は光の粒となり、さらさらと天に昇って行った。
「ありがとう――」
最後の声が聞こえた後、小さな光の球が落ちてくる。光は二人の目の前で別の次元と繋がり、強い光を放ちながら、誰か――眠っている人物を置いて行った。
「シルヴィアさん！」
「ほとんど傷はついてないわね。無意識のうちにシルヴィアの肉体を、別の空間に移して守っていたのよ」
光であることを望んだ闇。運命に囚われた、哀しみの女伯爵。滅びゆく力と、滅びゆく世界……もしもあったなら、愛があったなら、奇跡は起きたのかもしれない。

「あ……私、生きてる？」
シルヴィアが目を覚ます。
「シルヴィアさん。よかった、安心しました」
「私、闇の女王の中に居たの。その時に記憶が入ってきて……」
シルヴィアは、少し悲しそうな顔をしたと思うと、その先を話すのをやめてしまった。
「闇の女王は、闇の力が溜まればまた蘇れる。記憶は戻らないけど……だけど大丈夫。次は人間として生まれて来れるよ！　だって、そう信じてるもん！」
「ふふっ。そうですね。私も信じています」
「来るわよ。導きが」
三人が無事に再会を果たした所で、例の導きを感じる。透明な床は、端の方から少しずつ音を立てて消えてゆく。
しかし、移送法陣が現れる気配はない。このままでは……
「どうしよう！　死んじゃうよ！」
慌てふためくシルヴィア。グロリアはそれを見て、呆れたような顔をしながら、何もない空間に向かって命じる。
「開きなさい、次元の扉。私達をあの場所へ」
目の前の空間が揺らめく。どうやら別の次元に繋がったようだ。
「さあ、迷ってる暇は無いわ。行きましょう。」
ふわっ。三人はグロリアの開いた次元の扉に入る。

海の神

それからしばらく経った、ある日のこと。三人はメアリの海賊船に乗っていた。
「うわ、こっちの方ずっと海だよ。水平線がきれい！」
「ふふっ。そうですね」
「向こうに島が見えて来たわよ」
グロリアがシルヴィアの見ている方向と逆の方を指さす。
「本当だ！　私達が初めて辿り着く予定の島！」
「シルヴィアさんの操縦はとても凄かったですからね……」
「そうね……何か来るわ」
「え？」
「とても恐ろしいものが」
そう言ってグロリアが、あの意地悪な笑みを浮かべる。
「とても恐ろしいもの……こんなに恐ろしいグロリアでも恐ろしいと思うなんて、一体どんな奴なんだろう……」
グロリアが無言でシルヴィアを軽く睨んでいる。
「いや、違いますよね。うん、違う。凄いのが来るらしいから、準備しておかなきゃ！」
突然大きく揺れる船。そして激しい水しぶきと共に、何かが船の上に乗り込んでくる。
「ふう。ようやく戻れたよ。久しぶりだねえ、シルヴィア。元気にやってたかい？」
目が点になっていたシルヴィアだが、状況を理解した所で目が輝きだす。
「メアリ！　なんでここに居るの？」
「お帰りなさい、船長。いえ……海の神、テテュスよ」
「え、この人も神様だったの？」
「よくわかったねえ！　いつから知ってたんだい？」

グロリアは始めから、全てを知っていたらしい。ただこの時の為だけに、知らないふりをしていたのだ。
「あなたに初めて会った時からよ。他人の目はごまかせても、私の眼はごまかせないわ」
「あたし達がどんなふうに死と復活を繰り返してるかが、あんたには分かるのかい！　そいつは面白い！」
と、メアリが何かを思い出したような顔をする。
「……ところで、あの馬鹿野郎共はどうした？　まさか、あの後もずっとあんな顔をしてたんじゃないだろうね」
「まあ、仕方ないよ！」
「ふふっ、そうですね」
「あ、こんなことしてる場合じゃないよ！　早くみんなに教えてあげなくちゃ！」
「そうだねえ。教えてやらないと。『船長』の復活をね……」
船長の復活を祝い、宴を始めた一同。
夜も深くなってきた頃、フレイアとグロリアは外に出て行こうとする。
「どうしたの？　二人とも」
「少し出かけてくるわ」
「はい。行くべき所があるのです。すぐに戻ってきますよ」
「分かった。じゃあ気を付けてね！」

死すべき者

ふわっ。
「着いたわね」
「はい。聞こえますよ。終末の音が……」
静かに風が吹き抜ける、どこか神々しい空気の漂う建物の屋上。
少し前に輪廻と会った、あの場所。
「死すべき者達が、私を待っているのね」
「はい。運命に素直になるのに、少し時間がかかってしまいましたね……」
「それもまた運命よ。……もし、運命が誰かによって決められている『予定』だとしたら、それは一体誰の予定なのかしら」
さらさら。グロリアの髪が風になびく。
「ふふっ。ご冗談を。この物語は全て――」
フレイアの発言を遮るように、思わず耳を覆いたくなるほどの轟音が聞こえてくる。
そして空に浮かぶ星が一際強く、赤く輝いた。赤い星は徐々に大きくなってゆき、やがてグロリアのすぐ目の前に落ちる。地面が割れる衝撃を肌で感じる二人。
「今度ははっきりと聞こえたわ」
「そろそろですね……」
「ねえ、あなた」
「はい、なんでしょう」
「前にもこんなことがなかったかしら」
「不思議です。初めてのはずなのに、あなたに言われると……ふふっ。また会えたらいいですね」
そう言って微笑むフレイア。
「なつかしい……」
少し遠い目をしながらそう言ったグロリアの顔は、今までに見た

ことのないくらい、美しく微笑んでいた。
最期の時を告げる終末の音。不気味なほどゆっくりと、静かに空が落ちる。
「ああ、なんと心地よい……」
うっとりとした表情をして、消えゆく世界に身を預けるグロリア。
あと少しで全てが真っ白になりそうな時、かすかにグロリアの最後の声が聞こえた。
「サンサーラ――」

死すべき者（後書き）

サンサーラとは、サンスクリット語で「輪廻」を意味するそうです。

この世の全てを表す言葉を、人間の次元に合わせて言うなら（少し意味は変わって来てしまうけど）輪廻ということになります。

エピローグ

追憶の彼方に見つけた、全ての欲が満たされるような、この感覚。これは何の記憶だろうか。

それは夢。幾度となく繰り返す、無限の生と死。全ては現であり、全ては夢である。現といえども夢のように曖昧であり、夢といえども現のように明瞭だ。

本当に求めているものだけは手に入れることが出来ない、哀れな存在。だが、もしも愛があったなら、奇跡は起きるのかもしれない……

孤独な夢、泡沫の幻想、隠された記憶。全てが消えてしまった今、ここにあるのは『生きている』という現だけだ。

今、全てが終わり、全てが始まる。サンサーラ――

一断章一　ある日の出来事（前書き）

―断章―　ある日の出来事

グロリアとフレイア、そしてシルヴィアの三人が旅をしている。
いつもの通り、グロリアとフレイアが前を歩き、シルヴィアが後ろについて行っている。その時の、ある出来事。
「ねえねえ、この世界にはいろんな人が居るけど、やっぱり凄く変わった名前の人も居るの？」
シルヴィアが二人に話しかけた。
「もちろんいますよ」
「たとえば？」
「私がある所に降りた時には『風呂見』という名前の方がいらっしゃいましたよ」
「それってただの痴漢だよね」
「それは言わないお約束なのです」
が、時すでに遅し。シルヴィアは禁断の言葉を口にしてしまった。
「私が昔、ある村に降りた時、『汚い』という名前の人に出会ったわ」
「……え」
既に変な名前の極みに達してしまった。
「なんでも、悪魔に気付かれないようにする為だとか」
「いくらなんでも、その名前は汚いですよね。ふふっ」
さらっと悪魔のようなことを言ったフレイア。
「やっぱり神様は格が違う……」
シルヴィアはもはや、苦笑いをするしかなかった。
「じ、じゃあ、長い名前の人は？」
まだ懲りずに、この話を続けたいらしい。
「私は『バナカファラッタ・シャトリウルソウラペロー』という人物に会ったわ」
「何かの呪文の間違いだと信じたい……」

この話題も大いなる力によって、一瞬で極みに達せられてしまった。
「フレイアはどう？」
もはや聞く余地はないと思われていたが。
「私は『カリジオ・テネブラ・セルタネルス・モリス・ケルタ・トムノ・イ・ヘリア』という名前の人を……」
「ねえ、あなた」
「はい、なんでしょう」
「それは名前ではなくて、死の言葉よ」
その言葉を聞くだけで死んでしまう、と言われている言葉。高位の呪術師などが、相手を道連れにして自らも死ぬ時に使うと言われている。
「あら、そうでしたか……あっ」
まさか――フレイアが、シルヴィアが居たであろう所を見る。そこには何か横たわっているものが。
「シルヴィアさん？」
返事がない。死んでいるようだ。
「死んでしまいましたね」
シルヴィアが生きていたら、死んでしまいましたね、じゃないよ！　と言っただろう。
「そのうち生き返って、気づいたら後ろに居るはずよ」
「そうですよね」
そう言って二人は何事もなかったかのように歩き始めた。

―第三章―　プロローグ

もし、あなたが真実であると信じていたことが、実は偽りであったと分かった時。あなたは一体、どんな顔をするだろう。あなたが現であると信じていたことが、ある日突然、夢になってしまったら……しかし、夢と現は紙一重。夢であると信じていたことが、ふとした瞬間に現となっていたとしても、全くおかしい事ではないのだ。今まで常識や、秩序により、ずっと押し留められていたものが弾けた時、人間は、世界は、急速に進化を遂げるであろう。今回、私があなたに見せようとしているのはそんな世界。

では、充分に気を付けて――

時は不明。なぜなら、この時代の人間達は年月を数えるようなことをしないからだ。そのため、ほぼすべての人間が自分の年齢さえ知らない。何故そんな不便なことをしているのか。

ある時、人間は思った。なぜ自分達に死があるのか。死さえなければ毎日恐れながら生きる必要はないのに。

時が経ち、人間は気付いた。私達は時がたてば物事を忘れてしまう。それは苦しい事も忘れられるということだ。その忘却という存在こそが、私達にとっての生きる希望。パンドラの箱から出てきた、唯一の光なのではないか、と。だからせめて、時の流れを忘れることによって、自らの運命を忘れようとしたのだ。長い苦痛から逃れるために。そして更に時が経つにつれて人間は、ある思想家が説いた言葉を信じるようになった。

『私達は永遠を手に入れるために生まれた』

我々に『死』という忌まわしいものがあるのは、人間が不完全であるからだ。死を乗り越えることこそが、先祖が我々に遺した、人間が完全になるための試練なのだ、と。

やがて世界は科学に満ち、科学こそが真実であると、多くの人間が信じるようになった。目に見えるものだけを現とし、そこには神という存在が入り込むことさえ許されなかった。そのせいもあってか、今もなお、科学の力は急激に成長し続けている。

今や、体が不自由でもロボットが代わりに家事をこなしてくれる。わざわざ歩かなくとも椅子が動いてくれる。もし、目的地までの道を知らなくとも、椅子が勝手に目的地まで行ってくれる。肘掛についているボタンを押せば、椅子の横からホログラムディスプレイが出て来て、様々な情報を得る事が出来る。

それでもまだ、強欲な人間は満足できないのだ。全てを手に入れた人間が、最終的に求めたのはやはり『永遠』だった。どんなに抗(あらが)とも、必ず死がやってくる。死後の世界などというものを信じない、今の人間にとって死とは、自らが手に入れたもの全てを奪われることに等しいのだ。だからこそ、その者の説を支持する者が多いのだろう。

信じれば

ここは、ヴェリターテと呼ばれる国。世界中で最も最先端で、世界の中心となっている国だ。その国の首都、テネブラ。『暗闇』という名の通り、特別な警備技術により外部から近づくことが難しくなっている。その他、今までの人間の想像を遥かに超えるような、未来的な機械が揃っているのがこの都市だ。

この時も相変わらず、機械の製造が盛んに行われているようだ。人々は、空を飛ぶ椅子に乗って都市を行き交っている。と言っても、浮き上がれる高さが決められているので、そこまで空高くを飛べるわけではない。

と、そこに一人の老人が現れた。顔はしわくちゃで、一昔前に流行ったような帽子を深々とかぶり、どこか怪しげな空気を漂わせている。その老人は空を飛ぶ椅子にも乗らず、徒歩で辺りを彷徨(さまよ)っている。この時代の人間から言わせてみれば少し迷惑、というより危険なのだが……

「おい、危ないぞ、爺さん」

案の定、一人の男性が老人にぶつかりそうになった。

「おお、これは、申し訳ない」

老人は男性にゆっくりと頭を下げた。

「爺さん、せめて『F‐MRチェア』くらいは使ってくれよ、危ないから」

男性は自分の座っている椅子を軽く叩いた。再び老人は頭を下げ、ゆっくりと上げたかと思うと、

「おお、すまなかった。だが、気づいてしまったのだ。科学の力では、永遠を手に入れられない……」

と言って右手の手のひらを上に向けた。

「だから、私は魔法の力で永遠を手に入れることにした」

ぶわっ。老人の手から炎が噴き出す。

「うおっ」
男性が驚いてバランスを崩しそうになる。その様子を見た者が次々と寄ってきた。
「なんだ？」
「なにあれー」
「今の、どうやったんだ？」
一人が老人に聞いた。
「ただ、信じればいいだけだ。しかしそれは、簡単なようで簡単ではない。だからこそ、魔法を使えるようになれば、なんだって出来るようになる。どうかな？　私と一緒に魔法を研究するのは」
老人は炎を出した手を軽くさすり、続けて言う。
「もちろん、いますぐにとは言わない。その気になったら、いつでも来なさい。信じる者が多ければ多いほど、魔法の力は増していくのだ……」
そう言い残して老人は、ぶわっ、という少し乱暴な風と共に消えてしまつた。この時、何人かが魔法への憧れを抱き始めたのは言うまでもない。

背中合わせの女神像

「全く、あの爺さんも変わり者だよな。このご時世に『背中合わせの女神像』を作ってくれ、なんてよ」

二人の男性が、日の傾きかけた路地を歩きながら話している。

「まあ、仕事だから仕方ないさ。ちゃんと金は貰えるし」

「なんか、気が乗らないなぁ」

「そうだな……」

この二人は広場に置かれるオブジェなどの制作に携わる仕事をしている。普段は大きな企業や国からの依頼で仕事をするのだが、この日は一人の怪しい老人が制作を依頼してきた。その老人が言うには、ある実験をしたいので背中合わせの女神像を作ってくれ、ということらしい。

『こちらの女性は腕組みをしていて、反対に立つ女性は胸の前に手を組んで、やや下を向いて……』など、二人はその細かな注文の多さに、呆れるような笑いしか出て来なかった。

そして何が一番気にかかるかと言えば、老人が最後に『最後まできちんと、頼んだぞ。私はいつでも見ているからな』という、不気味な言葉を残して帰って行ったことだ。別に変った依頼だからと言って、いい加減に作る気はなかったようだが、念を押すように言われたことが少し気に食わないらしい。

片方の男性がふと、脇の花壇に咲くあじさいに目をやると、腰くらいの位置にある葉の先から、カタツムリがじっと男性を見ている。あんな言葉を聞いた後だから、変な所にまで目が行ってしまうのだろう。

「気にし過ぎか……」

男性は誰にも聞こえないように呟いた。

噂をすれば

それから少し経ったある時。老人はまた歩いていた。今度はこの都市で一番大きい広場に向かっているようだ。ここには国の式典などを行う舞台がある。この舞台は式典以外の時は解放されていて、誰でも自由に使うことが出来ることから、自分の特技を披露したい者などが集まる傾向にあるようだ。広場に着くと、何人かの男女が老人に近寄って来た。

「おお、来たか爺さん！　魔法、教えてくれよ！」

メガネをかけている太った男性が興奮気味に老人に話しかける。

「まあまあ、落ち着いて。魔法は精神を集中するものなんだ。そして信じるのを忘れてはならんぞ。信じる力は常識を超える。信じてさえいれば、人はもの凄いパワーを出せるんだ……」

老人がゆっくりと舞台に上がり、目を閉じて腕を広げる。すると老人の体が浮き上がったではないか。

「うわー、すっげえ……」

「お爺さん、私にも教えて！」

「いいだろう。椅子から降りて、目を閉じてごらん。そして自分にも出来る、と信じるんだ。この世界の中でも私が居れば、君たちにも魔法が使えるはずだ」

言われたとおりに男女は目を閉じている。ふわふわ。

「うわあ……すごい、私浮いてる！」

女性が集中を切らさない為か、静かに喜びの声をあげる。

「おお、俺も、う、浮いてる……」

「ほれ、君たちも見ているだけじゃなくて、体験してみないかな？」

その頃にはこれを見た人間が大勢広場に集まっていて、凄い熱気を放っていた。

「そう慌てなくても、みんな同時に体験させてあげるさ。さあ、目を閉じて……」

そうして数え切れないほどの人数に魔法を見せているうちに、日も傾きかけてきた。
「おや、もう時間か。君達、また今度会おうじゃないか」
「えー、もう行っちゃうの？　また来てね、お爺さん」
「ちゃんと来てくれよ！　俺も椅子使わないようにするから！」
「おお、その調子なら君たちもいずれ、私が居なくても魔法が使えるようになりそうだ……」
ぶわっ。何人もの人々に見送られながら老人は消えた。

再び時は流れ行き、まだ日が出ているある時。二人の男性はいつもの工場で、『背中合わせの女神像』の制作を続けていた。女神像は、ほぼ完成していて、後は目になる部分を掘るだけのようだ。がりっ。
「おっと、いけねえ」
男性の一人が、女神のドレスに当たる部分に傷を付けてしまった。
「おいおい、気を付けてくれよ。あの爺さんの事だから、きっとどこかで……」
「気を付けておくれよ。大切なものなんだから」
例の老人がいつの間にか男性の後ろに居た。
「うわっ」
「噂をすれば……」
「しなくたって、わしはさっきからここに居たぞ……まあいいだろう。いい加減にやっている様子ではないし、大目に見てあげるとするか。それでは、頼んだぞ」
ぶわっ。老人は少し乱暴な風を起こし、消えた。
「……なあ」
「いや、言わなくていい」
あの老人は普通の人間ではない、と認識し始めた二人だった。

マザーの予言

その頃。この都市の中でも最も豪華で大きな建物――大統領官邸。建物の外側には、薄い黄色の防御障壁が張られている。出入り口の類はなく、なんでも、極秘の技術を使っているらしい。この街の人間から見ても未来的な技術の駆使された建物だ。

その建物の中、大統領の部屋。この時代には不似合いな、がっしりとした体格で、茶色のスーツを着た壮年の男性……この存在こそが大統領である。

大統領は高級そうな椅子に座って、コンピューター達に指示を出しながら、なにか考え事をしている様子だ。

「なぜFシリーズを使う人間が減っているのだ……」

Fシリーズというのは、低空飛行をして移動するタイプの多機能チェアのことで、最も代表的で人気があるのはF-MRチェアである。ここ最近になって急に、Fシリーズを使わず、徒歩で移動する人間が増えたことに、大統領は疑問を抱いていた。

「マスター。オ話ガアリマス」

大統領の目の前に、人の顔の立体映像が現れた。

「どうした。マザー」

開いていたコンピューターを戻し、大統領がマザーコンピューターに話しかける。

「マモナク、コノ世界ハ終ワリマス」

「なんだと?」

「マスター。強イチカラガ、アナタヲ殺スデショウ。私モ、殺サレテシマウ……」

ざざっ。立体映像が乱れる。

「マザー。誰がお前を殺すのだ、言え!」

大統領が落ち着きを失い始める。

「魔法ガ、コノ世界ヲ、私ヲ、殺シ――」

ぷつん。立体映像が消えた。
「どういうことだ！　……おい、誰かこい！」
強く机を叩き、廊下に居るはずのロボット達に声をかけるが、返事がない。マザーが死んでしまったことにより、今までマザーが動かしていた全てのロボット達が機能を停止してしまったのだ。
「この役立たずが！」
大統領は顔を真っ赤にしながらも、手動で椅子の横からコンピューターを出す。ぶわっ。誰か、白衣を着た人間が大統領の部屋に入って来た。
「おい、お前、研究区域の奴だな。どうなっているのか説明しろ！」
「……どうなっていると言われましても、御覧の通りでございます」
研究員と思われる者は、どことなく嬉しそうな笑みを浮かべているようにも見える。
「私を馬鹿にしているのか！　説明しろと言っているんだ！」
「うるさいですねえ……あなたの時代は終わったのです。あなたはもう、不要なものだ」
その言葉には威圧が込められていた。そして、研究員が右の手のひらを上に向ける。ぶわっ。炎が上がった。
「そ、それは！」
大統領が目を丸くして、後ずさりをする。
「そうです。あなたの求めていたものが完成したのです。とても役に立ちましたよ……それにしても、皮肉なものですねえ。あなたの求めていたものによって、あなたは殺される」
「なぜ、なぜお前は私を殺すんだ！　科学が発展すれば、永遠を手に入れられるのに！」
「科学の力では永遠を手に入れることはできません」
「な、なんだと……」
「科学は人間が生んだものです。しかし、人間は無限の存在ではありません。有限から無限が生まれることなど、あり得ないのです」
「ならばなぜ、なぜ私達は生まれたのだ！　なぜ生きているのだ！」

「それはこれから説明して差し上げます。そのためには、あなたの犠牲が必要だ……死ね！」
研究員が大統領に右の手のひらを向けると、左手で右手首をしっかりと押さえ、叫ぶ。
「火力最大、放射！」
先ほどの炎など比ではない程の火炎地獄が大統領を襲う。
「焼き尽くせ！」
「う、うわあぁぁ！　……助けて、助け、て――」
大統領はしばらくのたうち回っていたが、まもなく絶命した。この辺りのコンピューターが、全て死んでいるからか分からないが、火災警報器もセキュリティも反応しない。
研究員は真っ黒の塊を見て醜い笑みを浮かべた後、音もなく背景に同化して消えた。

名も無き王

しばらくして、マザーの予言どおりに科学の発展は止まった。世界の中心が崩れた瞬間だ。もちろん、その影響は世界中に広がって行った。そして今、広場に新しく国を治める者が現れる。

最近現れた、司祭服と呼ばれる純白の衣装を着ていて、その袖や裾には銀色の刺繍が入っている。新世界の王になる者はまるで、孫に微笑みかける祖父のような穏やかな顔をしている。

「国民の皆さま。科学の時代が終わりました。最後に大統領は、私に言いました。もうすぐ科学の時代が終わる。私はマザーと共に逝く。だからお前が王となり、この先の世界を作れ、と」

王は広場にある舞台に立っていた。王は目をしばたたかせ、涙をこらえているような仕草をして続ける。

「ロボット達を動かしていたマザーは死んでしまった。魔法の力が存在するには、少々都合の悪い存在だったのかもしれません。犠牲は胸が痛みます。しかし、故大統領の為にも、この苦しみを乗り越えるべきです。科学で果たせなかったことを、私達が魔法で果たしましょう……私がこの国を、魔法の世界の中心にします。魔法で繁栄を極めるのです」

絶望の声を上げる者も居れば、歓喜の声を上げる者も居る。それらの声を聞きながら、王は消えた。

こうして魔法は世界へと広がって行く……

「頼む！　出てくれ、炎！」

この時も広場には、魔法を使えるようになろうと練習している者が集まっていた。中には既に、空を飛ぶことを可能としている者も居る。

「それにしても、あのお爺さんどうしたんだろう」

「せっかく魔法の世界になったのになぁ……」

魔法使いの老人は、ある時から急に現れなくなった。かつてFシリーズに搭載されていた、人物検索機能を使ったりもしたが、老人は見つからなかった。この世のものではなかったのだ。
ぶわっ。
「あの老人は、天からの使いだったのですよ」
人々の目の前に司祭服を来た男性が。
「え、王様が！」
「驚く必要はありません。元々は私もあの老人に魔法を教わっていた、ただの一般市民だったのですから」
王は目を閉じて、ゆっくりと腕を広げる。ふわふわ。
「私も浮遊の魔法くらいは使えるようになりました。始めのうちは不便でしょうが、お互いに頑張りましょう」
「ところで、国王様は何と言うお名前で？」
一人の女性が問いかけた。
「私には名前がありません。そうですね……全くそのままですが、キング、とでも呼んでください」
そういって微笑むキング。この時、多くの者が人のよさそうな王でよかった、と思ったことだろう。
「国王様！　そこにいらしたのですか！」
「……おお、またうるさいのが来てしまいましたね」
国王に付き添い、身の回りの世話をする者達だろう。声のした方を見ると、何人か黒い服を来た男性がこちらに走って来る。
「まったく、私も大変なものを得てしまったものです」
そう言って再び人々に微笑みかけ、天を仰ぐように手を広げる。さらさら。わずかに風の流れが乱れ、キングの足元に光の輪が現れる。
「それでは、またどこかでお会いしましょう」
ぶわっ。一瞬やや強い風が巻き起こり、人々の髪を乱れさせた後、キングは消えた。
「おお、さすが王様……」

「キング様か。良さそうな人でよかった！」
「魔法の世界もそんなに悪くないかもなぁ」
口々にそう言う人々をよそに、黒い服を来た男性達は少し困ったような顔をしながら徒歩で帰って行った。

信仰の力

しばらくして魔法の力は更に強まってゆき、キングは魔法で土地を自然の状態に戻す活動を始めた。なんでも、魔法は大自然の思念と信じる力を融合したものだから、その思念に近づいていることが重要だとか。そのため、ここも動物から植物にいたる様々な種が生存する緑の街となった。そしてより多くの国民達が、それなりの魔法を使えるようになっていく。……そこまでは良かったのだ。

世界が魔法に満ちていくのに比例するように、ときどき人々の前に異形の生命体が現れるようになった。それらは人々を無差別に攻撃し、殺してしまう。人々はそれを闇の住人と呼び恐れている。

また、闇の住人は自分よりも弱い異形の生命体――魔物を生み出す能力を持っているらしく、魔物はみるみるうちに増殖してしまった。始めこそ、国民達でも充分相手に出来るものが多かったのだが、現在は並み以上の魔法能力を持っていないと、逆にやられてしまうほど危険な状態になってきている。

この時も広場では、人々が魔物に襲われていた。最近では普通な光景になってしまっている。その時、人くらいの大きさはある、巨大なコウモリのようなものが一人の女性を襲う。

「きゃあ！」

「くそっ、これでも食らえ！」

そばにいた男性が火炎の魔法で魔物を攻撃する。魔物はたちまち火だるまとなり、金属が擦れるような鳴き声を上げながら死んだ。

がりっ。

「うわっ」

後ろからもう一匹のコウモリのような魔物が飛び出し、男性の腕に噛みついた。

「このっ、離れろ！」

男性は必死にもがくが、魔物が離れる気配はない。

「離れなさい！　えいっ」
女性が手に持っていた傘に魔力を込めて、何度も魔物を殴った。
やがて魔物は徐々に力を失っていき、力尽きた。
「ふぅ……」
「助かったぜ、ありがとう」
「困った時はお互い様ですよ」
そう言って、にっこりと笑う女性。しかし、まだ気を抜くには早かった。今度は地面から巨大な泥の腕が現れ、二人の体を掴む。
「きゃあ！」
「くそっ、強い……」
女性は掴まれた反動で傘を落としてしまい、攻撃する術がない。男性は唯一使える火炎の魔法で応戦するが、泥の腕には効果がないらしい。よく見れば、周りに居る何人かの人々も泥の腕につかまれていて、掴まれていない人々が助けようと必死になっていた。
「苦しい……助けて、キング様……」
掴む力は徐々に強くなっていき、ぎしぎし、と骨の軋む音がし始める。
「こんな所で、死んでたまるかよ！」
男性は叫ぶが、もはや絶望的な状態であった。その時、
「国民の皆さん。長い間お待たせしてしまいました」
向こうの方から、なにやら宙に浮いた、彫像のようなものが近づいてくる。
「ご安心ください。私が魔物を消し去って見せます」
彫像は女性が背中合わせになったような形をしていて、頭上には金色をした円形の紋章が見える。その上にキングが立って、彫像の動きを操っているようだ。
「さあ、魔物達よ。私の大切な人々を襲った罪は重いですよ……」
キングが胸のあたりで手を合わせ、徐々に放していく。肩幅くらいまで開くと、手と手の間に魔力が集まり、光を放ち始めた。
「これで終わりです」

キングは光の球を潰すように手を叩いた。すると光は波動となって広がり、魔物達の体を貫く。魔物はさらさらと砂状になって消えて行った。しばらくの沈黙の後、歓声と拍手が巻き起こる。

「おお、国王様！」

「キング様……素晴らしい！」

「皆さま、感謝をするのは私の方です。皆さまが私を信じてくれたからこそ、私は強い魔力を手に入れられたのですから……」

「キング様。私は信じます。あなたこそが、この世界を治めるにふさわしい人物だと」

キングによって救われた者達は揃ってキングの絶対を信じ、崇拝した。まるで神のように……そう、この時から徐々に信仰の力が世界に広がっていく事となるのだ。

呼び出されたもの

時は流れ、だんだんと外の空気も冷たくなって来た。空を見上げると、白い鳩が一羽、気持ち良さそうに飛んでいる。魔物さえ現れないでくれれば、この都市も平和で理想的な場所となっていたのだが……

この時、街の広場には国王から一つ、知らせがあると聞いて沢山の人が集まっていた。日が傾きかけていて、あまり離れていると国王の顔が見えない。

「国民の皆様。もうすぐ、皆既日食が起きます。月が太陽を覆い隠すのです。空が真っ暗になってしまうので、いつでも照明の魔法が使えるようにしておくとよいでしょう。照明器具がある方はそれを使っても良いですが、これからのことを考えると、あまり好ましいことではないと思います」

キングが要点を説明し、ひと呼吸を置く。人々は黙ってキングの話を聞いている。

「さて、今度の皆既日食は今までのものとは少し違います。私が未来を予知した時には、とても強い力を感じました。もしかしたら大地が裂けるかもしれません。天が落ちるかもしれません。空が暗くなったら、急いで建物の中に逃げて下さい」

そう言った後、キングが右の人差し指で何もない空間を軽く突いた。すると真っ白な光の球が現れ、辺りを強く照らす。人々の足元から伸びる影が大きく背伸びをした。

「これが照明の魔法です。腕に自信がある方は是非、使ってみて頂ければ。私からの話は以上です。このようなくだらない話を、わざわざ聞きに来て下さったことに感謝します」

キングの足元から伸びる影が揺らめく。

「それでは皆様。大自然の加護がありますように……」

ふわっ。王は消えた。

なにか不思議な空気の漂う石造りの部屋。ここはどこだろうか。部屋の外を確認出来るような扉や窓も存在しない。それ程狭くもなく、だからと言って広くもない。そんな空間に、『背中合わせの女神像』は存在した。

さらさら。小さな風が起きる。すると女神像の表面が、ぱりぱり、と軽い音を立てて剥がれてゆく。そして現れたのは。

「あら？　……時が来たのね」

そう言ったのは、真紅のドレスを着た女性。腰まであるライトオレンジティーの髪に軽く手櫛を入れている。

「そのようですね」

金色の刺繍の入った白いドレスを着た女性は、辺りを見回して状況を確認している。

「何か邪悪な気配を感じます」

「私達のほかにも呼び出された者が居るのね」

「何が目的なのでしょうか……」

「さあ。私達を呼び出した者に聞けば分かるわ」

「ふふっ。そうですね」

「まずはここから出ましょう」

「出口が見当たりませんね。この世界でも移転魔法は使えるのでしょうか」

白いドレスを着た女性が魔法を使おうとした時、カチッ、という何かの装置が作動したような音が鳴る。すると、床板の隙間から緑色の光が差し込んで来る。やがてそれは、ゆらゆらと生きているかのような動きをしながら隙間から出てきて、二人の足元で二つの輪を作った。

「移送法陣にしては、少し不安定ですね」

「転送装置ね。魔法に似せて作られているけど、まだ実用段階ではない、と言ったところかしら」

「二つありますが……どちらに入りますか？」

「そうね。私は右から行くわ」
「では、私は左から行きます」
「どちらが先に」
「私達を呼び出した者に会えるか、ですね。ふふっ」
全てお見通しだ、と言ったように白いドレスの女性が含み笑いをした。
「その通り。じゃあ、行きましょう」
ぶわっ。少し乱暴な風と共に二人は消えた。

大自然の理

「これから私はどうすれば……」
ある街の路地裏で、一人の人間が嘆いていた。その時、どこからともなく……
「あなたは何故、悲しんでいるのですか？」
うなだれる人間の前に、白いドレスを着た女性が現れた。背後から神々しい光が溢れている。これが神という存在だというのは、今の時代に生きる人間ならば誰が見ても分かることだ。
「私はフレイア。愛と美の女神です。私の愛によって、あなたの苦痛を和らげてあげましょう」
「ああ、女神様。私は大切な人を一度に二人も失ったのです。妻と娘が目の前で魔物に食われたのです。しかし、私には強い魔法は使えません。なす術もなく、逃げることしか出来なかったのです」
ひと呼吸置いて、女神は口を開く。
「罪深き人間よ。今一度、あなたに大切な人を蘇らせる機会を与えましょう」
女神フレイアは、何故か少し悲しそうな顔をして続ける。
「ただし、条件があります。あなたの知り合いの中で、一度も親しい人が死んだことのない人の家へ行きなさい。
そしてその家の庭からデイジーの花と、木の葉から落ちる一滴の露を持ってきなさい。この月が満ちるまでに」
空を見てみると、月は既に満ちる寸前だ。もう三度ほど夜が訪れれば、月は完全に満ちるだろう。
「これは試練なのですね……」
「その通りです。自然にかなって廻(めぐ)るはずの魂を、そう簡単に呼び戻すわけにはいきません」
「わかりました。必ずご用意いたします。ですので、月の満ちる晩には必ずここにおいでください」

「もちろんです。さあ、お行きなさい。時間はあまりないのです」
そういうと、人間は風のような速さでどこかに走って行ってしまった。

そして、月が満ちた夜。フレイアと人間が出会った路地裏に人間が姿を現す。
「言ったものは、用意できましたか？」
人間の背後に女神が降臨する。
「女神様、お許しください……出来なかったのです。知り合いを渡り歩いても、誰一人として身寄りの死んだことのない家などはなかったのです」
フレイアは静かに人間を見て言う。
「私は知っていました。人間は必ず、どこかで死ななくてはなりません。残された者は必ず、どこかで悲しまなくてはなりません。それが人の世の理（ことわり）です」
フレイアは静かに瞬きをして、悲しそうな顔をする。
「運命とは残酷なものです。どう頑張ろうとも、人間がその輪から抜け出すことは出来ない……」
「では、何故私達は生まれたのですか。何故生きているのですか。何故、こんなにも苦しまなくてはならないのですか……」
「あれを御覧なさい」
フレイアが天を指さす。
「あそこには雲があります。では、あの雲は何故、あのような形をしているのでしょうか。何故、あの場所に現れたのでしょうか。あなたには説明が出来ますか？　……つまりはそういうことなのです。自然の流れによって出来たものに、理由などは存在しません。自らの存在に理由を求めること。それこそが、すなわちあなたの罪なのです」
「女神様……」
「人間よ。絶えず祈りなさい。全てのものに感謝しなさい。いつも

与え続けなさい。理由など無いのです。理由を求めれば求めるほど、人は苦しまなければならない。それが大自然の理なのですから……」

そう言って、女神は優しい笑みを浮かべると、温かい光と共に消えていった。

《私も祈りましょう。報われぬ魂に救いあらんことを……》

街探し

「ここはどこかしら……とりあえず、街を探しましょう」
一方、真紅のドレスの女性は、キングによって自然に戻された、広い草原に居た。余裕があるのか、暇であるのか分からないが、望遠の魔法を使えば良いものを、あえて使わずに歩き始めた。
「思っていたよりも広いわね。まあいいけど」

それからどれほど歩いただろうか。遠くの方に街が見えてきた。その時、どこからともなく……ひゅるひゅる。何かが飛んでくる音が聞こえる。しかし、女性は気にせず歩き続ける。謎の音はどんどん大きくなってゆく。と、急に女性が立ち止まる。
びゅん。何かが目の前を恐ろしい速さで横切って行った。
「……」
女性は無言で何かが飛んできた方を見る。すると、少し離れた所から、どろどろした謎の液体が噴き出して来た。やがて汚い色をしたそれは、顔の無い人間のような形になり、指先を刃物のように鋭くした。
魔物は鋭くした指のひとつを折る。するとすぐさま新しい指が生え、元通りになった。そして、折ったものの両端を軽くつまんで引っ張ると、一振りの刀ほどの長さになる。これを投げてきたのだろう。
「ねえ、あなた。誰に呼び出されたのか教えてくれないかしら」
女性は問いかける。が、魔物は返事をしない。女性は深くため息をついた。
「駄目ね。もう用は無いわ、消えなさい」
とん、とん。ハイヒールのかかとの部分で二回地面を踏みつける。すると、魔物の足元に真っ黒い穴が現れて、みるみるうちに魔物を飲み込んで行く。当然、魔物は何も出来ないまま、あっけなく穴に

引きずり込まれて消えてしまった。
「やはり、魔物から情報を得るのは無理ね」
そう言って女性は再び歩き出す。

異形なる者

所は変わり、何やら邪悪な気配を漂わせる荒廃した大地。空は暗雲に覆われ、植物も動物も、辺り一面のありとあらゆる生命が死に絶えている。無数に散らばる、白骨化した動物の死骸がとても不気味だ。

そんな死の領域に、一羽の白い鳩が現れた。音すら存在しなかった世界に、鳩のはばたく音が響く。その時突然、びゅう、という音と共に鳩の目の前に竜巻が現れた。竜巻に襲われた鳩はバランスを失い、地面へと一直線に落ちていく。すると竜巻は役目を終えたかのように消えてしまった。

「私としたことが、少し油断してしまいました」

鳩が落ちたと思われる場所には、何故かフレイアが居た。どうやら白い鳩は、フレイアの仮の姿だったらしい。なるべく目立たないように移動する為だろう。フレイアほどの存在ならば、そんなことをしなくても大丈夫なように思えるが。やや辺りを警戒するように見るフレイアだが、特に何もない事を確認すると何事もなかったかのように歩きだす。

相変わらず空は暗雲に覆われていて薄暗い。と、地平線の方から何かの影が現れる。巨大な蜘蛛のような……やがてそれが目の前まで近づいてくる。

「これは、闇の住人……？」

目の前に現れたのは、胸から下が巨大な蜘蛛になった人間、のような生き物。体にあたる部分は毒々しい紫色をしていて、足には木の枝のように鋭くて堅そうな毛が、びっしりと生えている。普通なら気持ち悪くて見てもいられないだろうが……

「あなたは誰に呼び出されたのですか？」

フレイアが問いかけると、地面に伏せていた顔をゆっくりとこち

らに向ける。しかし、返事がない。ただの魔物のようだ。
ぐるん。蜘蛛人間の首が半回転して、空を見るような形になる。そして頭頂部を地面に付け、口を大きく開けたと思うと、何か液体を吐きだした。辺りの地面から煙が出ている所から、強い酸と言ったところだろう。
魔物の攻撃は当たらなかった。にもかかわらず、魔物は醜い笑みを浮かべている。すると、酸がかかった辺りの地面が、少し盛り上がった。すると、にゅるり、といくつもの気持ちの悪い触手が飛び出してきた。
「私としたことが……」
触手が獲物を捕らえようと近づいてくるが、フレイアはとくに動じる様子もなく、落ち着いた様子だ。
「立ち去りなさい。異形なる者よ」
フレイアは静かに警告をした。しかし魔物の動きは止まらない。
「仕方がありませんね」
そう言うとフレイアは手を二回叩いた。するとフレイアを中心に、地面に温かい光が広がる。魔物は一瞬にして消え去り、みるみるうちに暗雲が晴れていく。
「すぐにこの土地も元の姿に戻るでしょう……」
そう言って再び歩き出すフレイア。足元には一輪の花が咲いていた。
「それにしても、先ほどから望遠の魔法で私を見ているのは誰でしょうか……」

占い師の集う街

ここは占い師の集う街、トルデリア。もともと小さな部品を製造していた静かな街だ。世界が魔法に満ちると、やはり多くの人間が自分の未来を気にするようになった。本当に魔法なら永遠を手に入れられるのか、自らが占い師になることによって確かめようとしたのだ。

最近、この都市では占いの材料が入手しやすい事が分かった。そのため占い師が集まり、街は賑やかになっていったようだ。

この日の街は一段と騒がしい。街の占い師達が、広場の真ん中にある噴水を囲むように集まり、話し合いをしているのだ。なんでも、音占い師の使っていた竪琴の弦が何者かによって切られたらしい。

「その時は、確かに周りには誰もいなかったんだ。なのに、少し目を離していた隙に……」

広場の中心にある噴水の縁に座って話す音占い師。

「誰も近づかなくても、今は魔法で何でもできるわ」

すぐ隣で話しているのは愛人の水占い師。

「それなら誰かしらが占えるはずだ。あのソムですら、見る事が出来なかったんだぞ。きっと何か悪いものが居るに違いない」

「俺の夢占いだって完全ではない。占えんこともあるさ」

ソムと呼ばれた男は、音占い師の目の前にあぐらをかいて座り、長いあごひげを触っている。その時、

「あんた、この前音占い師の家に行ったらしいな。何しに行ったんだよ。変な魔法でも掛けたんじゃないのか？」

近くにいた意地の悪そうな女が、隣に居た気の弱そうな女に言った。

「ち、違います！　私はそんなことはしません。ただ、占いに使うものを貰いに行っただけです」

「あんたは花占い師だろ？　そんなもん店で買えるじゃないか」

「たまたま音占い師さんが、お花の種を下さるというから行っただけです……！」
自らの無実を主張する花占い師。
「そういえば、最近見慣れない女がこの辺りに居るよな」
人ごみの中から声がした。
「あの赤いドレスの奴か？」
「勝手に人の家に入ったりしてた、あの変な人のこと？」
その言葉をきっかけに、街の人々は赤いドレスの女が怪しいと騒ぎ出す。
「そうだ、あいつに違いない！」
「あいつはきっと闇の住人なんだ。早く国王様に知らせないと！国王様に滅して頂くんだ！」
「……私のことかしら」
少しため息の混じったその声を聞いた途端、辺りは水を打ったように静かになった。人々が声のした方を見る。噴水の真ん中から吹きだす水の上に、長い髪を風になびかせた、赤いドレスの女が立っている。月明かりに照らされる真紅のドレスは、どことなく人々に狂気を感じさせた。
「なんだ、あれは！」
「見たことのない魔法だな……」
赤いドレスの女は軽く水を蹴り、人ごみの中に降りた。人々は少し距離を置き、赤いドレスの女を囲むような形になった。
「あんた、何処から来た？」
一人の男が話しかける。
「私は何処からも来ていないわ。ずっと昔からここに居たけど」
「嘘をつくな！　最近お前が現れて、変なことをしていると皆が言っているんだぞ！」
「無い罪を咎(とが)めるのは、あまりいい事ではないわね」
意地の悪そうな女が近づいてくる。
「あんたが一番怪しいんだよ。名前も、何処から来たのかも分から

ない。あんた何者だ？」
「私には名前がないのよ。占い師でもなければ、人でもない」
「ほら、やっぱり。こいつは闇の住人なんだ！」
人々が警戒し、いつでも攻撃を仕掛けられるようにしている。
「あなた、鉄屑占い師ね」
「それがどうした」
「自分の占いが当たらないからと言って、嫉妬をしてはいけないわ」
「なんだと？」
「『水占い師には素敵な相手が居て、占いもよく当たる。なのに、どうして自分だけ』」
わずかに人々がざわめく。
「嫉妬をするということは、自分がその人よりも下であるということを認めること。その時点であなたは負けている。それに、あなたは魔法の本質を理解していない。だからあなたには力が与えられないのよ」
「勝手なことを言うな！　第一、証拠がないじゃないか。それに、あんたには自分が無実であると証明できるものもない！」
勝ち誇ったような顔をする鉄屑占い師。
「あるわ。あなたがやたらと人を犯人にしようとしていること。あなた、随分と焦っているのね」
「それだけじゃあたしを犯人に出来ないさ。それに見ず知らずの、あんたの言葉を信じる奴なんかいない！」
そうだ、そうだ、と人々が騒いでいる。
「そうね。それだけでは説得力がない。だけどもし、全てが記録されているとしたら」
鉄屑占い師の顔が一気に青ざめるのが見て分かる。
「これを渡しておくわ。どんな内容なのかはお楽しみよ。良かったわね。呪いの力にだけは恵まれて」
そう言って、不敵な笑みを浮かべた赤いドレスの女。いつの間にか手に持っていた小型録音機を、鉄屑占い師の方に放り投げる。

「私は絶望の中に人間を放り込んで、それを遠くから見ているのが好きなの。その中でもがく人間は何よりも美しい……私は苦痛の表情が好き。どんなに頑張ろうとも、苦痛を偽ることは出来ない。苦痛こそが唯一、目に見える真実。だから私は苦痛の表情が好き。そこには私の求めるものがある……」

少しからかうような顔をしながら言う赤いドレスの女に、もはや何も言えない鉄屑占い師。

「最後にこれだけは教えてあげるわ。私は予言者。次に誰が死ぬかを調べていたのよ」

赤いドレスの女――予言者は鉄屑占い師に近づき、何かをささやいた。一瞬、鉄屑占い師が身震いしたのが分かる。

「これからは、敵に回す相手は間違えないことね。まあ、楽しみにしておきなさい」

ふわっ。予言者は消えた。鉄屑占い師の耳には、今もさっきの言葉が残っている。

《あなた、死ぬわよ――》

いつの間にか街を出ていた予言者は大きなため息をついた。

「全く、これだから人間は嫌いなのよ。まあ、少し遊んでやったからいいけど。それにしても、名前がないのも不便なのね。何か考えておかないと」

予言者は歩き続ける。まだ夜は長い。

毒の呪い

ここはどこかの荒れた山。生命の類(たぐい)は存在せず、巨大な土と岩のオブジェのようだ。日が出ているにもかかわらず、辺りの空気は暗く、重く感じる。そんな乾いた山の、雲が近くに見えるほど高い所。断崖絶壁を恐れる様子もなく歩く、二人の男女が居た。

軽い鎧を着た男性の方は背が高く、細身ではあるが筋肉がついていて力がありそうだ。手には、一昔前ではゲームの世界にしか存在しなかった、剣という武器を持っている。魔力が込めてあるのか、全体が薄く緑色に発光している。

女性の方は黒いローブを着ていて、いかにも呪術師と言ったふうだ。拳ほどの大きさはある、薄い水色の光を放つ水晶玉が付いた、銀色の杖を持っている。

「なにか来る……どうするんだい？」

女性がいかにも呪術師らしい口調で言った。

「分かっている。現れたら、ただ切るのみ」

「あんたも固い奴だねえ。面白みがないよ」

「騎士に余計なものは不要だ」

そんな会話をしている二人の所へ、何かがゆっくりと転がってくる。

「……来たか」

二人の前で止まったそれは、一見ただの岩にしか見えないが、顔が付いているので魔物なのだろう。岩の魔物が軽く飛び跳ねた。どすん。思っていたよりも大きい揺れが起きる。

「下から来るよ！」

「はっ……」

女性は警告したが遅かった。地面から岩で出来た棘が突き出し、男性の右肩を掠(かす)めた。

「仕方がないねえ……『ファーボ・アーノ』」

女性が妖しげな口調で唱えた。使ったのは、呪術の中で最も基本的な『毒の呪い』だ。と言っても呪術は魔法よりも扱うのが難しく、自分に呪いが返ってくることもあるため、相当な鍛練をしなくてはならない。……要約して言えば、この女性は相当強いということだ。

「効いているのか？」

ぴたりとも動かず、じっとこちらを見ている魔物を見ながら、男性が問いかけた。

「大丈夫だよ。もう少しの命さ」

魔物の体にひびが入ってゆく。毒がまわり始めたようだ。ほどなくして、魔物が小刻みに揺れ始める。やがて魔物は、がらがらと音を立てて崩れ去った。

「流石だ、レイミア」

「全く……剣と魔法が合わされば最強だ、なんて言っていたのは誰だか」

レイミアと呼ばれる女性は軽くため息をついた。

「すまない。俺が不甲斐ないばかりに……」

「まあいいよ。魔術に長けている者にしか気づけない攻撃だったからねえ」

「そう言ってもらえると助かる。ところで、魔術には傷を治すものは無いのか」

レイミアは呆れたような笑みを浮かべながら答える。

「あんたねえ、あたしは呪術師だよ。痛みを消すことは出来ても、傷を治すことは出来ないよ」

「そうか、分かった」

「大丈夫そうかい？」

「少し切れただけだ。この程度ならば魔物が出ても、十分まともに戦える。目的の場所まで、あとどのくらいだ？」

「そうだねえ……なんだ、すぐそこに見えてるじゃないか」

レイミアが指をさした先には、少し屈(かが)んでようやく入れるくらいの洞穴があった。

知識の湖

「さあ、早く用を済ませて帰るよ」
「分かっている。行くぞ」
洞穴に入った二人。内部は入り口部分と比べて、天井も少し高く、幅も広くなっていた。更に進むと、とても広い空間があり、そこには光の加減によるものか、青く輝く湖があった。
「おお。噂は本当だったか」
男性が見ているのは湖の中心辺り。そこには小さな島があり、一基の石碑が立っている。
「確かにここに、神が居たんだね……」
「石碑がその証拠だな」
二人は迷うことなく橋を渡り、すぐに石碑の前に着いた。
「何も書かれていないが」
「なんだろうねえ……」
レイミアが軽く石碑に触れた。すると、何かの力によって石碑に傷が付けられてゆき、やがて見たことのない、次のような文章が現れた。

ｑｕｏｄ　ｅｓｔ　ｐａｔｅｆａｃｉｏ？

１ｌｄｓｔｒ
↓　？
２ｙｃｏｓｙｃ

「レイミア。読めるか？」
「……これらの表すものは何か。死者の言葉で書かれているみたい

だねえ」
「なるほど。知識の湖、と言うだけはある。知識を与えるに値する者を選んでいるのだな」
「本当にこれを解けば、また神が現れるんだろうね？」
「そのはずだ。少なくとも、国王が神の類を呼びよせる儀式をしていた事は証明されただろう」

人々の中には、ある噂が立っていた。
『キングのしている儀式は土地を自然に戻すものではなく、異世界の者を呼び出す儀式である』
ある時、一人の魔術師が偶然、キングが儀式をしている所を目撃したらしい。魔術師によれば、その儀式はどう見ても異世界の生命体を呼び出すものだったらしい。
しかし、国民の為に自らが出向いて魔物を消してくれるような人間が、そのような事をするはずがない。そうして生まれたのが、『キングは自然化と称し、何者かが呼びだした闇の住人に対抗できる者を秘かに集めている』という説だ。
更にその直後に、荒れ果てた山にある洞穴に、荘厳（そうごん）な空気を漂わせた謎の女性が入って行くのを見た者が現れたらしい。後をつけてみると、その存在は湖の中心にある小島に石碑を作り、振り向かずに「私は知識の神。私の問いに答えられたなら、あなたの望む知識を与えましょう」
と、隠れている者に聞こえるような声で言った後、消えて行ったそうだ。そのことから、ここは『知識の湖』と呼ばれるようになった。
問いに答えられれば、どんな知識でも手に入る。しかし、今までに何人もの人間が知識を得ようと試みたが、その問いに答えることはおろか、一体どういった問いであるのかさえ、知ることが出来なかったのだ。

今まで隠されてきた力が、たった今解放された。あとは問いに答えるだけだが……
「わからん」
「言わなくてもわかってるよ。あたしがなんとかするから待ってるんだね」
「そう言ってもらえると助かる」
男性は静かに地面に座った。レイミアは唸り声を上げながら、謎という名の敵と戦っている。
「つまりは、この矢印の先に当たる言葉を言えばいいわけだろう？」
「そのはずだ」
「そうだねえ……ん、これは？」
レイミアが何かに気付いたらしい。
「『恐れる』……というと、この数字はずらす数かねえ？」
「分かりそうか」
「頭に着いてる数字は、文字を進める数を表してるんだろうねえ。そうすれば『2』は『等しい』という意味になるから辻褄(つじつま)が合う」
「矢印の先には数字が無い。ということは」
「答えをそのまま言えばいいってことさ」
レイミアは一度深呼吸して続ける。
「皆が等しく恐れるもの、といえば何だい？　あんた、こういうのは得意だろう？」
「……それは『無』だろう。ついでに言えば、知恵が無いのも恐ろしいことだ」
「『無』なら、死者の言葉で言えば『ニヒル』だねえ。やってみようじゃないか。
レイミアは石碑の方にしっかりと体を向けて、ゆっくりと丁寧に言う。
「答えは『ニヒル』だ」

『助ける』とは？

「正解です」
頭上から声が聞こえて来た。すると石碑が音を立てて崩れ、そこに白いドレスを着た女性が降りてくる。背中からは神聖な光が溢れていることから、『当たり』のようだ。
「私は知識の神。あなた達に、知識を得るための器があることを認めます。あなた達の望む知識を与えましょう」
「俺は救いの知識が欲しい。多くの人間を助けられるように」
「よいでしょう。しかし、それには更に大きな器が必要です」
女神は男性を見つめて言った。
「助けるとは、どのような事を言うのでしょう？　その者の『今を助ける』ことでしょうか。その者の『未来を助ける』ことでしょうか」
「……難しい質問だ。しかし、目の前に重い怪我を負った者が居たら、助けない訳にはいかない」
「それによって、その者が未来、死ぬよりも苦しい体験をすることになるとしても？」
「その時はまた、その者の『今を助ける』だろう。俺が思うに、生き物は見ていることしか出来ないことの方が多い。何かの為に何かを出来るなら、それは喜ぶべきことだ。俺たちは今を生きている。今に居ながら過去と未来に居られる、あなたのような存在には到底、理解出来ないことかもしれないが」
男性の意思が強いことは、その眼差しからも見て取れる。
「ふふっ。人間らしい、面白い回答です」
「……くだらないねえ」
男性の背後から下品な笑い声が聞こえた。
「永遠を得るための知識を貰えば、永遠を手に入れられたのに、馬鹿な奴だねえ。まあ、どちらにせよ、あんたはここで死ぬんだけど

ね……」
「レイミア、お前」
ぐちゃっ。気持ちの悪い音が聞こえる。レイミアの背中から、胸のあたりを覆うように六本の鋭い骨が飛び出してきた。
「隣の街から逃げて来た、なんていうのは嘘さ。得体の知れないあたしを、ここまで連れてきてくれた事には感謝するよ」
次は間の抜けたような音と共に、レイミアの両目が地面に落ちた。そして顔に縦の線が入る。額から鼻の先まで綺麗に線が入ると、透明な液が溢れてきた。
「これは……どういうことだ」
「光と闇が合わされば、世界の全てが手に入る」
縦に入った線が、ぱっと開く。そこには邪悪な紫色の瞳をした、巨大な目玉があった。縦に割れた鼻は『瞼』から切り放され、地面に落ちた。
「闇の住人、レイミア……」
女神が少し後ろに下がった。
「そう。魔女名ではなく、本当の名さ」
再び気持ちの悪い音が聞こえる。レイミアの両肩から三本ずつ、ヘドロのような色の触手が飛び出してくる。
ぶしゅっ。レイミアの下半身がもげると同時に、太い触手が飛び出し、蛇のようになった。
「街を救うと言うのも、全て嘘か」
「そのとおり。あたしは神を殺し、神を得る。そして無限を手に入れるために、この世界に呼び出されたのさ」
「誰があなたを呼び出したのですか？」
「それは契約上、教えることは出来ない。あたしはただ、使命を全うするのみ」
「ならば私も、あなたに対して寛容である訳にはいきません……神の名において、汝を滅すと宣言します」
女神の顔つきが変わる。わずかに空間が揺らめくような感覚がし

た。
「神など、その座から引きずり落としてくれる……」
醜い笑みを浮かべるレイミア。
「神よ。俺にやらせてほしい」
両者の間に男性が入って来た。
「あんた、正気かい？　あたしが人間ごときに負けることなんて……」
「間違いなく、俺はお前をその場から移動させることすら出来ずに殺されるだろう。だが、問題はそこではない。俺はお前を助けたい。お前の心が動けば、それで十分だ」
「あたしは闇から生まれた、根っからの悪さ。どう努力しようと、あたしが変わることは無い」
馬鹿にしたような言い方をするレイミア。
「違う。お前はただ、忘れているだけだ。お前がどのような存在であったか、俺には分かる……俺は許さない。お前を闇に陥れた、その存在を」
「固いだけじゃなく、曲げることも出来ないんだねえ。もういいよ……『ファーボ・アーノ』」
男性は苦しそうに胸を押さえ、地面にしゃがみ込む。女神は男性の胸に手のひらを向け、静かに魔法を唱える。
「大いなる生命の力よ。この者にひと時の救いを」
「……神よ。感謝する」
毒を消してもらった男性は胸に左手を当て、女神に軽く頭を下げると、改めてレイミアの方に向きなおした。
「レイミア……」
「あんたも懲りない奴だねえ。これならどうだい？」
やや呆れたような顔をしながら、肩から出ている触手を伸ばす。男性は触手に捕まらないよう、器用に回避を続けるが、ここは湖の中心にある小島。すぐに追い詰められてしまった。
「これで終わりだねえ……」

守るための魔法

「ふんっ」
突然、男性が地面に剣を突き刺した。
「なぎ払え！」
男性に重なるように、一回りも二回りも大きい、体が薄い水色に透き通った騎士が現れ、手に持っている光の剣で触手を大きくなぎ払い、消えた。
「おお……想像以上だよ」
地面に転がった六本の触手は、少しの間動いていたが、すぐに動かなくなった。と、急に女神が口を開く。
「人間よ。あなたは、このような魔物でも助けたいと思いますか」
「もちろんだ。俺の意思は変わらない」
「ふふっ、愚問だったようですね。よいでしょう。あなたに救いの知識を与えます」
「……これは？」
「今、あなたの頭の中には歌が流れているはずです。私と共に唱えて下さい」
二人はレイミアの方を向き、静かに詠唱を始める。
「目覚めなさい、運命の子供たち」
「安らかな眠りはもう終わりだ」
二人から出て来た魔力が空間を揺らすのが分かる。レイミアは少し焦った様子で、後ろに退こうとするが、
「はっ」
地面に縛り付けられているかのように、動くことが出来ない。
「立ち上がりなさい、運命の子供たち」
「真実の光で、我らを導け」
レイミアは魔法を唱えようとするが、その言霊は編み物を解くように、するすると消えてしまう。

「汝、その苦しみから逃れられぬなら」
「今一度の慈悲を与えよう」
「うっ……」
動こうともがくレイミアの体が、みるみるうちに石になってゆく。
「さようなら子供たち」
「また、運命の時まで」
やがて、完全に石像となったレイミア。二人が使ったのは『運命の三姉妹による導き』の魔法。運命の三姉妹の意思を呼び、対象となる相手に一番ふさわしい救いを与える『守るための魔法』だ。
「彼女に与えられた救いは」
「安らかな眠りか」
「はい。彼女には悲しい過去がありました。眠ることを許されず、やがて自らの存在まで忘れてしまった……」
「そうか」
「あなたも、あるべき所へ戻るとよいでしょう。あなたを待ってる人が居ます」
女神が洞窟から出ようとする。
「どこへ行く？」
「私は愛と美の女神、フレイア。あなた達を導くために、正体を隠していたのです。役目を果たした今、この場にとどまる理（ことわり）はもうありません」
「女神フレイアよ。この恩、決して忘れないと誓う」
フレイアは、その言葉を聞いて思い出したように言う。
「岩で四角い柱を作り、それを立てた下に死者を埋めて弔（とむら）いなさい。また、その岩を墓と呼び、多くの者に広めなさい。そうすれば、その先の未来は保証します」
ふふっ、と含み笑いをして、洞窟の出口を指さすフレイア。
「さあ、お行きなさい。勇敢なる騎士よ」
「神の名のもとに」
騎士は再び左手を胸に当て、フレイアに感謝の心を示した後、走

って洞窟から出て行った。
「どうやら、キングという人物が怪しいようですね」
フレイアが洞窟の外に出る。ふと、空を見上げると。
「あれは何でしょうか……」
なにやら島のようなものが、雲より高い位置に浮いている。眼を閉じて、望遠の魔法を使うフレイア。
「宮殿……？　とりあえず、行ってみましょう」
ふわっ。フレイアは消えた。

リザ・ヴェルダット

ある崖には、今まさに飛び降りて自らの命を断とうとしている一人の人間が居た。
「何をしているのかしら」
「ひっ」
びくっ、としていつの間にか後ろにいた女性に顔を向けたのは、髪がぼさぼさで、子汚い布切れを被ったような服装の男性。
「と、止めないでくれよ……もう俺には生きる希望がないんだ」
「そう。なら、最後に理由だけでも教えてくれないかしら」
「ああ、いいだろう。この世の暇乞(いとまご)いになあ……」
男性はしっかりと女性の方に向き直り、座って話し始める。

俺は昔、大統領と共に新しい技術の開発に努めていた。科学の力なら永遠を手に入れられると信じていたんだ。それが今は見ての通り。科学は死んで、魔法だとか言う何かが世界をまとめるだと。
始めは、お前たちのように強くなろうとしたものさ……だけど俺はどんなに頑張っても魔法が使えないんだ。新しい国王様は俺たちみたいな奴の為に、毎日あちこちの土地を自然に戻す儀式をしてくれる。それでも使えないんだ。突然、訳の分からない魔物に襲われて住む所も無くなるし、それなりの魔法を使えなきゃ、周りの奴らにも同等として見てもらえない。俺はこの世界に生きるのに向いてないんだ。だから一足早く、眠りに着かせて貰おうと思ってな。
「キング様の力でも救えない人間は沢山いる。俺のように、な……」
そういって男性はため息をついた。
「キング？」
「国王様の名前だよ。知らないのか？」
「そのキングという人物はどこに居るのかしら」

男性が少し空を見渡すような素振りを見せる。
「キング様なら、この空のどこかにある『パラディソ』と呼ばれる場所の、白い宮殿に住んでるらしい。と言っても、普段は儀式で忙しいから行っても居ないだろうな」
「そう……」
「なら、もういいだろう。どこかへ行ってくれ……」
「あなた、一つだけ教えてあげるわ」
「ああ、なんだい？」
「あなたがここから飛び降りても、あなたに死は与えられない」
「え？」
「あなたがしようとしているのは魂に対する冒涜。魂を冒涜したものに与えられるのは死ではなく、滅というものよ」
「それは死とどう違うんだい？　死ねば全部消えてしまう。人が忌むべきものという意味では、大して変わらないんじゃないのか？」
「死は決して忌むべきものではない。精神と肉体が繋がっているように、生と死も繋がっている。生が甘美なものであったなら、死もまた甘美な夢……」
「それは初耳だな。それが俺と他のやつらの違いってか？」
「そうよ。それを知らずに、あなたのように魂を冒涜すれば、その先の未来も、自由も全て滅せられてしまう。安らかな眠りを与えられることもなく、ただ動くことも出来ずに、自らがどんな姿をしていたかも忘れてしまう。それでもなお、目を閉じることすら許されない。それが滅というもの」
「そうか……なら、俺はどうすればいい？　何で俺を助けるんだ？　俺には何も出来ないのに……」
「あなたがしようとしている事では、あなたの求めるものは手に入らない。だから教えてあげただけ。あなたには、これが見えるかしら」
女性は男性のすぐ隣を指差しているが、何も見えない。
「この場所に、動けずにずっとうずくまっている人が居るのよ。あ

なたと同じことを考えて、ここから身を投げた人。まだ時は浅いから姿は残っているけれど、そのうち目も当てられないような姿になってしまう……あなたにはまだ、一つだけ出来ることがあるわ。もう答えは出ているはずよ」
「分かったよ。もう少しだけでも、頑張ってみるさ。最後に名前を教えてくれないか？　俺みたいな奴がいたら、お前のことを話してやりたいんだ……」
女性は少し黙ったのち、呟くように、
「……リザ・ヴェルダット」
と言った。
「リザ・ヴェルダット？　変わった名前だな」
「リザでいいわ。あなた、崖に向かって右腕を軽く振ってみなさい」
「ん？　……こうか？」
男性が崖の方を向いて腕を振る。ぶわっ、ぶわっ。いくつもの強いかまいたちが発生し、崖の縁を豪快に砕いて粉々にした。
「うわっ」
男性は驚いてリザの方を見たが、もうそこには誰も居なかった。
「……リザ、か」
その言葉は誰も居ない空間に溶けて消えた。
《見える、見えるわ。答えは全てそこにあるのね……》

空に浮かぶ島

空に浮かぶ島、パラディソ。雲や鳥が下に見えるほど高い位置に存在するが、不思議と寒さは感じない。国王の魔法によるものか、はたまた大自然の加護によるものか、真意の程は確かではない。

綺麗な花が咲き乱れ、樹木は小鳥たちと歌っている。まさに楽園と呼ぶに等しい場所だ。奥の方には、この島の半分以上を占めるであろう、白い宮殿がある。が、奇妙な事に、出入口や窓の類は存在しない。

「不思議です……ここの人間達は、どのように宮殿に出入りするのでしょうか」

さらさら。一瞬、フレイアの背後から魔力の気配がした。

「はっ」

「あら、私の方が速いと思っていたのに」

フレイアが振り向いた先には、赤いドレスを着た女性――リザが居た。

「ちょうど今着いたところです」

「……随分と趣味の良い宮殿ね」

リザは出入口の無い宮殿を見て言う。

「姿は隠しますか？」

「いえ、いいわ。姿が見られる事は無いはずだから」

そう言って歩き出すリザ。それに続くフレイア。間もなく宮殿の前に着いた。しかし、二人は足を止めない。このまま行けば、壁にぶつかってしまうが……壁はもう、目の前に迫ってきている。

まさにぶつかる、という瞬間。リザは少しだけ目に力を入れた。すると二人の体は壁をすり抜け、宮殿の中へと入って行ってしまった。

中に入った二人が始めに見たのは、果てしなく真っ白な空間。今

入って来た所を含め、どこを見ても壁というものが見当たらない。
よく見ると、辺りには無数の光るものが浮いている。
「……鏡の破片？」
「そのようね」
よく見ると小さな破片一つ一つに何かが映っている。
「ここは廊下、と言ったところかしら」
そういってリザが一つの破片に触れる。ふわっ。リザが消えた。
フレイアも後に続く。

二人が飛ばされたのは、床に赤い絨毯が敷いてある部屋。前の壁には絵が掛けられている。他には何もない。辺りを照らすものが何も無いというのに、部屋の中は昼のように明るい。
「何の絵でしょうか」
フレイアが目の前にある絵に近づいた。一面が真っ白に塗られているその絵は、一見、雪原のようにも見えたが、ここに描かれているのは砂漠のようだ。下にあるプレートには『砂漠に咲く一輪の花』と書いてある。よく見れば、真ん中よりも少し左下辺りに、小さな花が描いてあるのが分かる。
「これは？」
フレイアが絵の右下を指さした。そこには薄い灰色の文字で『私はもう行ってしまうよ』と書かれていた。
「何のことかしら」
「分かりません……」
「まあいいわ。目的の部屋はここではない」
リザはそう言って後ろを向いたかと思うと、そのまま壁に向かって歩き出した。
「この場所に」
「空間の切れ目があるのですね」
「その通り」
ふわっ。二人は廊下に戻って行った。

「次はどの部屋に行きますか？」
「この中には目的の場所は入っていないわ」
「隠されているのですね」
「その通り。少し手間がかかるわね」
リザはどういうわけか、少し楽しそうな顔をしながら一つの破片に触れた。

未来を見るために

　ふわっ。次の部屋も先ほどの部屋と同じくらいの広さだ。前の壁には、何故か何も入っていない額縁だけが掛けてある。床には大きな円を描くようにローマ数字が書いてあり、中心から外に向かって三本の針が伸びている。

「時計……？　何故この場所にあるのでしょうか」

　時計と呼ばれた物からは、カチカチ、という機械音が聞こえる。しかし、針が動いている様子はなく、ある時を差したまま止まっている。

「植物に似ているわね。人間とは違う時間の中に存在する」

「そのようですね。しかし、時計と空の額縁。どういう理由で……」

「私達に謎解きをしろ、ということかしら」

　リザが額縁から見えている石壁を軽く突きながら言った。

「時計が差しているのは」

「時針が？。分針が？．秒針が？ですね」

「それだけでは分からないわ。他にヒントがあるはずよ」

　ふと額縁の下の方に目をやると。

「『過去を語るな。未来を見るために……』死者の言葉で書いてあるわ」

「こちらにも、何かが書いてありましたよ」

　時計を見ていたフレイアが指をさしているのは分針の先あたり。そこには次のように彫ってあった。

―――――――――――――――――――――

ｍａｋｂｇｅｕ

―――――――――――――――――――――

「少し考える時間が必要ね」

そう言って二人は静かに目を閉じ、暗号の意味を考え始めた。
「この額縁を本来の姿に戻す必要がある」
「何か入れるものを探すのですね。期待に答えて差し上げないと」
一瞬目を開いた二人だが、再び目を閉じて静かになる。

時は満ちた

それからしばらくの時が過ぎた。
「ねえ、あなた」
「どうされましたか」
「そろそろ先に進んでもいいかしら」
「はい、どうぞ」
そう言って微笑んだフレイア。どうやら、リザは既に暗号を解いていたらしい。リザは軽く両腕を広げると、何か――歌のようなものを口ずさむ。
突然リザの体から炎が上がる。いや、正確に言えば、リザの体が炎になっているのだ。程なくして、リザは炎の柱となった。それが妖しげにゆらめきながら、大きな鳥の姿になる。
「キュルルル……」
炎の鳥は翼を大きく広げ、地面を蹴り、額縁の真ん中を目がけて飛んだ。壁に当たると炎の鳥は形を失い、額縁いっぱいに広がって、後ろの壁を焼く。
すると、焼かれている壁の真ん中辺りに、『時は満ちた』という言葉が炙り出されてきた。ぶわっ。炎が壁から離れ、渦を描くように元の位置に飛んでくる。全てが戻って来た時には、すでに元に戻ったリザの姿があった。
「道が開いたわ」
「文字から移送法陣と同じ力を感じます」
ふわっ。躊躇うことなく文字に触れ、次の空間へ飛んだ二人。

大聖堂と思われる場所を歩いている二人。
「ところで、あの暗号はどうやって解いたのですか？」
フレイアが尋ねる。
「あなた、始めから解く気はなかったのね」

「はい」
少し間をおいて、リザは解説をする。要約し、図で示すとこうだ。
時計が差していたのは7、3、4。文字が彫られていたのは分針なので、分針を中心に考え、3、7、4、とする。次に分針に彫られていた文字を、これに当てはめる。文字は三文字以上だったので、4の次はまた3に戻って繰り返す。次にそれぞれのアルファベットを、当てはめられた数の分だけ進める。すると出てくるのは……

3
7
4
3
7
4
3
m
a
k
b
g
e
u
←
←
←
p
h
o
e
n
i
x

「フェニックス。不死鳥という意味の言葉になるのよ」
「そうですか……」
暗号はフレイアの知らない言語で作られていたらしい。説明を聞いても、よく分からないと言ったような顔をしている。
「何故、？から始めたのですか？」
「文字が分針に彫られていたからよ。普通、時計というものは時針から先に読むものだけれど、それによって読む順序を変えたの。そしてそれが正しいかどうかは、実際に試してみれば分かる」
「それでは、なぜ数字の分だけ戻すのではなくて、進めたのですか？」
それを聞いたリザは少し笑みを浮かべてこう言った。
「時は戻せるかしら」
そうしているうちに二人は大聖堂の一番奥、大きなステンドクラスの前に着いていた。

「これは……」

楽園に降臨する者

ステンドグラスに描かれていたのは、二人の女神が光と共に降臨している様子だ。
「ここに私達を呼んだ者が居るのですね」
「ようこそ。私の楽園へ」
頭上から何者かの声が聞こえた。ステンドグラスの裏から、この宮殿の主と思われる人物がすり抜けてくる。
「あなたがキングね」
白い司祭服を着た男性がゆっくりと二人の前に降りた。
「その通り。私がこの国の王、新世界の神となる者です」
「あなた、その姿は作りものでしょう？」
「おお、これは。……さすが、大いなる存在だな」
そう言って、今までのキングからは想像もつかないほど醜い笑みを浮かべ、顔に左手をかざした。
「私はこの時を待っていた……」
大聖堂が光に包まれる。やがてそれが消えてくると、そこに居たのは今までの王とは打って変わって、冷酷で悪知恵の働きそうな顔をした男。
「感謝したまえ。私のおかげで君たちはここに存在出来るのだ」
「別に科学の世界であろうと、存在できなくはないのだけど」
キングは少し首をかしげたが、そのまま続ける。
「君のおかげで私は神になれる。無限を手に入れられる……君は幻想だ。蘇った幻想」
「変な呼び方をしないで」
「形を与えられるのは好きではないのだろう？　知っているよ」
「何でもお見通しなのね」
「私は君の全てを知っている。あの愚民共が私を全知全能であると、心から信じているからな」

そう言って下品な笑みを浮かべるキング。
「この世界を魔法の世界にしたのはあなたね」
「その通り」
「どうやったのか教えてくれないかしら。興味があるわ」
「君は全てを知っているはずだが」
キングがふと、フレイアの方を見る。
「ああ……まあ、いいだろう」

科学が全てを支配していた頃、私はある国の極秘国家技術研究区域、通称『セクターＮＯＣ』で働いていた。表面上では人々の生活に役立つものを開発していることになっていたが、裏では大陸一つを簡単に破壊できるくらい強力な遠隔爆弾や、一定区域内の物体を完全に不可視にすることが出来る、高性能のステルス装置などの開発をしていた。
だが、そんなものはまだ優しかったのだ。ＮＯＣの中心部では、人間をそのまま兵器として扱えるようにする研究が進められていた。壁やセキュリティもすり抜けられ、敵国の重要な施設に直接損傷を与えられる人間兵器。
結局、私の国の大統領は、人間を道具のようにしか思っていなかったのだ。私が求めていたのはこんなものではなかった。私はただ、永遠が欲しかっただけなのに。
始めは科学こそが真実で、科学が発展すれば私達は永遠を手に入れられると思っていた。しかし、研究を進めていくうちに気付いたのだ。科学の力は永遠には届かない。それも当然だ。科学を作っている、人間という存在がすでに無限ではないからだ。有限の存在がいくら努力した所で、生まれてくるのは有限のみ。
そして私は一つの仮説を立てた。この肉体はいずれ朽ちる。ならば精神はどうだろう。存在ではあるが物質ではない。常にそこに意識があれば、精神は永遠に存在できる。そう、君達神のように。
大統領は口癖のように言っていたよ。

『私達は無限を得るために生まれたのだ。自分達が全知全能であると信じて研究しろ。そうすれば無限の力を得られるだろう。信じる力は常識を超えるのだ』

信じる力は常識を超える。だから私は信じる力を利用することにしたのだ。

そして私はある日、肩から指先までのＤＮＡを書き換え、上腕に体内ガスを蓄える器官を作り、体内ガスと脳から出る微弱な電気を手のひらで衝突させることによって、そこから自由に炎を出せるようにする、素晴らしい技術を開発してしまった。この時ばかりは大統領に感謝したよ。これで私が神になる準備が整った。

腕を改造した私はまず、魔法使いになりきることにした。街を行く人々に私の魔法を見せるのだ。

その時には必ず、完璧な変装をした。怪しげな空気を漂わせる老人に見えるように。人々は始めに、私を怪しい老人であると信じる。そして、私の魔法を見るうちに、私が魔法使いであると信じるのだ。もちろんそれは良く出来た手品だ。信じるものが居ない中で、魔法が現れることは無いだろう？　だから私は長い年月をかけて、信じる力を使い、呼んだのだ。魔法を、大いなる存在を。

幸福の果実は不幸を呼ぶ

「そしてそれは叶い、私は本物の魔法を手に入れた。あとは私が絶対の王者になるだけだった」
今まで黙っていたフレイアが口を開く。
「あの魔物達も、闇の住人も、あなたが呼び出したのですか？」
「そのとおり。全て私が呼びだした。突然現れた魔物達に人民たちは逃げ惑うだろう。しかし、王を信仰する者には救いが与えられる。そうと知れば当然、王を信仰しない者は居ないだろう」
それを聞いたフレイアは王を哀れむような目で見る。
「あなたは愚かです。果実は熟し、時が来て初めて得られるものです。高い所にあるからと言って、多くのものを踏み台にして得るものではありません。時が来れば自然に落ちてくる幸福の果実を、取るに値しないまま取れば、それは不幸です」
「泥水の上に家を建てる、とはまさにこのことね」
リザがキングを鼻で笑う。
「あなたが人間として人間らしく生きていれば、その先は保障されたのに」
「保障される必要などない。私は既に、神になる事を保障されているのだからな」
キングが大きく腕を広げ、声を張り上げる。
「改めて名乗ろう。私の名はレックス。この世界の王であり、神になる者」
「人間の分際で、神のまねごとをするのは止めなさい、キング」
「まあ、そう言わないでほしい。これから私は、君たちと同等の存在になるのだから」
「同等？　笑わせないで」
「君達を殺し、儀式を行えば、私は神になれる」
「ええ、なれるわ。私達を殺せたらね」

リザが左手を腰に当て、挑発的な態度を見せた。
「遊びはもう、終わりです」
フレイアの言葉を合図に、キングが右腕を二人に向かって突き出す。キングの背後から高密度の魔力を感じる。
「さあ、まずは新しい魔法の実験台になってもらおう」
「思っていたよりも強そうですね……」
フレイアが静かに魔法を使う。聖域の魔法『サンクチュアリ』だ。神聖なる空間が二人を守る。
「その程度の防御魔法で私の魔法を防げるとでも？　それとも、私をからかっているのか……」
わずかに風の流れを感じた。次の瞬間、普通の人間では立っているのも辛いほどの強風と共に、空気を切り裂くような衝撃波が二人を襲う。白の壁や柱はもちろん、屋根も、床も、全てが衝撃波によって砕かれ、二人に向かって吹き飛んでくる。
さらさら。フレイアの作った聖域により、飛んでくる瓦礫が消えてゆく。
「ああ、私の作った空間が壊れてしまった。他の部屋に居た者は皆、空間と共に塵となってしまっただろう」
わざとらしく言い、また下品な笑みを浮かべるレックス。
「残念です。私の愛でも、あなたは救えない……」
「人の世に、救いなど存在しない。……ああ、犠牲は胸が痛い」
「本当に救いようのない人ね。話はそれだけ？　早く終わらせてしまいたいのだけど」
「甘く見てもらっては困る。これだけだと思っているのなら、それは間違いだ」
先ほどの魔法は収まったものの、まだキングの背後には高密度の魔力が存在している。
「聖域の魔法では、次の一撃は耐えられないだろう」
そう言ってキングが差し出していた右腕を上げ、強く振り下ろす。
「無へと帰すがいい……」

物語は終わらない

「うっ……」
フレイアが僅かによろめく。一瞬で聖域が汚されたのだ。突然、フレイアのドレスに炎が上がる。フレイアを襲った、何かの正体は強い熱線だったのだ。
「あら、意外と強いのね」
特に動じる様子もなく、リザはフレイアの方を向く。
「戻りなさい。あなたのあるべき姿に」
フレイアに向かってそう言うと、焦げていたドレスが何事もなかったかのように元に戻り、焼け焦げた肌も元の綺麗な白に戻っている。
「私としたことが不覚でした。きちんとした防御結界を作らなくては」
「いいえ。もうその必要はないわ」
妖しい笑みを浮かべながら、リザはキングの方を向く。
「見えるわ。あなたの破滅が……」
リザはレックスに対して破滅の予言をした。レックスにとっての破滅とはどのようなものか……
「私にそんなものが効くとでも？　信じる力は常識を超える。多くの人間が私の絶対を信じている限り、いかなる魔法も効かないのだ」
しかし、レックスは知らない。多くの術師達が望遠の魔法を使って、今までのやり取りを見ていたことを。
「ならば、あなたは私に何を求めているのかしら」
リザが意地悪そうに言う。
「私は君を求めているのではない。君を滅ぼす者を求めているのだ。君を滅ぼす者、『怒りの日』は君が存在できる次元にしか存在しない」
レックスは卑しい笑みを浮かべて続ける。

「その前に、しなくてはならないことがあるな。君は何かを忘れているのだ」
「何のことかしら」
「さあ、思い出してごらん。自分がどのような存在だったのかを」
辺りに花のような匂いが広がる。
「追憶の魔法ね。何の匂いかしら」
「これは……おそらく、アスターの花ですね。花言葉は――」
「はっ……」
一瞬、リザが目を見開いた。何かを思い出したのだ。
「思い出したか。甘美な夢を。私の究極の魔法は、たった今完成した。私は人を超え、神になるのだ！」
空間が悲鳴を上げ始めた。
「さあ、ディエス・イレ……」
レックスが天を仰ぎ、叫ぶ。
「アクタ・エスト・ファーブラ！」
神は高らかに宣言した。物語は終わった、と。しかし……
「なぜだ……なぜ終末の声がしない！　世界が滅びなければ、私は神になれない……」
「あら、時が来たわね」
リザがフレイアに言う。
「はい、戻りましょう。あるべき所へ」
そう言って二人は背中合わせになる。すると二人の体が足の方から少しずつ石になっていく。フレイアは胸の前で手を組み、祈りをささげるようなポーズを取る。リザもまた、いつもの腕組みをした。
「なぜだ！　信じる力は常識を超え――」
「もう誰も、あなたのことを信じてはいないわ」
「国民の信じる力がなければ、物語は終わりません」
皮肉にも、レックス自らがそう信じていることによって、物語は終わることが出来ないのだ。それを知らないレックスはただ、自身に与えられた破滅を嘆くことしかできない。やがて二人は完全に元

の石像に戻り、辺りには静寂が訪れた。

エピローグ

それからしばらく経ったある日。すでに闇の住人は消え去り、世は再び科学の世界に戻ろうとしていた。
あれから、あの哀れな人間がどうなったのか、知る者は誰も居ない。もっとも、今となっては知る余地もないだろうが。しかし賢者は知っている。全ての物事は繰り返し続ける、と……

この日も太陽が強く輝いている。街を歩く人々の、足元から伸びる影が、ほんの少し揺らめいた。

《この世界の人間は、そんなに科学が好きなのかしら。まあいいわ。どんなに目に見えるものだけを信じようとも、あなたの隣にはいつも私が存在する……》

運命は世界を壊さなかった。もっとも、時が壊れた世界など、始めから壊れているに等しいのだが。
終わらない小宇宙の乱舞。その中で耳を澄ませて聞くのは何か……

天使よ、眠れ。そして甘美な夢の中へ――

一断章一　哀れで醜く、美しき戦い

大きな月の輝く夜。静かに風の吹き抜ける草原に、少し距離を置くように二人の男女が居た。一方は真っ赤なドレスを着た女性。もう一方は、大きな布切れを体に巻いたような服装の男性。

「取りなさい」

女性がどこからか剣を取り出し、男性の方に放り投げる。剣は男性のそばの地面に刺さった。

ひゅん。男性が剣に触れた時には、既に女性が目の前で剣を振っていた。男性は剣を取り、女性にも劣らぬ速さで攻撃を防ぐ。金属の触れあう音が聞こえる。

「もっと楽しませてよ」

女性は再び距離を置き、横に剣を振る。すると、剣から炎の鳥が現れ、一直線に男性に向かってゆく。

「面白い……」

そう言って指を鳴らす男性。すると地面から巨大な氷の柱が突き出し、向かってくる炎の鳥を貫き、消えた。

相変わらず不敵な笑みを浮かべている両者。女性が、今度は両手でしっかりと剣を持ち、大きくなぎ払うように振る。すると剣に重なるように、巨大な光の剣が現れ、男性を襲う。

ふわっ。男性がその場から消える。

「ふふっ」

女性が後ろを向くと同時に地面を蹴り、後方に飛んだ。びゅん。一瞬前まで女性が居た所にいくつもの光の球が降り注ぐ。見ると球が飛んできた辺りの空中に、消えた男性が居た。

女性は光の弓を作り出し、男性に向けて矢を放つ。螺旋状の尾を引きながら飛ぶそれは、普通のものとは比べ物にならない程の早さで男性の胸へと向かってゆく。

ふわっ。気づけば女性の背後に男性がおり、背中に剣の先を向け

ていた。
「……ぞくぞくするわ」
ぱちん。女性が目にもとまらぬ速さで向けられていた剣を弾き、男性に追撃を試みる。
男性は体を回転させるように体制を立て直し、その攻撃を防ぐ。剣の刃と刃が僅かな狂いもなく、縦にぶつかり合った。
「はっ」
衝撃で後ろにのけぞる二人。男性が右手を差しだす。同時に女性も右手を差しだした。お互いの手を掴み、二人は体勢を元に戻す。ひゅん。元に戻ったと同時に、二人の首にはお互いの剣が突き付けられている。そして笑みを浮かべた二人は再び距離を置き――

風の吹き抜ける静かな草原。二人の男女はそれぞれ、月に反射して青く光る剣を持ち、楽しそうな顔をしながら殺し合いをしている。それはまるで踊るように、美しく、優雅に……

その戦いが終わることは無い。二人は一つであって、一人は二つなのだから。
終わらない小宇宙の乱舞。それは、哀れで醜く、美しき戦い……

ー解説ー　『全体的な世界観』、『魔法と呪いの違い』など

ここでは、小説の中に出て来た設定や、登場人物の名前の由来、それぞれの場面に隠された意図などを、解説と言う形でご紹介したいと思います。

まるで事実のように書いている所がありますが、この先に書かれている事はあくまでも『この小説の中でのお話』です。実際の設定を元に作られたものもありますが、実際のものとは関係がありません。事実を元にして作られたフィクションです。

『全体的な世界観』

この小説を呼んでいると、ギリシャ神話に出てくるポセイドンが居たり、北欧神話に出てくるフレイアが居たり、アルドヴィ・スーラ・アナヒタだとか、ルエヴィトだとか、いろいろな神話の神が出てきていると思います。これは決して、いい加減に名前を付けたからではないのです。

この世界にはいろいろな神様が居ます。こちらの世界の、日本と言う場所にはアマテラスと言う神様が居たり、北欧の方に行けばフレイア、ギリシャの方にはポセイドンが居ます。それは『向こうの世界でも同じ』なのです。夢と現は紙一重と言うように、向こうの世界には人間によって形を与えられた存在は、全て存在します。

今回は言うならば『世界の上半分辺り』までしか書かなかった、と言うことです。下半分はよく知らないので『書けなかった』の方が正しいかもしれませんが……

『名前のある魔法、名前の無い魔法』

この小説には名前のある魔法、詠唱だけの魔法、名前の無い魔法が出てきます。では、どのような違いがあるのか、と言うのをお話ししたいと思います。

魔法と言うのは、大いなる力を利用して放つものです。そのため、力の弱い者、器の小さい者が使うと、使いこなせずに力が暴走したり、力に操られて、やがて死んでしまったりします。それでは殆どの者が魔法を使えない、と言う事で現れたのが『魔法に形を与える』という行為です。魔法の威力は落ちてしまいますが、力の弱い、たとえば人間が魔法を使うとすれば、魔法に合った動作をし、詠唱をし、魔法名を唱え、完璧に形を与えなければいけません。もっと高次元の存在、神になれば、魔法名あるいは詠唱だけで魔法を使えるようになります。

当然の如く、大いなる存在は形も与えず、自由に使う事が出来るので、どんなことでも出来ます。魔法は大いなる存在の一部なのですから。

『魔法と呪いの違い』

第二章と第三章で少し出ています。第三章の文には『呪いは魔法よりも扱うのが難しい』ともあります。なぜかと言うと、単純に力の根源としているものが違うからなのです。

魔法は大いなる力に形を与えて、大自然の力と混ぜ合わせて使います。そのため、雷や炎を敵に当てるなど、自然の力を使って外の世界から影響を与えるものが殆どです。とても使いやすいのですが、放った魔法が外れたり、防がれたりする事があるのが唯一の欠点です。

それに対して呪いは、自分の思念と大いなる力を混ぜ、相手の体内に存在する『生命の息吹』に働きかけるのが普通です。そのため、魔女達の中では『座標』と呼んでいますが、毒を発生させる位置など、一瞬見ただけでも正確に位置を計算、指定出来るくらい、頭の回転が速くないといけません。そして自分の思念を媒体に使っているため、強力ですが失敗した時のリスクが大きいです。

あらゆる生き物の体の構造を理解しておかなければならないのも大変なところです。

第一章の解説　『大いなる存在』、『神の寿命の違い』など

『大いなる存在』
この存在について話せる事は殆どありません。この存在には形を与えてはいけないからです。そのため、この存在の使う魔法も形の無いものが殆どです。

『ルージュ』
第一章での大いなる存在の名前です。名前はフランス語で『赤』を意味します。なお、大いなる存在には形が与えられないので、顔などを細かく描写しているのは第一章のみとなります。

『フレイア』
第一章から第三章まで、いつも大いなる存在の側に居る、こちらの世界では『愛と美の女神』と呼ばれている存在です。唯一、最高位の防御魔法が使える存在でもあります。とても優しい性格で、彼女からは近付いただけでも癒されるような空気を感じます。
しかし、彼女には戦いを楽しむような一面もあります。仲間が危険な状態でも微笑んでいたり、弱い敵に対して必要以上に強い魔法で攻撃をしたり……大いなる存在が知らない過去を、彼女は知っているような様子を見せたりと、謎の多い存在です。

『神の寿命の違い』
結論から言ってしまえば、神は『人間によって形を与えられた存在』です。第二章でフレイアが言ったように、『そこに居て欲しい』と思われたから、そこに存在することが出来るのです。そのため、実は神と人間は関係上『どちらかが上である訳でも、どちらかが下である訳でもない』のです。
と、ここまで書いてしまえば、勘の鋭い方はお気づきになったで

しょう。神にとっての死とは『人間に忘れられること』なのです。人間に忘れられなければ、いつまでも神は存在出来ます。しかし、言い方は悪いですが、影の薄い神などは年月が経つにつれて徐々に死に至ってしまいます。そういう意味でも、次のような事が言えるのです。

『人間も神も、必ず死ぬことになる。どんなに長く生きられると言っても、必ず死ぬという意味では、どの生命もみんな平等』――第八部『終末の音』ルージュの台詞

『ボイルした時計の皮むき』

ある歌の歌詞の一部にもあったようです。

ある科学者は当時では珍しく、ゆで過ぎない卵が好きだったそうです。そのため召使は、その科学者に『三分以上ゆでてはいけませんよ』と言ったそうです。科学者は左手に持った時計を見たまま『わかった』と言いました。あとで召使が様子を見に来ると、その科学者は何故か時計の代わりにゆで卵を持って、卵の代わりに時計をゆでていたそうです。

このことから『あまり意味のない事』と言ったような意味を持っていると言われています。この小説の中では『普通の者には理解できない事』という意味も込めてあります。

『思い出そうとしていた事』

第九部『無限の輪』では、謎の女が『この世の全てが書かれた本』を探し当て、その内容に驚いたのも、つかの間。人間界は消えてしまいました。謎の女は一体何を知って、何を思い出そうとしていたのでしょうか。

残念ながら、この事は本人以外に誰も分からないのです。自分でもその答えは『時が来なければ』分かりません。もし分かったとしても誰かに教えることは出来ないでしょう。それは答えではなくなってしまうのですから……

第二章の解説　『サンサーラ』、『さらさら、の意味』など

『イデア』
大いなる存在が第二章で使う名前の一つです。イデア論という哲学のお話から来ています。話によると『最高度に抽象的な完全不滅の実であり――』とあります。とても大きく、抽象的な存在であると言う事から、大いなる存在に似合っている、と思ったのが名前の由来です。

『グロリア』
イデアがメアリの船に乗った時、この名前になりました。ラテン語で『栄光』を意味する言葉です。

『デア』
昔、人間がグロリアの事をそう呼んでいた、と言う内容の事が書かれています。ラテン語で『女神』を意味します。ちなみに神は『ディオ』と言います。

『エスプリ』
グロリアの記憶にない呼び名です。フランス語で『霊魂』と言う意味です。他にも精神、知性と言った意味もあります。いつ呼ばれていたのかは不明です。もしかしたら女神の姿ではない時のものかも……

『アルドヴィ・スーラ・アナヒタ』
溶岩のような魔物と戦う時に使われた、フレイアの詠唱の一部です。アルドヴィ・スーラ・アナヒタというのは川の女神様の事で、その名からも感じられる通り、他の魔法と比べると相当高位なものになります。大して強くもない相手にこんな魔法を使うフレイアは、

やはり……

『サンサーラ』

第二章の最後に、グロリアが呟いた台詞です。

サンサーラとは、サンスクリット語で『輪廻』を意味する言葉です。この世の全てを表す言葉を、人間の次元に合わせて言うとすると、少し意味は変わって来てしまうけれど『輪廻』ということになるのです。

『三日月形の島』

『どうやらこの島は三日月型になっているらしい』とありますが、実を言うとこれは、次元がばらばらになった時、端にある部分が『飛んでしまった』から、このような形になったのです。その『飛んだ部分』が『廃村の島』なのです。特に深い意味を持たせた訳ではありません……完全に裏話です。

『さらさら、の意味』

第二章では、移動する時の『ふわっ』の他に『さらさら』という言葉が沢山でてきます。

大いなる存在の使う魔法は、殆どが形の無いものです。そのため、大いなる存在が『無意識のうちに魔法を使っている』という可能性が無い訳ではありません。

今回、自分は『さらさら』という表現を『大いなる存在が魔法を使った時』にしか使っていません。と、言う事は……？

『歌のように聞こえる言語』

第二五部『デア』、船内での会話に出てきました。どうやら、大いなる存在と同等の存在にしか伝わらない、特殊な言葉があるようです。フレイアのような高位の神でも『歌のように聞こえる』のがやっとです。

実は、第一章でのルージュの『歌』は、この『歌のように聞こえる言語』だったのです。人間界に居る『謎の女』にもこの言葉が聞こえたのは、謎の女が生き物として優れていたから、そして死に近かったから、つまり天に近くなったからです。

ついでにお話しすると、船内でシルヴィアが聞いた音は、外でメアリ達が戦っている音ではありません。『懐かしいあの音』です。

『ルエヴィトの姿』

こちらの世界では『一二個の顔を持つ』と言われています。闇の住人として扱われていましたが、一応、神の類です。

三人には、ルエヴィトは煙で出来た人のようにしか見えませんでした。それはシルヴィアを含め全員、人間と違う心を持っていたからです。人間よりも大きく、人智を超えるような存在を、鏡は映しようがなかったのです。

最後の時にルエヴィトは『消える』と言いましたが、『神の寿命の違い』にあるように、死んだわけではありません。『正体が暴かれた事により、その鏡を伏せ、『無』を映し出している』のです。

『メアリ復活について』

メアリは最後で、実はテテュスと言う名の海の神だった、ということが明かされています。他の神でも同じ事ですが、生き物の姿を借りている場合、攻撃をされて『事実上、殺された状態』になったとしても、あくまでも『器が崩れた』と言うだけで、その存在が滅されるような事はありません。理由は『神の寿命の違い』にある通りです。形を与えられている限り、存在が消える事はありません。

『闇と星の記憶』

輪廻の話によれば、『闇は星の記憶に追いやられた』とあります。次元が違うとはいえ、全ての記憶があるような大切な場所に、なぜ闇を追いやったのか、と思った方も少なくはないと思います。

理由は簡単です。追いやったのではなく『そこだけ照らせなかった』のです。次元が違うため、どんなに照らしても星の記憶だけは陰になってしまったのです。更に、他の部分が明るくなればなるほど、陰の部分は強くなります。

第三章の解説　『レイミアの過去』、『科学の世界でも存在出来る』など

『人々の求めるもの』

第三章を読んでいる時、科学の世界が魔法の世界に変わる速さに、やや違和感があった方が居るかもしれません。しかし、注目して頂きたかったのは、人々が求めているのは『便利さ』ではなく、『永遠』である。ということです。人々は科学こそが永遠への道であると信じて来ました。しかし、Ｆシリーズなど、科学が充実しても一向に永遠が手に入る様子がありません。

そんな時に『永遠』をほのめかす存在が現れました。そして科学の力に勝ってしまったと知れば、永遠に執着しているこの時代の人々は、喜んで飛びつくことでしょう。

ちなみに、人が死んでしまった時などはロボットがこっそり片づけてくれていました。家族が遺体を見る事はありません。場合によっては記憶を消す処置などをしてもらえます。

『変装の理由』

キングは『外に出て魔法を見せる時、必ず完璧な変装をした』と言います。これにも理由があります。人物検索にかからないようにするためと、『段階的要請法』と言うものを利用するためです。

たとえば、こちらの世界の話ですが、訪問販売に来た人は、資料だけでも貰って下さい、と言って家のドアを開けてもらいます。そして商品の紹介だけでも……から、購入してみませんか、と言う流れにするのです。

小さな事から大きな事へ。まずは男性に止まってもらう、そして自分の手品を見せて……それだけでもキングは十分な魔法使いです。ネーミングのセンスには恵まれなかったようですが。

『故大統領に込めた思い』

キングは人々の前に立った時、『故大統領』という言い方をしました。通常、死んでしまった人を呼ぶ時には、出来る限り『故』と言う言葉を使いません。『死んでしまった人に付ける記号のように使うのは失礼だ』と言う考え方からそのようになった、と言われています。

そうです。キングはそれを知っていて、わざと使ったのです。大統領に対して『あなたはもう不要なものだ』と言ったように、『記号が付けられて扱われるような存在』という念を込めたのです。

『ぶわっ、と、ふわっ』

第三章では、『ぶわっ』と『ふわっ』という表現を使い分けているのにお気づきでしょうか。実は、キングは王になった時点ではまだ、移転の魔法が使えなかったのです。

では何を使って移動していたか。ヒントは大統領官邸にあります。大統領官邸はその周辺に住む人間の想像をも超える位、最先端の技術が使われている所です。内部を移動するのには、まだ普及する段階ではないテレポート装置が使われていました。始めの頃はこれを利用して、あたかも既に移転の魔法が使えるようになったと見せていたため、ぶわっ、という少し乱暴な音を立てていたのです。

大いなる存在とフレイアが女神の姿で現れた時に、部屋から出るために使ったものと同じです。

『リザ・ヴェルダット』

第三章での大いなる存在の名前です。名前は『リザレクション・ヴェルダット』の略で、スペイン語で『蘇った真実』と言う意味があります。

実際のスペイン語では『ヴェルダット』ではなく『ヴェルダ』と発音するそうです。

『科学の世界でも存在出来る』

キングの『感謝したまえ。私のおかげで君たちはここに存在出来るのだ』という発言に対して『別に科学の世界であろうと、存在できなくはないのだけど』と言い返したリザ。
フレイアとリザは、始めから『別の姿を使って存在していた』のです。
『どうやら白い鳩は、フレイアの仮の姿だったらしい』
この事は、フレイアは移動をする時に、白い鳩の姿を借りていた事を示しています。ですが、実はこれ以前にも白い鳩について書かれている場面があります。
『空を見上げると、白い鳩が一羽、気持ち良さそうに飛んでいる』
キングが皆既日食の予言をする頃です。これはフレイアが、白い鳩の姿を借りて、始めからこの世界を見ていた事を表しています。
そしてリザの方ですが、
『キングの足元から伸びる影が揺らめく』
『街を歩く人々の、足元から伸びる影が、ほんの少し揺らめいた』
と言う表現、そしてその先に続く『あなたの隣にはいつも私が存在する……』というリザの台詞から、リザは影としてこの世界を見ていたことを表しています。

『登場する花と、その花言葉』
第三章には二度、花が登場します。一度目はフレイアが人間に試練を与えた時、二度目はリザが何かを思い出した時です。
まずはデージーの花についてお話します。デージーの花言葉を見ると、いくつかあるうちの一つに『あなたと同じ気持ちです』という言葉があります。
つまり、フレイアは花言葉を通じて、『身内が死んで悲しむのは、他の人も皆同じ』と言う事を伝えたかったのです。更にはフレイア自身の『その話を聞いて、あなたと同じ気持ちになりました』という思いも伝えようとしていた事を、後の『報われぬ魂に救いあらん事を』という台詞から滲み出るようにしたのですが、あまり上手く

いかなかったようです……

次にアスターの花です。ピンク色のアスターの花には『甘い夢』と言う花言葉があります。追憶の魔法というのは、匂いを嗅いだ時に昔の記憶が蘇る……と言うお話から来ています。更にそれに花言葉をかけて……

ちなみに、嗅覚などが刺激されて記憶が蘇る事を、その物語の作者に因んで『プルースト現象』と呼ぶそうです。

『レイミアの過去』

知識の神を装っていたフレイアは、『レイミアには悲しい過去があった』と言いました。この設定のもとになったのが次のお話です。

ラミアー、別名レイミアは、古代ギリシャに伝わる恐ろしい食人鬼です。その姿は、腰から下が大蛇である美女、あるいは全身を蛇の鱗で覆った貴婦人だと言われています。ラミアーは、夜の闇にまぎれて子供を連れ去ったり、美しい音色の口笛で若者を誘惑して、それらを生きたままむさぼり食う魔物です。

しかし、ラミアーは、最初から怪物だったわけではありません。かつて彼女は、ゼウスの数多い恋人の一人でした。ラミアーは、父がエジプト王、兄弟がリビアとエジプトの王という高貴な生まれで、たぐいまれな美貌と噂される王女だったので、ゼウスの愛人に選ばれるのは当然の成り行きでした。

しかし、ゼウスの妻、ヘラは非常に嫉妬深く、ラミアーの生んだ子供をすべて殺してしまい、さらに、この後生まれてくる子供もすべて殺すことを告げたのです。これにより、ラミアーは絶望で正気を失い、他の母親から幼い子供をさらって食べてしまう怪物へと化けてしまったのです。

それでもなお、ヘラの嫉妬は収まらず、眠りの神ヒュプノスにラミアーに睡眠を与えてはいけないと命じました。ゼウスは、眠ることすらできず、日夜子供を求めて彷徨い続けるラミアーを哀れに思

い、彼女の両目を取り外すことができるようにしてやりました。それは、『眠ることができないなら、せめて何も見ないでいられる時間を作ってやろう』という、ゼウスの心遣いだったのです。

ラミアーは、目をはずして闇に身を任せている間は、穏やかな表情で至福の笑みを浮かべていると言われます。その笑顔は、まるで子供に添い寝する母親のようで、失った子供たちのことを思い出しているのだろうと言われているほどです。

しかし、その幸福の表情も、彼女の手に握られた目が獲物を見つけると、元の恐ろしい魔物の表情に戻ってしまうのです。

第三章の解説　『レイミアの過去』、『科学の世界でも存在出来る』など（後書

これで解説は終わりです。ここまで読んで下さった皆様、どうもありがとうございました。

この物語には終わりがありません。この物語を生み出した大いなる存在が、終わりの無いものだからです。

ここで解説を終え、ひと段落をつけますが、時が来たら再び連載を開始する予定です。それまでしばらくの間、お待ちいただけたら嬉しいです。

それでは皆さん、さようなら。次に会う時は運命の時。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9350j/

天使は甘美な夢を見る

2011年4月14日14時25分発行